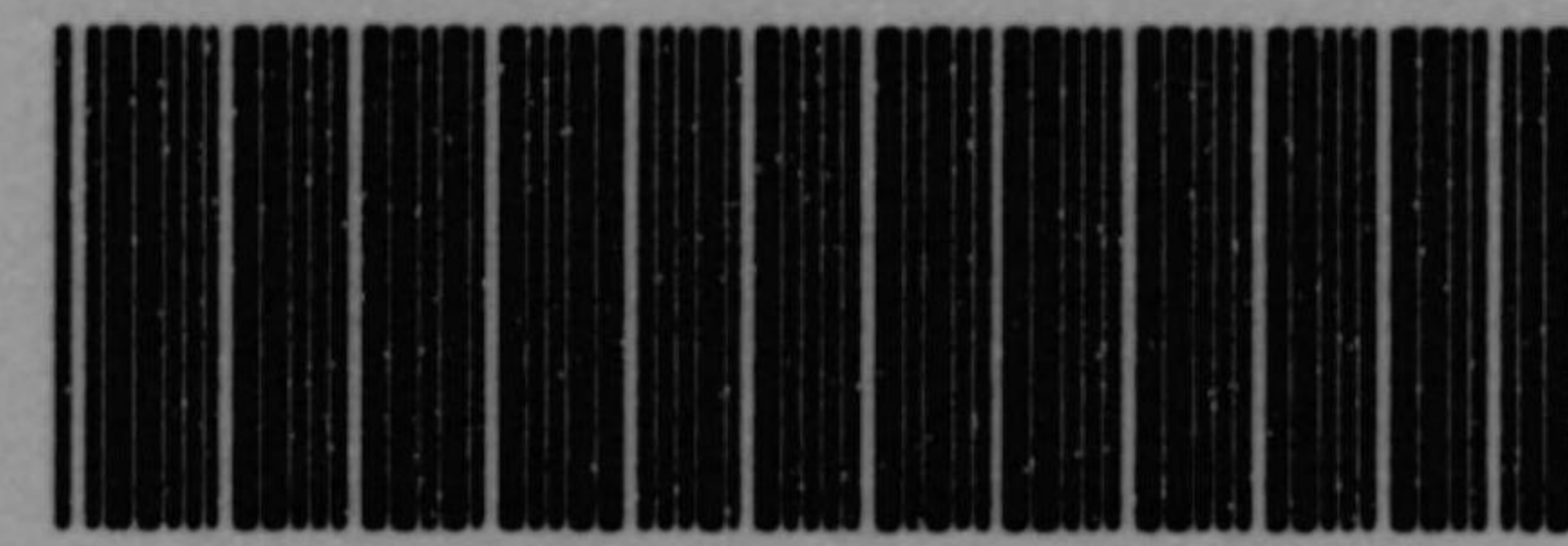


788  
169



\* 0053540000 \*

0053540-000

788-169

海南小記

柳田国男・著

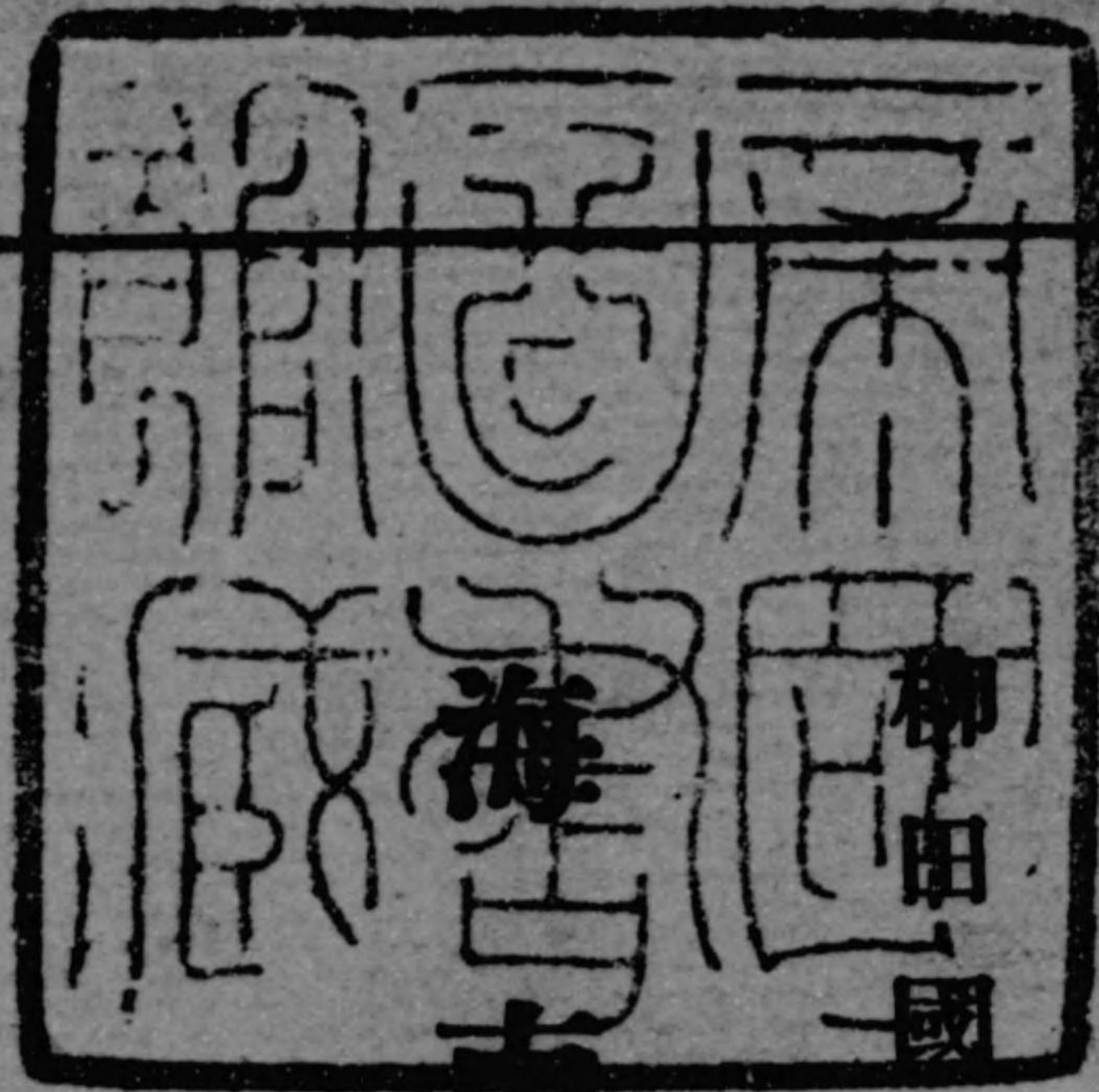
創元社

昭15

AIA

31.10.10

5

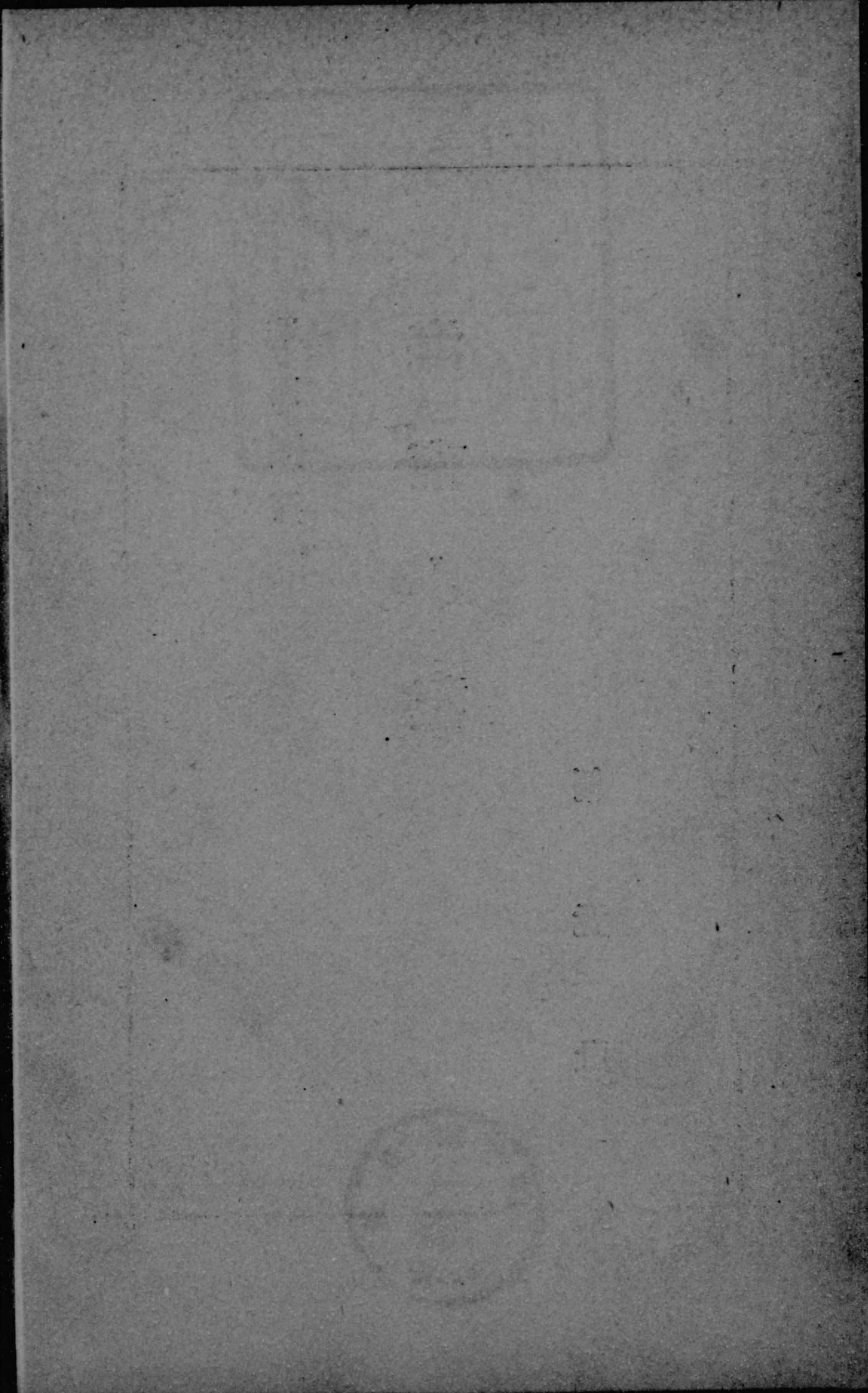
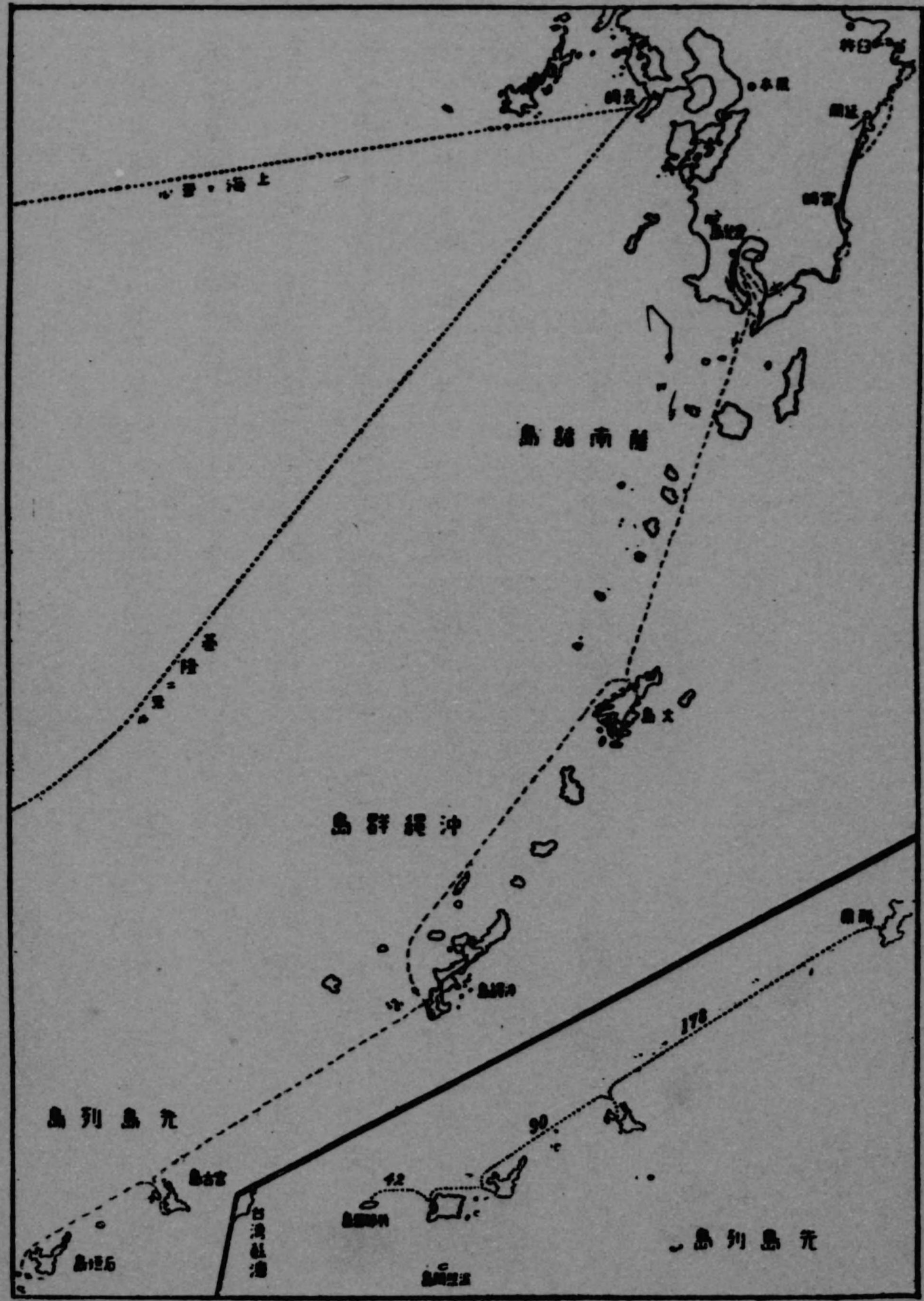


柳田國男著

海南小記

創元社





788

169

## 自序

ジュネヴの冬は寂しかった。岡の並木の散り盡す頃から、霧とも雲の屑ともわからぬものが、明けても暮れても空を蔽ひ、時としては園の梢を隠した。月夜などは忘れてしまふやうであつた。木枯も時雨も此國には無かつたが、四五日に一度づつ、ギーズと云ふしめつた風が湖水を越えて西北から吹いて来て、その度毎に冬を深くした。寒さの頂上と云ふ頃には、或朝は木花が咲く。其時ばかりは霧がすこし薄れて山の眞白な雪が見え、日影がさして鳥の姿などが目に映じた。

遠い東南の虹鮮かなる海の島と、島で行逢うた色々の人と、その折の僅かな旅の日記とを、それからそれへと思ひ出すのは、斯ういふ日の午後の散歩の時であ

つた。自分以外にたゞ一人だけ、沖繩と云ふ島を知つて居る人が、同じこの都のしかも同じ丘に、わづか五六町を隔てゝ住んで居るのだが、それを知りながらも訪ねて話をする事の出来ぬのが、ことに堪へがたい旅人の無聊であつた。

日本では誰知らぬ者も無いチェンバレン教授である。如何した心持からかジユネヴに來て、人に忘れられつゝ靜かに老いんとして居る。家はルッソオ舊居の近くに在つて番地までも自分は知つて居た。先生はラフカディオ・ハアンよりもたしか三つ四つ若かつたから、まだ七十には大分間がある筈だ。ひどく眼が悪くて、其眼は腦から來て居ると云ふことであつた。強ひて面會を求める手紙を出した者もあつたが、病氣に障るからと云ふ代筆の斷りが來たさうだ。秋の初めのまだ暖かい頃までは、それでもジャルダン・アングレエの樹蔭や水の澗を、看護人に伴はれて逍遙して居られるのを、見かねること云ふ人も幾いゝあつた。そんなら自分

よそながら一度はと思つて、折々靜かな午後などに往つて見たこともあつたが、終に目的を達せずして冬になつてしまつた。

ジャン・ロミウと云ふ日本ずきの青年工學士は、サン・ピエル大寺の横手の古本屋で、先生舊藏の若干の和書を買入れた。之を聞いて自分たちも往つて見たが、もう大部分は賣れてしまつて、一冊の日本口語文典だけが残つて居た。有名な先生の自著であつて、しかも澤山の書入が有るのは、疑も無く覆刻の準備であつた。同行の藤井悌君が心を動かして、値段に構はず購つて還つたから、此本ばかりは久しぶりに、再び日本の日の光を見たのである。

日本と此學者との因縁は竝々でなかつた。日本に生れて一生を勉強したものに、チェンバレン氏だけの蒐集と述作とを、遺し得た者は多くなかつた。我々が今頃少しづつ、必要を唱へて居る民俗誌の研究に、彼は遠國から來て三十年前に

手を著けた。アイヌ民族の言語に就いても、大なる感謝は彼に屬する。殊に琉球に至つては、母方の祖父船長ベシル・ホールの曾て訪ひ寄つて、なつかしい見聞録を世に留めた島である。其孫に取つては家の學であり、由緒ある研究でもあつた。定めて人知れぬ愛著を以て、此學問の成長を希うて居たこと、思ふのに、その後先生の跡を踏んで、之を敷衍しようとした者が無いばかりか、不本意なる若干の小誤謬までが、今に其儘にして棄てゝあつて、本だけが所謂珍本と爲つて、読みもせぬ人の本箱の底に追々と隠れて行くのである。先生の今の境遇を知る者には、是は言ひやうも無い寂しさであつた。

運命は此の如く、時としては人間の書齋までを支配する。古代の海洋民族が大移動を記念すべき、有形無形の不思議な遺物、彼等に拮抗して今尙聊かも衰へざる自然力、兩者の妥協を意味する文明の變化、就中血と言語との止む能はざる混

淆が、著しい影響を與へた部曲組織宗教觀念、乃至は藝術様式の島々の特色が、從來曾て見ない強烈なる興味を、諸國の學界に喚び起して、次第に大規模の討査と比較研究とを開始するやうになつたのは、恰かもこの疲れたる老學者が既に其生涯の學業を切上げた際であつた。是から大いに興らうとする新機運に向つては、彼は只一箇有益なる資料たるに止まり、其計畫と希望とには、もう參加することが出来ないのである。況やこの北太平洋の一角に於て、漸く今始まつたばかりの若々しい運動、即ち島に生れた者自らが、島と島との生活の連鎖を、昔に溯つて考へて見ようとする學問の如きは、假令それが先生の深く愛した日本であり、且つ先生の感化が暗々裡に、働いて居ることは確かであつても、其悦びを我々と分つことが、最早出来ない迄に弱つてしまはれた。以前先生が名を聞きながら、手を著ける機會を得なかつた「おもろ御草紙」は、伊波普猷君などの辛苦に由つて今、

現代に蘇らうとして居る。是がたゞ沖繩一島の寶として羨むべきもので無く、此の如き信仰歸依、此の如き情緒を、島に家する者の祖先の心裡に、漲り溢れしむるに至つた最初の力は、獨り血を共にする大八洲の國々のみならず、同じ大海の潮に育まれて、北と南とに吹分けられた、遠い沖の小島の荒えびすの胸にも、なほ一樣に感じられて居たのでは無いか。之を推究してもらひたいのが引續いての我々の願であるが、久しい孤立に馴らされて小さな陸地を國と名づけ、渚から外をよそと考へた人々の、離れくの生涯の勞作が、果していつの世になつたら融け合せて一箇の完成と爲るであらうか。私は斯ういふ外國の學者の老境を眺めるにつけても、散漫なる今までのディレクタンティズムの、罪深さを感じざるを得なかつたのである。

海南小記の如きは、至つて小さな咏歎の記録に過ぎない。もし其中に少しの學

問があるとするれば、それは幸ひにして世を同じうする島々の篤學者の、暗示と感化とに出でたものばかりである。南島研究の新しい機運が、一箇旅人の筆を役して表現したものといふ迄である。唯自分は旅人であつた故に、常に一箇の島の立場からは、この群島の生活を觀なかつた。僅かの世紀の間に作り上げた歴史的差別を標準とはすること無く、南日本の大小遠近の島々に、普遍して居る生活の理法を尋ねて見ようとした。さうして又將來の優れた學者たちが、必ずこの心持を以て、やがて人間の無用なる鬭争を悔い歎き、必ずこの道を歩んで、次第に人種平等の光明世界に、入らんとするだらうと信じて居る。然らば又事業は微小なりと雖、やがて咲き香ふべきものゝ蕾である。歌ひ舞ふべきものゝ卵である。乃ち新しい民俗學の南無菩提の爲に、謹んで此書を以て日本の久しい友、ベシル・ホル・チエンバレン先生の、生御魂に供養し奉る。

(大正十四年四月八日)



目次

序

海南小記

一 からも地帯	三
二 穂門の二夜	八
三 海ゆかば	三
四 ひじりの家	一八
五 水煙る川のほとり	三
六 地の島	二七
七 佐多へ行く路	三三
八 いれずみの南北	三七

九	三太郎坂	四二
一〇	今何時ですか	四四
一一	阿室の女夫松	五〇
一二	三國頭の土	五五
一三	遠く来る神	五九
一四	山原船	六三
一五	猪垣の此方	六六
一六	舊城の花	七三
一七	豆腐の話	七六
一八	七度の解放	八〇
一九	小さな誤解	八四
二〇	久高の尻	九二

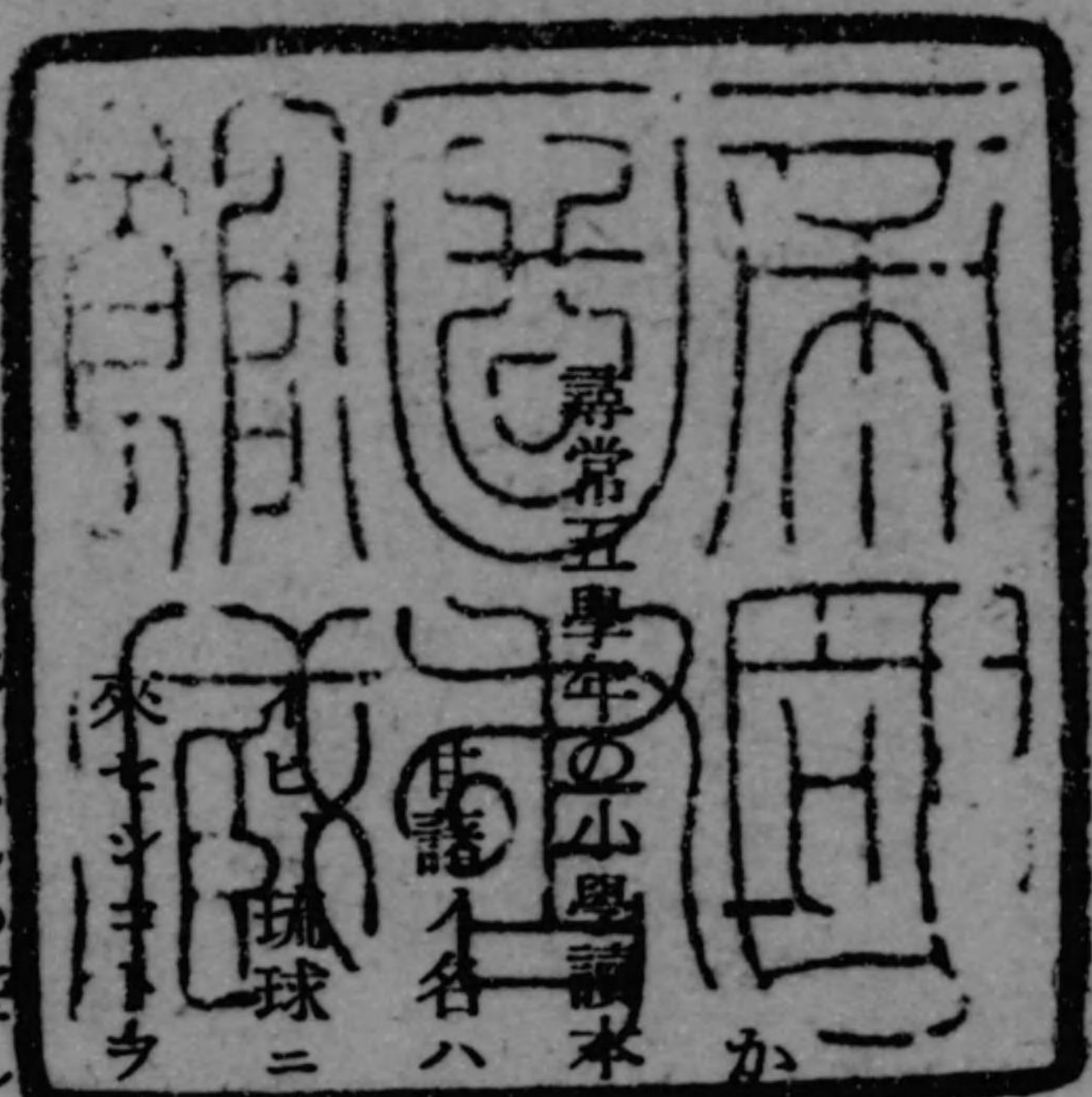
三	干瀬の人生	九六
三	島布と粟	一〇四
三	蘆刈と竈神	一〇八
二四	はかり石	一一三
二五	赤蜂鬼虎	一二六
二六	天宮良橋	一三〇
二七	二色人	一三四
二八	龜恩を知る	一三八
二九	南波照間	一四三
三〇	與那國の女たち	一五七
三一	南の島の清水	一五五

海南小記

附言

炭焼小五郎が事	四
阿遅摩佐の島	一五

海南小記



からいも地帯

尋常五學年の小學讀本の中に、

任諸ノ各ハ地方ニヨリテ異ナリ。關東ニテハ薩摩芋トイヒ、薩摩ニテハ琉球芋トイヒ、琉球ニテハ唐芋トイフ。名稱ノカク異ルヲ以テモ、此芋ノ次第ニ西方ヨリ傳來セシキトラ知ルベシ。

とあるのは、ほんの些しばかりだが間違つて居る。琉球では甘藷を唐芋と謂ふ者は無く、一般に之をンムと呼んで居る。ンムは即ち我々のイモと同じ語である。カライモ又はタウイモと云

ふ名は、弘く南九州一帯に行はれて居る。従つて薩摩でも之を琉球芋と呼ぶことはない。琉球芋と謂つたのは九州の北の一角から中國上方に互る大區域であつたが、後漸く標準語のサツマイモに改まつて行かうとして居るのである。

此類の誤は、子供たちにもよく判ることだから、單に其地方だけの爲にならば、之を訂正する必要は無いかも知れぬ。只氣になるのは之で以て、甘藷は南方よりと謂はずに、西方より傳來したとする推理法である。何となれば薩摩も琉球も、日本の南部である上に、甘藷は更に其南方の、南支那から輸入して來たことが確かだからである。

以前奥州などの田舎の料理には、所謂薩摩芋は椎茸や蓮根と、同等以上の待遇を受けたものだ。それが運送が手軽に成つたばかりか、氣仙あたりの島や半島にまで、とう／＼之を栽培するやうに爲つた結果、大分近頃は平凡化しやうとして居る。之に反して關東の大都會には、八里半の名聲遠く轟き、青木昆陽の墓の前に、焼芋屋の組合が感謝の祭を営むやうな時代が來た。遠州御前崎附近は又事情が別で、薯種を輸入した大澤權右衛門の記念碑は、薯切乾生産業者等

が、主として其建設の爲に奔走したやうである。同じ薩摩芋地帯の僅か數十年の歴史にも、よく見ると是だけの變化が有る。況や當初此物を沖繩に齎した野國總管、夫をヤマトに招き入れた薩州兒水ちんがみづの繼川利右衛門、之を中國へ傳へた石見の薯代官井戸平左衛門等の、二百年前の心持では、果して今現に生じて居る社會上の效果の、どれだけの部分迄を豫期して居たものであつたか。到底我々「おさつ」階級に屬する者の、完全に理解し得る所では無いやうに思はれる。自分は考へる。少くとも是だけは意外の効果では無かつたかと。甘藷考其他の宣傳書を見ると、主として不作の年の百姓飯米を補ひ、或は島の流人等が飢を救ふのを以て、諸の恩澤の至極と認めて居た様である。それが今日では随分宏大な地域に互つて、凶年でも無い年に流人も無い人々が、必ず作り必ず食ふ農作物とは成つて居るのである。斯の如き生活上の變化は、正しく大事業である。しかも二百何十年の歲月より他に、誰が企て、之を爲し遂げたと、云ふ人も別に無かつたのである。

カライモ地帯を旅行して見ると、又新たに國の運命と云ふやうなものを考へさせられる。海

近く日の暖かい唐諸島の一部分は、曾ては疑ひもなく浦人の粟生豆生あはふまのふであつた。こんな雑穀類の調製が面倒で、一人を養ふ爲の面積が多く入用なものより、甘いだけでも唐諸の方が好ましい。其上に世話も入費も概して少なく、凶作の患もすつと減じ得る。沖へ出て行く舟の辨當には、片手で食へるから便利だと云つた婦人もある。かう云ふ考が元になつて、日本人なれども永年の箸と茶碗に分れ、薯の食事を常とする様になつたのである。しかも所謂港田の遠く拓かれ、清水豊かに之を灌ぐやうな濱方に於て、必ずしも急にこの薯作りの生活に移らなかつたのは、何と謂つても米に勝る食物は無いからである。水に乏しい岬や島の蔭で、以前は多分に人を住ましむる望も無かつた島場が、此唐芋の輸入に由つて、初めて或意味に於ける安樂郷と爲り、瞬くうちに今日の如き人口密集を見るに至つたのである。甘藷先生と其先進とがもし出なかつたら、此等の海岸の岡は今尙蒼立雑木立のまゝで、しかも我々は夙に國內に溢れて居たであらう。勿論大いに苦悶しつゝも、既によほどの人数を他國に出して居り、この所謂民族主義の時世に出くはして、今更移民問題に行詰まるやうなこともなかつたであらう。實際この小

な島國の山國に、五千九百萬人を盛り得たのは、一半は即ちカライモの奇蹟である。或は激語してカライモの災ひと謂つた人さへもあるのである。

諸から米への代用食奨励は、成績を挙げにくい事情が少しばかりある。なほに魚類さへ澤山捕つて食へば、營養には心配が無いと誰かは謂つた。或は又此頃の景氣なら、米を買つて食へぬことも無いが、それよりも薯で我慢して居つて、酒を澤山飲んだ方が幸福だと、謂つて居る人も有るさうだ。さうかも知れぬが其我慢だけは女房や子供にさせ、其酒は亭主ばかりが飲むのである。此の如き分配上の慣例は、黙つて見ては居られぬやうな氣がする。

豊後では甘藷をトイモ又はタウイモと謂ふ。しかも此邊は既に自分の謂ふ唐芋地帯に屬して居る。日隅薩の海添には、水に乏しい磯山の蔭にも、薯に由つて多くの小樂天地が出来て居る。海南奄美の列島に渡れば、薯をトンと呼ぶ人々と、ハヌス又はハンスと謂ふ人たちが、相接して住んで居り、其南は即ち沖繩のンム地帯である。更に南すると、之をアッココン又はウンテンなど、稱する先島の諸島があるが、生活の條件は諸島互に頗る相似て居る。南北三百何十

里、中を隔て、廣漠の海がある。薯を此間に傳播し遂げたのは、果して皆偉人の力であらうか。或は又人間の安く活きる必要が、一部分は之を手傳つて斯んな作物を流行させて居るので無いか。自分は今でもまだ之を疑つて居る。

## 二 穗門の二夜

近いうちに土佐の沖へ鮪釣りに出る支度に、臼杵の町へ買物に出て來た機動船に便乗して、風の寒い午後に保土の島へは渡つた、島の郵便局長の家で、此頃買求めた船であつて、前からの機關手の若い朝鮮人がまだ乗つて居る。他の乗組は何れも島の者で、自分などには解らぬくらゐの内地語で、何かこの故參の青年に對して小言を謂つて居る。しかし私に向つては極度に懇切なる人々であつた。又も來られまい、ゆつくり遊んで御出でるがよい。明日は保土の村の夜乞です。小さな神様が御降りになるので、など、謂つてくれる。夜乞とは祭の夜宮のことで

ある。祭禮のことを神の御降りと、まだ此島では謂つて居るのである。

斯んなうれしい島ならば、海が荒れて閉込められても本望だと、只ちよつと考へて見たばかりで、もう早其通りに爲つて居た。船が着いて見ると僅な防波堤の蔭には、早色々の小舟が避難して居る。正面の口からは、波がだぶり／＼と入つて來る。地方の山は一圓の潮曇りであつた。あくる朝も裾を繚へす程の風が西から吹いて居た。對岸の四浦の鼻は手の届くほど近いが、此間はいつも潮が悪いのでよく船が覆へる。とても今日は渡されぬと謂ふから、仕方なしに今一夜とまることにして、それから何遍も村の中をあるいた。全體に平地はちつとも無い島である。見上げるやうな傾斜地に、同じ様な家が境も不分明に建て續けてある。二階と下と別別に、入口を路へ附けて、二戸三戸が一棟の中に住んで居る。肥前の島栖から來た藥屋がこんな事を謂つた。よほど氣を付けぬと、同じ家へ二度入つて笑はれると。家の方でも今一段と必要な訪問者に對しては、おまへは、先程も來たでは無いかと謂ふと。本當にさうかと思つて慌て、還つて行くと村の者も謂つた。

家は近年に爲つて大分増加したのらしい。今でも行當るほど子供や女の數が多いのに、もう半月もすると壹岐五島の方から、三百何十人の男たちが、漁を終つて戻つて来る。其時だけは眞に寝る所も無いさうである。だから半分は人の家に往つて寝る。それを又楽しみにして待ち待たれる若い者が多い。役場の當直室などもやはり借りられる。借ると謂ふよりは單に蒲團を持つて來て休むので、つまり島一つが大家内の一家のやうなものだ。だから其間に挟まつた旅の者には、居心地は決してよくない。

水は四百足らずの竈から、殆ど唯一つの寺の後の泉を汲んで居る。誠に感謝に價する清水であつて、爰でもやはり御大師様水と名づけ、而も其由來はもう説明し得ぬやうに爲つて居る。此靈泉の一つの缺點は、水量が人口に比例して増して來ぬことである。今日の風が雨に爲らぬやうだと、二三日の中には番を附けて、順番で汲ませねばならぬと謂つて居た。尤も風呂の水だけは別にあるが、幾つかの錢湯では祭りの日のせい、いつも裸の人の方が湯の量よりも多い。處々の井戸では洗濯をしながら、女たちが水の湧くのを待つて居る。かと思ふほど水が少ない。

時々船に桶を乗せて、四浦へ汲みに行くさうである。燃料に至つては殆ど全部を外から持つて來ねばならぬ。周一里餘の島は、見た所九分通り畠で、タウイモばかり作るかと思ふ程だが、夫でもまだ足らぬと謂ふ。野菜は自分たちと相乗りして、昨日も澤山に輸入せられた。島には何としても作る餘地が無いのである。段々畑の頂上には、それでも泉を養ふ少しの林が有る。其左手の小さな森は以前の物見所で、登つて見ると中には島人の墓がある。樹の間から伊豫の山が見え、又水之子の燈臺が見える。島の東側もやはり皆畑で、裾の方には四反ほど水田もあり、小舟で島をまはつて之を耕しに行く。之に灌漑する池もあり、折々はそれでも鴨が來て遊ぶ、又海岸の岩の蔭には河童も居る。友達の聲をして寺の和尚を夜中に喚び起し、朝の勤めの木魚を叩かせたと云ふ話もある。狸も何處から渡つたか夫婦二匹だけは居た。其一匹が殺されて、他の一つが大いに荒れたこともあつた。

こんな話を聞きあるいて、夕方に宿の郵便局に歸つて見ると、あの朝鮮人は青い仕事着のままで、にこ／＼と藁仕事をして居る。宵祭の馳走がまだ調はぬうちから、三四人の老女たちが



もう遊びに来て居る。賀茂様の森には燈明がともつて、太鼓と石段の下駄の音とが聞える。ころりと横になると、空には雲があるいて居る。終日白く騒いだ海面が、誰にも顧みられずに暮れてしまふ。其うちに下からは、婆さんたちの歌の聲が聞えて来る。伊勢踊と云ふさうだが、間の延びた伊呂波歌で、弘法大師の事を作つたものらしい。大層調子が揃ふなと思つて覗いて見ると、團扇を叩きながら婆が二人踊つて居た。それから又大に笑ひ、今度は別の歌である。若い後家なら何とかだと歌つて居る。あれは私が可愛さうだから、元氣を付けてやると言つて歌ふのですと言ひながら、室を片付けに来た未亡人は、改めて又眼を拭つて居る。斯う云ふ生活も保土の島には有つたのだ。

次の朝は天気であつたから、思ひ切つて小舟を下させた。すると此婦人を初め二三の島の人々が、今日の祭の案内に、四浦の村々へ餅を持つて一緒に乗つて行く。出て見ると浪はまだ高いが、親類の客や土産の大根葱などを乗せて、もう戻つて来る島の船もある。自分の船にも夥しい重箱の包が有る。いつの間にかこんなに搗いたかと思ふほどの餅である。今日の船は餅船だ。

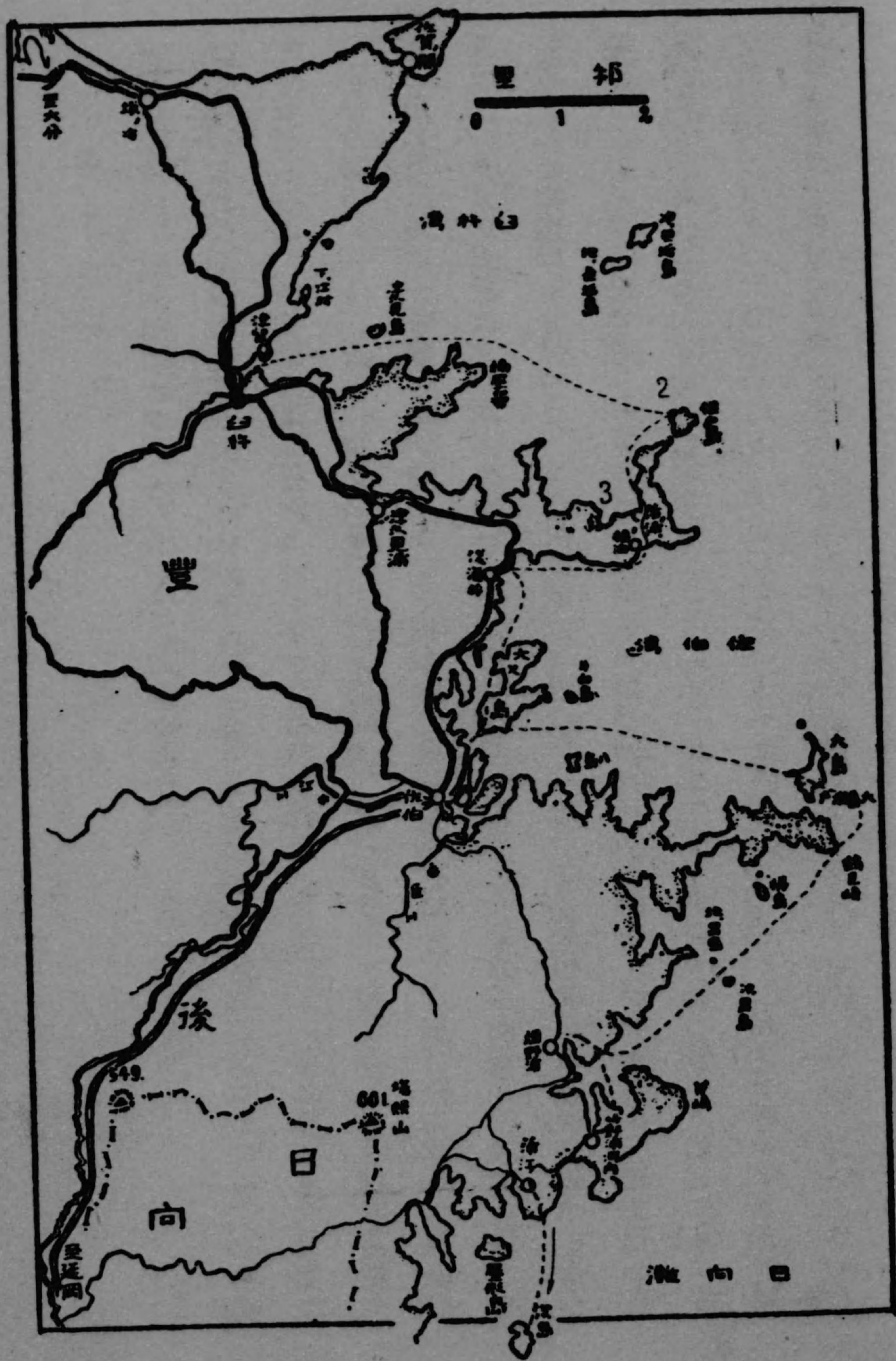
あんた方は餅に便船したやうなもんだと笑ひながら、島の人たちは別れて浦々に上陸し、船には自分等ばかりが淋しく残つた。

### 三 海 ゆ か ば

海で死んだ人の話を幾つも聞いた。越知浦そちのうらでは霧の深い冬の或日の朝、村の某の手繰網の小舟が、からつぽで波に漂ふて居るのを見付け、それから其附近で倅の二十三になる青年の、厚い綿子を着込んだ亡骸を引揚げた。此あけがたに親子で出た筈と、熱心に捜し廻ると三日目に漸く、父親の方も淺ましい姿に爲つて出て来た。常からどうも頑丈とは謂はれぬ息子であつた。多分は櫓の綱でも切れて水に墜ちたのを、後先も考へずに助けに飛込んだものだらうと、今に同情の噂の種に爲つて居る。

船の扱ひは小さいうちから、親が教へる習はしである爲に、折々此様な情無い不幸がある。

保土の島でも二三年前に、他の者より些し先に五島を出た、親子三人の船が戻つて來なかつた。別にひどい大荒れでは無かつたけれども、船が如何にも弱々しい古船であつた。仲間の人たちは蟲が知らせたか、之を氣遣はしがつて色々忠告をした。もう僅か待つて皆と一緒に引上げようぢや無いか。何も一日を争うて還るにも及ぶまいと謂つたが、どうしたものか仕事の都合が有ると、何でも構はずに出帆してしまつた。さうして永遠に何處へか往つてしまつたのである。此附近の村役場には大抵一件か二件、毎年の徴兵事務に際して所在不明者の煩はしい手續を繰返さねばならぬ者がある。それが皆此類の、死んだに相違ない若者ばかりである。身寄や親しかつた人々には、死んだ者よりも猶一層の苦痛を與へる。明かに死んだ者には年忌が有る。假令其時は胸が裂ける程に悲しみ慕うても、月日が立つうちには間が遠くなり、年々の祭や供養が自然の垣根を作つてくれる。之に反してどうして居るか分らぬ人々の幻の始末は、司法や行政の法規よりも更に面倒である。其を考へての思遣りでもあるまいが、漁師たちの方でも行方不明になることを、死ぬより以上の不幸と感じて居るらしい。船の網は大切な物だ。是さへ



有れば死んでも分らなくなるやうなことは無いと、自分を載せた船方なども謂つて居た。さうして又斯んな話もして居つた。

今からちようど二年前に、臼杵の近くに在るセメント會社の工場へ、粘土を運んで来る伊豫の八幡濱やはたはまの船が、豊後水道で難風に遭つて、六人の乗組は悉く死に、船と共に大濱村の浦に漂着した。其人たちは皆船の綱で、しつかりと身體を縛り付けて死んで居たと謂ふ。郡役所の吉野君は之を臨檢に往つたから、よく見て知つて居る。今思つても涙が出ると謂つて居た。よくよく働いたものと見えて、六人ながら手掌の皮が剥けて居た。十五六に爲る少年が先づ斃れたかと思はれ、綱の一番細い處で船にくくり付けてあつた。四人の若者も同じ綱に順々に結ばれて死んで居り、四十二三歳の船長は最後に最も簡単に、太い縄で只一重だけ、腰の周りをゆへて居たと云ふ。こんな立派な覺悟は此仲間でもまだ見たことが無い。一切の帳面と書付類、それから濡れては居たが三百何十圓の紙幣まで、悉く素肌に卷着けてあつたので、一行の書置も無かつたが、頭末は卽座にわかつた。えらい物である。

豊後は舞の本の、百合若大臣の故郷と云ふことに爲つて居る。浦の男女は今既に其歌を忘れてしまつたが、曲に現れた昔の愁と悩みとは相續して居る。玄界の離れ小島では、百合若はひたすらに故郷の家を戀焦れた。ロビンソングルウソ一の物語と比べると、先づ基調に於て全く異つて居るのである。緑丸はロビンソンの犬猫とは違つて、空中自在の靈鳥であつたけれども、主人の旨を承けて豊後の府中へ往來し、其妻子に安否を知らせるのを殆ど唯一の目的として居つた。百合若單衣の白い袖を斷ち切り、紙筆と血で書いて此島に持たせて遣ると、世間知らずの奥方は、大きな硯までも入用かと思つて、之を翼に結付けて還した。緑丸は硯の重さに堪へず、終に玄界の渚に来て死んだとある。坪内先生の説では百合若は即ちユリシスの作り換へと云ふことであるが、鷹の忠義の因縁を嗟歎したのは、恐らく日本の方ばかりであつて、しかも征戰事繁き時代の、所謂春閨夢裡の人々に、新しい哀れを泣かしめたのは、正しく艶に優しいこの島住居の一節であつたらうと思ふ。さうすれば此が又、我邦傳來の海の文學であり、且は海の民の深いなげきの聲でもあつたのだ。

雲海遠く隔たつた宮古の水納島にも、ほと同じやうな大和人の漂流談が有つて、此は百合若とは謂つて居らぬ。硯を負うて流れ着いた鷹の墓は、後世一つの靈場と爲つて居た。秋毎に此墓の上には、多くの鷹が海を渡つて来て休むので、永く新なる感動を人に與へたと謂ふことである。緑丸の翼を休めたと云ふ松は諸國に在る。出羽にも奥州にも此島の爲に築いた塚がある。百合若が後に廻國して供養をしたなど、謂ふは作り事で、多分は遠き昔勇ましい鷹の姿を見て何れの旅人の家でも之を生靈の音信を傳へるものと、考へた名残であらう。絶海の孤島に獨り住む者、或はさうでもして生きて居るかと思ふ者の身内が、稍肌寒い秋なかばに、遙々と渡つて來る鷹の聲を聽いて、忘れ難い有りし日の面影を深めるのは自然である。それと言ふのが無始の昔から、故郷は土であり、子孫は唯一の神主であることを、絶えず信じて居た我々の遺傳が、無意識に海の自由を制限してしまつた、その悲しい鎖國の名残であるかも知れぬ。

## 四 ひじりの家

日向路の五日はいつも良い月夜であつた。最初の晩は土々呂の海濱の松の蔭を、白い細かな砂をきしりつゝ、延岡へと車を走らせた。次の朝早天に出て見たら、薄雪ほどな霜が降つて居た。車の犬が叢を踏むと、其が煙のやうに散るのである。山の紅葉は若い櫨の木ばかりだが、新年も近いのにまだ鮮かに残つて居る。處々の橋の袂、又は藪の片端などに、榎であらうか今散りますとでも云ふやうに、忽然として青い葉をこぼし始め、見て居るうちに散つてしまふ木がある。土持殿の御支配の頃から、否々皇祖御東征よりも更に以前から、海に近い縣の里の野原では、寒い霜夜の月の明方毎に、斯うして物の縁が土に歸して居たのであらうが、或時或旅人が通り過ぎて、之を美しいと見るのは瞬間であるなど、自分は有りふれた斯んな事を考へ出した。それといふのも自分が今尋ねて行く人の境涯が、餘り我々の生活と變つて居る事を、想像しながら來たからであつた。

南方の龍仙寺さんと謂つて尋ねて廻つたが、不思議と誰も知つた人には逢はぬ。そんな筈は無いのだ。内藤家の御祈願所の、隨分名の有る法印さんだと聞いて見る。それならば野田の稻荷山の行者殿に違ひ無い。もう此邊には他に無いからと謂ふので、旭がさして來た松山の霜解を、こつくと登つて見た。縞の着物に角帯の、髪は一寸も延ばした老人が、果して訪ねる谷山さんであつた。日向に移住して來て既に十七代に爲る。本國は大和で谷山覺右衛門と云ふ人土持家の盛りの頃に兵法の師範として、子息の重右衛門を連れて下つて來た。所領は山の麓の大貫村で、野田山に砦を構へ、稻荷は即ち其城内の鎮守であつた。世中が改まつて内藤氏の藩が出來た時、只の臣下で居る代りに山伏に爲つてしまつたが、それでも火事に遭つてこの山上に移つた父の代までは、大貫の元の屋敷に引續いて居たさうである。稻荷大明神の右手には廣い平地が有つて、其中央に井戸がある。之を前に取つて今の住居が、背戸を谷間に臨ませて、幽かながらも城地の佛を遺して居る。明治五年に修驗の職は廢せられたが、關東諸郡の山伏のやうに、神主や只の農家に爲らうとはせず、作州津山の在から潰れ寺の名跡を買ひ、表向き之を引移したのが龍仙寺で、土地の人もまだ其名を知らぬ位である。以前の名は明實院、それ

を法印は御自分の名にして御座る。

鎮守の稻荷様は御寺だけに、だきにてん吃枳尼天として祀つてある。詣る人が今風だから、華曼や提灯の眞赤なものも仕方が無い、自分は歸り途にその数多い鳥居の下を通りながら、是とは縁も無い津輕の海岸の荒濱を思ひ浮べた。今年初秋の風の早大いに冷かな朝であつた。一つ事ばかり考へながら、獨あの濱手の淋しい路を歩いた。曾て深浦沿革史を世に公にした海浦さんと云ふ人は、名が義觀だから或は僧侶だらうとは思つたが、あんな阿倍比羅夫の直系見たやうな、昔の儘の山伏だらうとは考へて居なかつた。自分までどうも五十一代、肉身の相續で此十一面觀世音に御仕へ申すと謂つて居られた。一宗の事相は淵底を究めた篤信の聖である。日本の國風に此ほどよく適合した永い歴史の一宗派を、何で又取潰して只の眞言寺に編入してしまつたかと六尺もある大きな體を前にのし掛かつて、まるで私がさうしたかの如く、眞正面から見詰められる。わしの寺は聖徳太子様の時から、俗生活の儘で成佛する教に基づいて、肉食もすれば妻子も育んで來たものだ。世中が變つたからもう宜しいと、それを大目に見て置かれる寺とは話

が違ふ。世間が八釜しく無いだけで、只の寺に女房を置くのはあれは非如法ぢや、破戒ぢや。わしの方は教理ぢや。手を組んで竝んで行かれるわけが無いのぢやとも言はれた。貴僧を見るに昔を見るやうな氣がします。定めて戰國の頃などは、此地方の勇士の家々と縁組なされ、薙刀などで大いに働いた人たちが、此御寺からも何人か出られたことであらうと謂つて見ても、にこりともせず、此宗派の獨立せねばならぬことを説く人であつた。一度逢つたら忘れ能はざる上人である。

日向の延岡の近くに谷山さんの居らるゝことは、この深浦のひじりから聞いたのである。修驗派獨立の初期の運動に、東京は神田の電車の交叉點の近くで、全國の行人たちが大集會を催した事があつた。其所に兜巾鈴懸の昔のまゝの姿で、期成同盟に馳せ加はつたのは、龍仙寺の法印一人であつたさうだ。自分の寺は舊藩公の時代から、此行装で寺祿を食み祈禱を仰せ付かつて來た。世間を憚かるべき道理は無いと、立派に言切つて居られたと謂ふが、自分が話をした見た感じでは、海浦さんと同様小兒よりも無邪氣で、些しも山伏流の高慢な様子などは無か

つた。

其とは反對に寧ろ寂寞たる陰影が有つた。津輕の御寺でも二三年前に、自分等より大分若い篤學なる嫡子を亡なつた。次男は繪などを描く人である。さうして同志と爲る弟子達が少ない。自分は日向へ來てこの氣の毒な話をする、頻りに谷山さんの顔の色が曇つた。實は私の方でも相續させる積りの倅が死にました。其次は實業の方に居る爲に呼戻しもならず、十五に爲る孫を是から仕立てることになつたとある。其少年は今戸口に立つて、いつまでも歸る自分の後影を見て居るのがさうらしい。自分は旅人だから、勿論すん／＼往つてしまふ。しかもこの閑かな山の寺の人々とても、やはり亦世中の道のあるいて居て、一つ處に永くゝんでは居られぬのである。

##### 五 水煙る川のほとり

飢肥おびの町へは十二年ぶりに入つて來た。町にはまだ貂狐猿羚羊などの皮をぶら下げて賣つて居る。やがて海に入る靜かな川の音、板橋を渡る在所の馬の轟きまで、以前も聽いたやうな氣がしてなつかしい。城迹の木立の松杉は、伐つて又栽ゑた附近の山よりは大いに古く、曾て穴あな生役なまの技藝を盡したかと思ふ石垣の石の色には、歴史の書よりも更に透徹した、懷古の味ひを漂はせて居るが、今の小學校の巨大な建物に、引懸つて居るものは振徳堂の額だけで、百數十年の學徒の勞作や蒐集などは、もう偶然の訪問者等には、ちよつと觀られぬやうな處に藏してあるらしい。さう何時までも昔に滯つては居られぬと感ずる時代は、どこの城下の町にも一度づゝは必ず遣つて來る。或は此邊へは今恰も來て居るのかも知れぬ。九州は全體に人の智惠の能く利用せらるゝ地方なるにも拘らず、政治の中心の地から稍遠過ぎると云ふ不安が、無用に生活の常の道を攪亂する傾きがある。況や海と高山とで遮斷せられた南の果の町が、今は却て昔の要害を悔み、しもせぬ世間の聲に聞耳を立て、見馴れた眼前の物の意味を、假に暫く忘れて居たとしても不思議は無い。

のみならず或時代には、あんまり山から此方ばかりを、我天地として居た爲に、本意でも無

い度々の戦をせねばならなかつた。外部を知ることの多少に従つて、同じ程の智者が成功もすれば蹉跌もした。しかも兎に角名の遺つたのは、此等少数の弘い世中と交渉の有つた人ばかりで與へられたる平和を出来る限り樂み、安閑の生涯を送つて居た多数の高士は、永遠に歴史の表面から消え去つた。要するに斯う云ふ先例の集積したものが、即ち町それ自身であつたのである。都會は一般に現代を小賣する場所だ。従つて飢肥ばかりが古い感情の姨捨山で無かつたら其は寧ろ不自然な現象と謂はねばならぬ。

自分は旅の無聊を奈何ともする能はずして、町の端まであるいて何か見る物を搜した。伊東家は他の諸國の中大名の多数に比べて、更に一段と嚴肅なる墓域を、其舊領の地に構へる権利が有る。昔工藤犬房丸の子孫が遠く下つて、此邊に盤踞しなかつたら、乃ち酒谷盆地の歴史は無いのである。人は省みないがそこいらの松よりも岩よりも、猶古い記念が溢れるほどもあるので、しかも其記念は此川の昨日の水の如く、既に流れて大海の潮にまじつて居る。それに比べると僅に松風の一つの岡を隔て、今も現代の人々が來て歎く一團の墓の方は、さゝやかな

清水のやうなものであつた。日本を大きくしたと云ふ近世二度の戦役に、此ほども死んだかと驚く程、此土地からも多くの若者が、出て戦つて死んで居る。それから其隣の一區劃には、此人たちの叔父の列の數十人が、やはり同じ位の若さで、當時賊と呼ばれた側で戦つて、さうして亦討死をして居るのである。三十二で腹を切つた惜しい新人物、小倉處平の墓を中にして左右に、何れも健氣な名前ばかりだが、世を憚つて齡と斃れた場處の他は刻んで無い。其中にたつた一つ、二十八歳の平部俊彦だけは、祖父の嶠南先生が其碑文を書いて居る。十四で孤兒と爲つてから、先生が傍に置いて親ら之を教育した。夙く經學の要義を解し、文章も少年の作のやうでは無かつたので、東京に居た頃は安井先生も見込が有ると申された。郷里に還つて小學教員をして居る中に、今度の事件が起ると何の躊躇も無く、直ちに出て往つて小隊長に爲つた。さうして立派な死に方をしたと書いてある。當時の遺族の立場は定めし辛かつたであらうのに、半句も説明の辭が無いのは分かつた人である。先生は此時六十三、四つに爲る曾孫が母と共に残された。久しからずして其兒も亦歿したと書いてある。



若い人々の花やかな討死よりも、今に爲つて見ると老學者の生存の方が痛はしい。嶠南翁は明治五年に東京を引上げる前、郷里の家の六鄰莊の記を書いて居られる。頤を支へ窓に凭つて山川を四顧し、遠く荒營古壘の迹を眺めては戰國將士の勞苦を思ひ、城市萬戸の煙を望むときは昭代太平の恵を感じる。夜は高根の月、川の瀬の音、之に對しては酒無くして憂を忘れ、樂せずして長生を求めつべし。後世子孫幸に之を荒すなかれと謂つて居るが、子孫は先づ絶え、もう其屋敷の地には何人が來て住むやら、尋ねて見ても一寸は知れさうに無かつた。翁の遺著には永く世に傳ふべきものが勿論ある。併し之に由つて曾て一たび此學者の切實であつた生活を、果して繋ぎ留めることが出來ようか。我々が求める平和の基礎には、やはり澤山の忘却が必要なのではあるまいかとも思つて見た。

山が近いからか又は此頃の季節の爲か。今朝も大いに立つて居た水煙が、晩方にも酒谷川の流を蔽うて居る。宿の欄干に出て立つと、河原には薄々と月がさして、もう物を洗ふ人の影は無い。前に來て泊つた家も板橋の近くであつたが、二階は無くて門の脇にたしか柳が一本有つ

た。名を忘れたばかりに誰に聞いてももう分らなくなつた。あの時夜更まで來て話した郡長の田内氏を始め、僅か十二年の間に死ぬ人は死に、去る人は遠く去つてしまつた。さうして自分も亦偶然に、今一度過ぎて往くのみである。未來にも仕事がある。強ひてはつきりと此様な昔を、思ひ出さうとするには及ばぬのかも知れぬ。

## 六 地 の 島

九州の東海岸には、忘れられた地の島が幾つも有る。沖の小島の遠く萬人に眺められ、夕日夕月に照され、歌に詠まれ、或時は漕寄せて蔭を求める船あり、清水が有れば來て汲み神を祀り、後には人も住み、風待ちの湊とも爲つて盛衰するのに比べると、此方は目に立たぬ淋しい境涯であつた、いつでも海邊の山の裁ち屑の如く取扱はれて居る。關東で言ふなら相州の江島安房の仁右衛門島、又は常州磯原の天妃山の如き例外は、日向方面に於ては青島がたゞ一つ、

是は幸ひにして満山の蒲葵林が、ちよつと熱帯らしい感じを與へる爲に、見物も來れば繪葉書も出來て居り、何時の間にか彦火々出見尊の御召舟の、無目籠が化して成つたと云ふ、傳説さへも行はれて居る。

其よりも永くなつかしいのは、豊後では臼杵灣頭の津久見島である。山が険しい爲か此島ばかり、保安林に編入せられる以前も一向に斧斤を知らず、隙間も無く茂つた緑の樹の中から、色々の鳥の聲が遠く波の上の舟まで聞える。今は目白の名所だと謂ふが、ツグミと呼ぶのもやはり鳥の名から始まつたやうに思ふ。農家が只一戸對岸から渡つて小屋を構へ僅かの薯蕷を作つて居る。シヤアの村からも、稀に枯枝を拾ひに來る位で、人の歴史には縁の薄い島らしい。

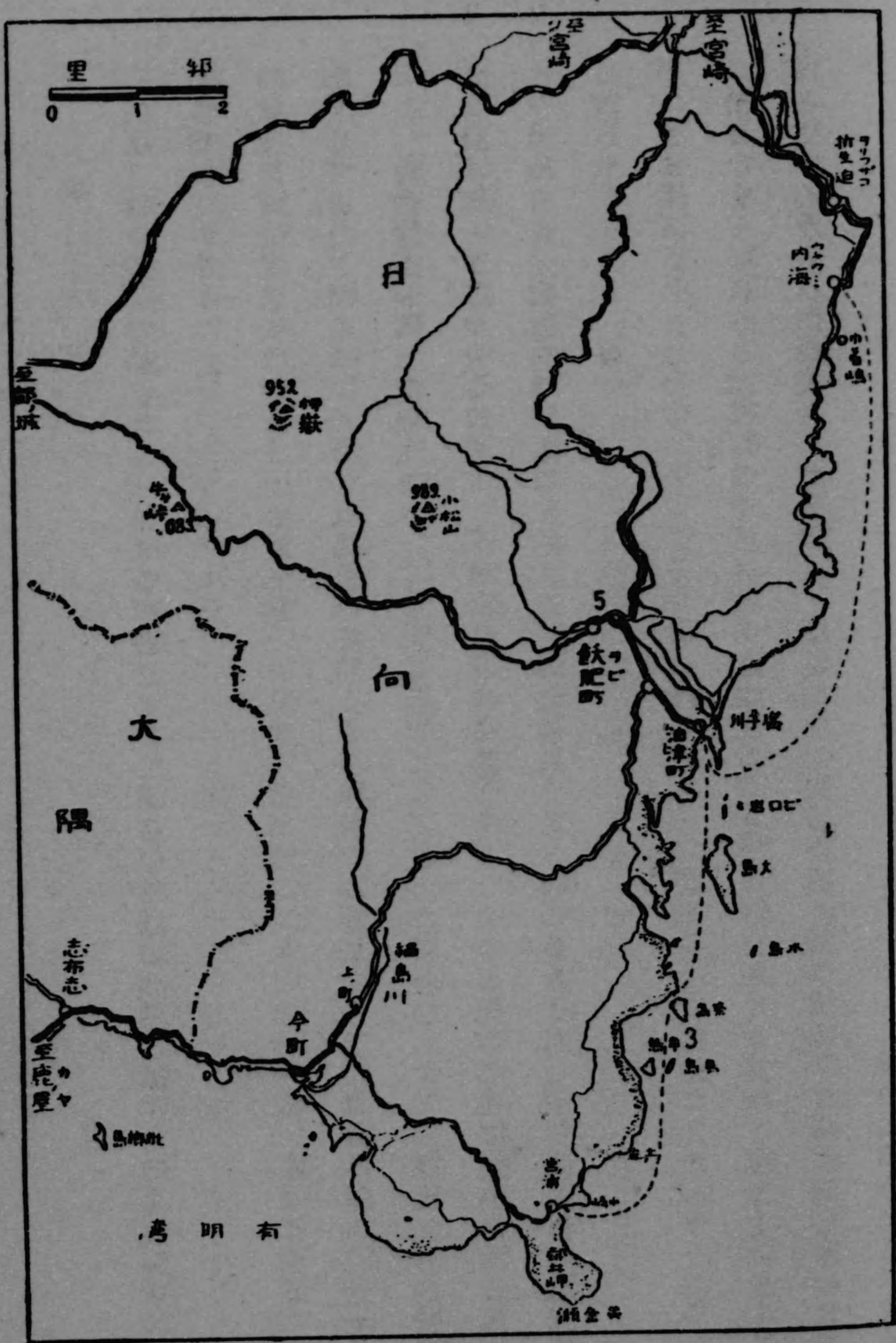
そこから出て來ると、左手の海上に沖の無垢島と地の無垢島が見え、次第に前に話をした保土の島に近づくのである。保土の山に登ると佐伯灣を隔て、南に鶴見崎に接して大島と云ふのが指點せられる。保土から移住したと云ふ舊家なども有るさうだ。此入海では大入島が最も大きく、幾つかの網代と美しい清水とがある。娘たちが帆を操つて毎日町に往來して居る村で

ある。又人は住まずして耕地ばかりの島も有る。中浦の沿岸を東へ進んで、大島の瀬戸を通り抜けると、鶴見の鼻から芹崎までの間に、多くの小さな無人島が連つて居る。地の黒島と沖の黒島との中を船は行くが、沖黒島の方には蒲葵が生えて居る。蒲江の港の口には島が又二つあつて、その遠い方の深島には、人も住み學校も有り、蒲葵の林も有ると云ふ話であつたが、もう夕方に爲つて其風情を見ることは出來なかつた。

日向路では東臼杵の富高の邊に、二つ三つの地の島が車の上からも見える。今や既に單純な草山である。其東の沖にも一の枇榔島があるのだが、懸離れて居て様子が分らぬ。是から南はずつと青島の邊まで、川毎に砂を押し出して長濱を作り、以前は地の島であつたらしいものが、多く地續きの岡に爲つて居る。内海港の南の中着島なども、島は名ばかりで今は一個の岬である。九州一の良い港を、あたら僅かの新田の爲に淺くしてしまつたと謂ふ外浦の堤も、やはり大きな地の島を引寄せて繋いだもので、之を爲し遂げたのは人よりも二つの川の泥であつた。出雲風土記などでは國神の偉功に算へたほどの地變でも、時代が後であつたばかりに飢肥の海

邊では、咲き榮えた靜かな文明を一朝に滅したのである。油津の繁華は恐らくは是から移つたものだらうが、依然たる昔の小場島大島は、此が爲に能く外洋の波濤を防ぎ、又參差たる入江の風光を衛つて居る。嘉永の頃までは此大島には人家は無かつた。藩の牧場として久しく良馬を産して居たと謂ふのは、多分駿馬を龍の種とする思想の繼續であらう。目井の津まで二十餘町、一の船着きも無かつた荒濱から、若駒を牽き出して往つた勇ましい光景が想像せられる。小場島は即ち亦蒲葵の島のことで、曾ては此島にも繁茂したものと思ふ。更に南に進んで市木村の築島にも、處々に同じ木の林がある。船から見える三四戸の農家が、塗壁瓦葺きの中國邊と同じやうな構で、蒲葵の白い葉の葉隠れに、立つて居るのは面白い。上つて遊んで行きたいやうな氣持がした。

築島の蔭を離れると、次に鳥島と幸島とが現れる。幸島は少し大きくて周りが二十何町、一段と陸地に近い。松の密生した背面を、船は通つて行くのである。猿が多く居るので知られて居る。猿の中に只一軒、番人見たやうに住んで居る人が、手船を漕いで時折陸の方へ往來する



外に、あまり来て見る者は無いさうである。猿も淋しいと云ふわけか、遊びに出かけることがある。一匹ぐらゐは見えさうなものと、船窓に凭つていつ迄も眺めたが、こんな風の寒い日には出ますまい、夏ならば毎日のやうにあの邊の岩に降りて、蟻を採つて食べて居ますがとある。いつまで斯んな小さな島に、平安で有り得るかと思ふと、猿ばかりの問題では無いやうな氣がして來た。

それから自分は都井の宮浦に上陸して、牧の野馬を見に岬の鼻まで往つた。高鍋藩の經營した、此も至つて古い海の牧場で、所謂福島馬の故郷である。今や馬種の改良が盛んに行はれて居る。御崎社内の野生蘇鐵と共に、「此山の猪捕るべからず」の制札を以て、天然記念物の野猪は保存せられて居るが、人作の福島馬のみはえらい虐待で、牡は悉く二歳に爲る前に、牧から追はれて試情馬などの淺ましい生活を送つて居り、之に代つて異國の種馬が、來つて極端の幸福を味はつて居る。

此から峠を又一つ越えると、福島町の町が見える。即ち中世の櫛間院くしまのいんの地であつて、クシは即

ち亦岬の古語である。入海を隔て、志布志の蒲葵島が美しく、其向ふには大隅の山が見える。大隅のスミはやはり亦、シマのことだらうと考へられた。

## 七 佐多へ行く路

島泊の漁村は僅かな磯山川の川尻に固まつて居る。爰にも小さな地の島が一つ、殆ど砂濱に續かんとする地位で、南海の風を遮つて立つて居る。昨夜夜半の大雨には、沿岸のボケ網舟は悉くぬれて戻つて來たが、此浦でも家の數より多いかと思ふ刺子の仕事着が、磯の大岩小岩にすらりと掛けて乾してある。さうして男たちはまだ寝て居るらしい。今日は大晦日だが、新で正月をする人は此村には居ない。

伊座敷の町からこの島泊まで、元は一番高い山の八分まで登つて越えるのが、近い故に唯一の通路であつた。然るに隣の西方區を通つて、最近に一間幅の路を一建立で開いた人がある。

それが豊後から來た炭焼だと聞いたときは、何だか古い物語のやうで嬉しかつた。炭焼は十年の勤儉で拵へた家屋敷を賣拂ひ、まだ入費が足らぬのでわざ／＼國へ金を取りに行つて來た。さうして出來上つた新道の片端に、かの小五郎の小屋の如きものを建て、住んで居る。どうして斯んな志を立てたか、又末には如何なる果報が來るものやら、自分などには分らずに終りさうである。

九州も爰まで來ると、眞に國の端と云ふ感じが強い。浅い山を拓けるだけは薯蕷にした爲に降るほどの雨が悉く谷川に出してしまひ、溢れて通路の草を漂はし、やがて皆海に吞まれて行く。徒涉りがすむと直に坂を登り、越えてしまふと又小川だ。坂も多いが曲り角も多い。三町と同じ方を向いて進むことが無い。樹の間からは大抵海が見え、清々とした聲で頬白などは、沖を見ながら轉つて居る。風がいつでも少しづつ吹いて居る。

尾波瀬で一旦又海の渚に下り、村の後の放牧地を通つて、草山を十町ばかりも行くと、今度は外海の濱に出で、中央の山路と一つに成る。大泊と謂つて、むかし種子島へ渡つた船着きで

ある。もう汽船の世中に爲つて、只の漁村に復つて了つたが、それでも松飾りをして春を迎へんとする帆船が二隻、入つて来て繫つて居る。歸りに見ると紅い國旗を立て、居た。小學校でも頻りに式場を用意して居る。岬の端まではまだ一里半もある。燈臺の人たちに子供が有つたら爰迄通つて來ねばならぬのだ。中間に田尻の部落はあるが、分教場すらも此には置いて無い。田尻は廣々とした石の多い濱である。其名の如く峠道の右左に、若干の水田を持つて村人は登つて耕して居る。村の周圍には蘇鐵が多い。此が自然に繁殖して居るのを見ると、御崎神社を信仰した樺山權左衛門が、琉球からの凱旋に携へ還つて奉納したのが始めとは、先づ信じにくい傳説である。村から社まではまだ二十町もある。此が一團の緑の御崎山で、社に詣る一筋の徑を除くの外、今なほ完全に小鳥の世界である。田尻の土持氏に今夜の宿を頼んで置いて、自分は獨り午後の日影の洩れる樹下の路を歩んだ。暇有つて樹實の正に熟する季節に、折好くも此山に來て見たことを喜んだ。花よりも麗しい黄紫色々の大小の珠玉が、枝毎に豊かに綴られて居る。之を啄みつゝ歌ふ者の聲である。諸々として自然の饗宴の樂みを、はてしも無く語

つて居る。

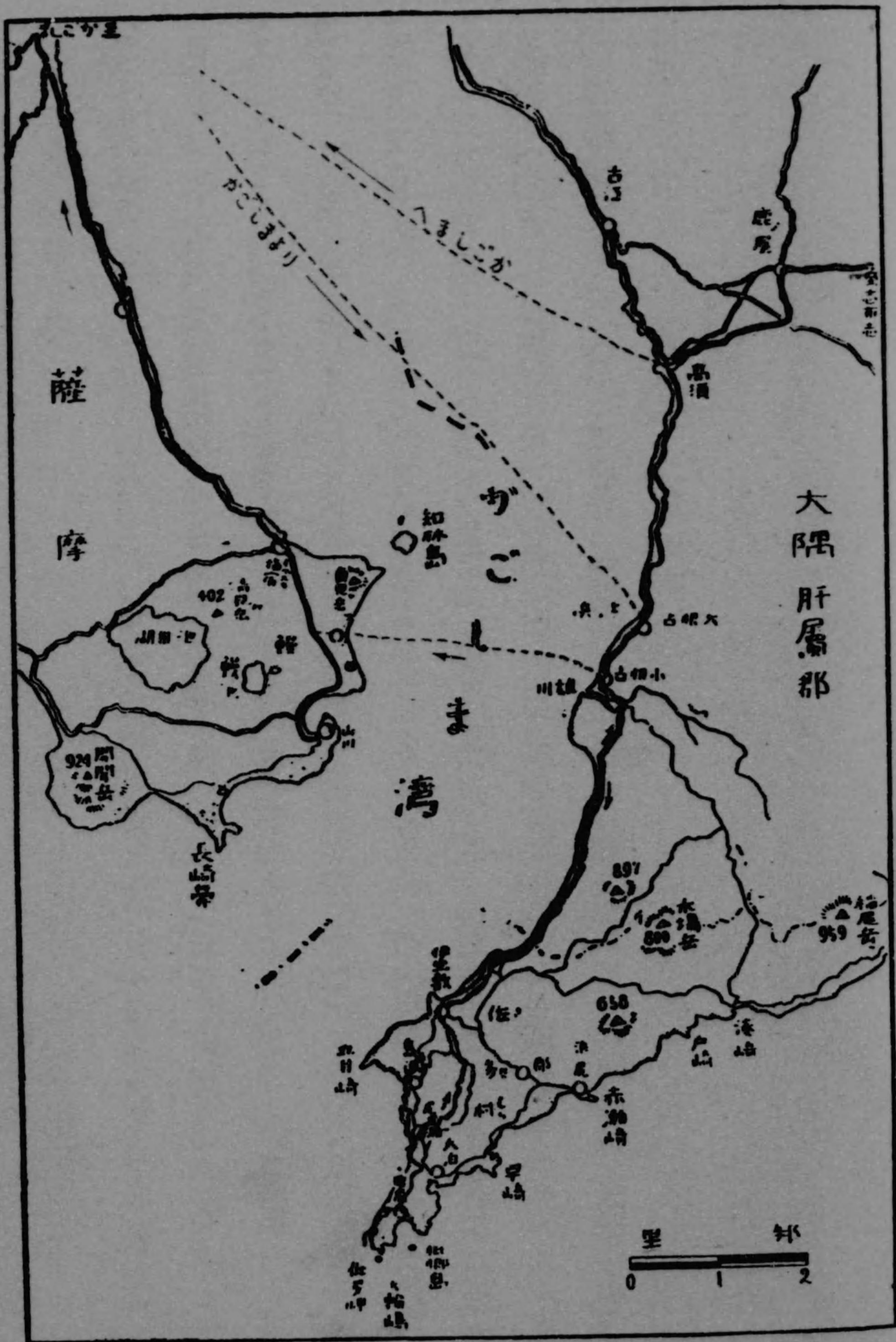
同じ燈臺でも陸奥の尻屋の荒磯崎などでは、闇夜に迷うて來て突當つて落ちる鳥が多いと謂ふが、佐多に此事が稀なのは、是亦御崎の神の林の導く故であらう。秋から先は四方の渡鳥が悉く爰に來て休むかと思ふ程、様々の鳥が遊んで居る。靜かな日には二十五海里の海峡の迅潮を越えて、種子屋久の磯の鳥までが、岬の岩の上に來て漁つて居る。空から行く者には此山ほど、好い目標は無いのだらうと、永年鳥を友とする人たちは語つて居た。人に取つては船が大きくなるにつれて、港から港の間が愈々遠くなるが、實際此岬まで來ると、南の島の一系列の飛石であつたことがよく分る。黒島でも竹島でも硫黄島でも、佐多の岬の端に立つて見ると、顧みて薩州の山を望むよりは猶親しい。島々に行けば次の島が又さうであらう。沖へ出て見たら尙一層、移る心が自然に起ることであらう。

御崎の山には蘇鐵と蒲葵とが多く、何れも實が熟して居る。親木の蔭からずつと離れた場所にまで繁殖して行くのは、やはり稍大きな鳥が運ぶのだらうと、土地の人たちも謂つて居る。



蒲葵も此邊まで来ると次第に民家の樹と爲り、殊に社や堂の近くに大木があるのは、是は古く此實を播いたものかと思ふ。併し笠や箒にする葉は、燈臺に近い小島から採つて居る。コバ笠コバ箒など、謂ふコバは、沖繩及び先島の、クバと同じ語である。

田尻の除夜は浪の音ばかりであつた。戸を立てぬ縁側から月がさして、障子の紙がふるへる程の微風が吹く。時計を見ると今將に歳が替らうとして居た。初日の出には真面に向つた濱である。おゆみと謂ふ村の女に荷物を持つて貰つて出て来ると、袴をはいた學校の兒が、早砂の上に小さい足跡をつけて新年の式を歌ひに先へ行く。大泊を過ぎて山の路にかゝると、再び佐多の御崎が深緑に遠く見える。幾らでも曲つて幾らでも登るかと思ふやうな路であつた。處々に牛馬の爲に稍緩傾斜のつゞら折が新たに開いてはあるが、使はぬと見えて草が生え、人は昔からの急な坂を通るのである。頂上を大泊のヨクと呼んで居る。ヨクは「いこひ」といふ意味で、誰でも爰へ来れば休む。三方の海が見える。島々も見える。さあ行かうと立上ると、おゆみが荷の上に結はへ付けて、町へ持つて出るコバの葉の束が、がさ／＼と南國らしい音を立て



た。

#### 八 いれずみの南北

七島南端の寶島と、大島の笠利岬との間の、潮の流れの最も迅い四十何海里は、民俗の上から觀てもやはり一つの境である。例へば中國四國の海の海岸で、カネリ或はイタゞキなどゝ名づけて、女が物を頭に載せてあるく風習は、九州南部にも弘く行はれ、殊に小さな島では水迄もさうして運ぶが、爰に來るとそれがまるで無くなつてしまふ。奄美列島では一番離れた與論島まで、それから沖繩の本島でも北部の三四箇村は、何れも幅二寸ばかりの苧の組紐を額に引掛けて、其を力に物を背負うてあるく。ちようど内地の村の人たちが、胸の上部に引掛けて負ふやうに、石や薪の重い荷物でも、皆斯うして額に吊つて持つて出る。山坂があんまり険しい爲に、頭に載せてはあるかれぬからと、首里や那覇などの、イタゞキを常の習とする地方では



説明して居るが、一方には又陸前牡鹿の江の島の如き、爰に限つて肩には負はず、頭に載せて居る島に於ても、やはり坂が急だから頭に載せるのだと言つて居るから當てにならぬ。山は少ないが沖繩から南にも、急な苦しい坂は随分有る。處が此方面では一般に、必ず頭の上に載くことに爲つて居るのである。額に掛ける風はアイヌの中にも行はれて居るが、それは偶合とも見ることが出来る。兩手を自由に置いて置いて物を運ぼうとすれば、頭か額か兩脇か、先づ此以外には工夫が無いのである。隣の人を見て真似たのも亦不思議で無いが、其よりも不思議なのは真似に境のあることである。

他所の風習はさう容易に模倣せられるもので無い。白野夏雲翁が今から四十年ほど前に、寶悪石の島々を巡視した時には、手に入墨をした女を何人か見た。何れも大島から落付いて來た婦人だと、七島問答の中には書いてある。此海峡を越えて、嫁に來るだけの親しみは有つても入墨の習ひは七島には入らなかつたのである。七島では手の甲の入墨の代りに、女が皆齒を染める。但し内地の方の昔風とは又ちがつて、十三の歳の五月に只一度だけ、鐵漿を付けるので

ある。若い女が女に爲つた印に斯うすると、後には鐵漿其ものが美しく感ぜられ、裝飾に爲り又道理が附添へられる。此點は南の方の島々の入墨もよく似て居る。

廿何年以前に沖繩を旅した人の話に、十二三の小學の生徒が、豆粒程の入墨を刺したのが、愛らしく見えたと言つて居る。此頃から始めて段々大きくして行く習ひであつたかと思はれる。處がちやうど其時分に、入墨を禁止する布令が出た。隠しては遣れぬ仕事なので、此禁制はよく行はれた。曾て美しかつた白い手が、もう追々皺になる年輩の女だけに、入墨が残つて居る。もう頼んでも真似をせぬ時代が來た。しかも昔はまだ老女の間には、はつきりと遣つて居る。

沖繩縣では一般にハチジと謂ふやうである。慶長の初に出來た琉球神道記にも、入墨の風俗を述べて針突と書いて居るから、ハツツキの轉音であることがよく分る。大島では釘突と謂ふと南島雜話にあるのは、これも針突の誤寫では無からうか。何にしても二島分立の以前から、弘く行はれて居た風習であつて、それが時を経るうちに僅かづゝの變化を見た。大島の方ではもう珍らしいと云ふ程に、針突をした人が少なくなつて居る。村に入つて之を搜して行くうち

に、折々は絲滿からの移住者を見出した。絲滿の女たちは何處に來ても、頭に物を載せて往來する上に、依然として南沖繩のハチジをして居る。四瓣に區切つた菱形の花を、手首か甲の真中に大きく彫り、指の根毎に幅一杯の星形を付けて居る。之に比べると大島の入墨は、人に依つて大小が有り、模様なども思ひ思ひに、趣向をして居るかと思はれた。詳しく尋ねたら村として又は家として、何か變化を付けるわけが有るのかも知れぬ。たゞ尋ねて答へてくれさうな人が、今は既に無いのである。

沖繩でも元は入墨に依つて、女の故郷が大凡知れた位、少しづゝの相違が有つた。島々には必ず其が著るしかつたことと思ふ。しかも八重山の女たちの今のハチジには、沖繩とよく似た菱形や星が多いやうに見えた。其中でも與那國人の二三の例は、却つて遠く隔つた宮古の方に近く、宮古の入墨の沖繩と變つて居ることは誰が見ても分る。宮古の婦人は手首から、三四寸奥まで刺して居る。織つた上布の耕のがらを、一つ／＼彫入れて記念にすると謂ふのは、多分簡単な小さな模様を、多く竝べて居るからの誤傳であらう。

此様に複雑な變化の中に、只一つ指の背を通した箭の形だけは、何れの島でも大方同じである。南の方では其箭に羽があり、沖繩より北に行けば、矢筈ばかりが著しく爲つて居る。恐らくは女性の物を指さす力が、宗教的に強かつた大昔の世の名残であらう。それが何れの方を指さして居たかは、今は既に絶対に不明と爲り、人は只有る限りの島々に、散漫として移つたやうに考へて居る。是が果して島人の眞の歴史であらうか。千古の英傑に碑あり傳記ある如く、曾て鈴のやうな形の笠を深く被り、乃至は高い窓の外に立つて、援助の手のみを差出したと云ふ神女の事蹟は、獨り此の將に消えんとする針突の文字無き記録のみが、我々を喚び留めて之を語らうとして居るのである。

## 九三 太郎坂

名瀬の港は大島の西北の海に向つて開いて居る。砂濱を意味する名瀬の兼久から、東海岸に

越えて南へ行く路は、大抵自動車の通る程に改修せられ、さうして早少しく損じて居る。併し常には曲り角毎に人に逢ふ位の人通りが、今日は舊正月の元日である爲に、かくの如く靜かに日が照つて淋しいのである。たまに向ふから人が來ると、必ず頬被りをして六尾七尾の鯛を擔つて居る。小湊附近は鯛の魚のよく捕れる處だ。除夜に大漁があつたから、今朝持つて出ると云ふばかりで、別に進物では無いさうだが、それでも何と無く正月らしい。里近くの谷に紅い山櫻が咲いて居る。絲芭蕉の畑が盡きると、まばらな蘇鐵の林が有る。蘇鐵とヘゴとは却つて國頭の山よりも多い。白い花の苺が咲いて居る。苺を此邊ではイチユビと呼んで居る。

和瀬の新峠には、もう茶店が二軒建つて居る。手前の方の店先では黒の木綿の紋付羽織の男が、褒められて嬉しさうな顔をして、ママアンマ節と云ふのを弾いて居る。例の蟒蛇の皮を張つた小さな三味線である。海をよく見える今一軒では酒を飲んで居た。地酒又はモロハクと名づけて、味醂を薄めたやうな甘いので、薩摩で出來ると云ふことだ。盆の上にゆづる葉を二枚敷いて、白い盃を載せて自分にも勧めた。肴は例のテイノイヨ(鯛の魚)であつた。下りて又登

るべき岡が海に近く見える。亭主夫婦の話は新道の事ばかりだ。なる程此邊の景色は別荘を建て、見るにはよい。車が多く通るやうになれば、爰へ來て休まぬ旅人はあるまい。それだから今にくと謂つて居るのである。爰を出て來ると伐り残されの松の樹に鳥が清く囀り、外も誠に長閑な正月であつた。

併しこんな好い日にも捜して見ると、淋しい人は何處にか居る。東仲間村の橋の袂から、右手へ上つて行く一筋路は、是も明治になつてからの新路だ。取付の五六町が急な坂であるばかりで、奥には一本も伐らぬかと思ふ椎樹の山が、深い緑の塊を爲して並んで居る處を、谷川に向ひに眺めながら、緩々と行く長根である。如何にもよく考へて付けた路線だ。三十年餘りに内地人の夫婦が、此峠に茶屋を建て、附近の林を開墾し始めた。肥後から薩摩に越える三太郎峠とは違つて、是は其爺の名に基いて、三太郎坂と呼ぶやうに爲つたのである。それほど世に聞えた三太郎ではあつたが、彼にも相談せず世の中は變つた。事業の方は氣が長く、老ばかりはすぐ完成した。西仲間から昇る坂があまり眞直で左右に餘地が無い爲に、もう第二の新

道は此峠を通らず、を、め、い、ても届かぬやうな遠方の山をうねつて居る。畠を作る爲ばかりなら、何も斯んな高い所へは登らなかつたであらうに、三太郎は終に茶店を罷めてしまつたさうである。それから後は如何して居るだらうかと、峠に上つて来て其一つ家の前に立留つて見ると、二方から踏込む店はすつかりしめ切り、出入の戸を只一尺ほど開けて、土間へ日が差して居る。正月だと謂ふのに婆さんは風でも引いたか、蒲團を被つた白髪頭が見える。圍爐裏の此方には肱を枕にして、三太郎坂の三太郎はごろりと寝て居る。

大島が今の大島になる迄には、それはくゝえらい苦闘が有つた。僅か四五十年の昔を振返つて見ても、今の三分の一の幸福も此島には無かつたのが、既にどしどしと名士を島外に出すほどの活躍をして居る。島人全體としては、切抜けて出て来たのだから明かに捷利だが、よく聴くと其勝鬨のどよみの中にも、幽かな呻吟の聲がまじつて居た。例へば今通つて来た朝戸の村なども、紅い櫻が咲いて平和らしい家並であつたが、文化年間の記録を見ると、佐念と朝戸の兩村は今人家無之とある。男女借財の爲に悉く身賣して他村に行き、跡は作地のみ也ともある

から、乃ち其以後の植民であつた。これと同様の潰れ村が、他にもなほ十何箇村有つて、其儘故迹と成つてしまつたのもある。此は享和の頃の凶作の結果であつたが、其前後にも不幸は屢屢繰返された。

名瀬の近くの作大能とか云ふ處でも、或時の飢饉に男女山に入り、莓や阿檀の實を採つて食盡し、野山にはもう何も食ふ物が無くなつて、數十人の者が阿檀の木に首を縊つて死んだ。それから以後は毎年其月頃になると、亡霊が出て来て何とも謂はれぬいやな聲で、唄を歌つたと謂つて其唄が幾つも傳はつて居るのである。

いちゆび山のぼて、

いちゆび持ちくれちよ。

あだん山登て、

あだん持ちくれちよ。

是は恐らくは例の魂祭の踊に、深い同情から發した悲壯な歌を唱へたのを、亡者の聲なりと誤

つて傳へたものと解するが、飢えて人が死んだまでは事實であらう。最初から生れて來ぬ方がよかつたと思ふ者の魂魄の爲に、永く後々の弔ひをするのはをかしいが、此世で救ふだけの力の無い人々は、どこの國でも斯んな話を語り傳へて、只いつまでも歎息をして居るのである。

## 一〇 今何時ですか

實に奇妙な子供の遊が流行して居る。見馴れぬ洋服の人などが通ると、時計を出させて見て跡でみんな笑ふ遊である。金か銀か大きいか小さいかを、前に言當てたものが勝になるらしい。自分はもう何遍か諸處で之に出逢つて居る。此大島でも、宅の末の兒ぐらゐのよち／＼と歩く子が、今何時でちかなど、謂つて附いて來た。たしか木村莊八君の紀行にも、大連で支那人の子供が、土塀の上から顔を出してさう叫んだと書いてあつた。彼等小兒は村から外へは滅多に出ぬ。さりとして誰が來てこんなくだらぬ事を教へようか。自分は何よりも先づ世の所謂流

行には、まだ不明の原因が潜んで居ると云ふことを感じた。

土地の人にもさう謂つて來たことだが、大島の子供には全體におつとりとした處が少ない。一つには普通教育と云ふ特殊の事情の爲かも知れぬが、通例人に聞えるやうに仲間同士で喋る代りに、臆面無く旅人に話しかける者が多かつた。或山の蔭では四五人の子が目白を捕つて還るのをちつと見ると、すぐにおひまませんかと謂つた。町へ持つて行くと一圓になりますよと次の子が謂つた。又或板橋の上で遊んで居る夕方の群に、戯れに此狗の子は誰のだと聞くと、其はワームン(我物)だ、貰つてくれるなら縛つてあげましようと言つたのが、ほんの十一二の生徒であつた。

其よりも驚いたのは、住用村の或部落の宿屋で、色々の青年少年が旅人を見がてら、前の川端の路を往つたり來たりするのに、一人として胴聲を立て、わめいて通らぬ者は無かつた。正月だから仕方も無いが、大きい者は皆酔つて居る。さうして彼等ばかりの風流とする事柄を隠語で怒鳴つて笑つて行く。子供にはそんな才覚も無く、又固より酒を飲む筈も無いが、出來

るだけ酔つた先輩の荒い聲を眞似て、他には何もわめく種も無いものだから、互に相手の子の苗子などを、呼捨てに呼びかはして居る。こんな氣の毒な正月が、果して何時まで辛抱し得らるゝであらうか。

此子供たちに、昔あれ程澤山にあつた正月の遊はどうした。ネンと云ふのは我々の根木又は根ん棒と謂ふものと同じで、端を尖らせた二又の枝を土に打込み、相手の木を倒さうとする勝負であつた。又イハと稱する遊もあつた。薩摩で金輪投げと謂ひ、東國では破魔ころなどゝ謂つて、圓い輪の類を飛ばして互に受留める遊は、蝦夷から南の何れの村にも有つたが、此島にも亦盛に行はれて居た。マウジャと謂つたのがそれである。南島雜話には此以外にも、多くの遊の圖が載せてある。それは皆どう爲つてしまつたか。子供の趣味も變るから、是非残すと云ふことはむつかしからうが、他の地方では何か代りが出來て後に、昔の遊が廢つて居る。處が此處だけはさうで無い。

以前は童名には何かナと呼ぶものが多かつたさうだ。弘く八重山までも行渡つた風習で、即

ち我々の古語のかなし子、或は狂言に出て來るかな法師などゝ一つで、大切なものを意味するのだが、南の方では一般にオテダカナシ・オツキカナシ又は世の主カナシなどゝ、最も尊く且最も大切なものを、同じ語を以て敬うて居たのである。村の平和の爲必要な年に一度の祭に、毎に子供をして重い役を勤めさせた例の多いことは、起源に於て此と何か關係が有つたかも知れぬ。ヤマトの盃蘭盆に該當する八月甲子のドンガの祭の前に、シツチャガマと名づけて十二三から十五六歳までの男の兒が、小屋を作つて田の神を祀る儀式が有つた。左義長の鳥小屋などよりも今一段と嚴重で、其爲に特に白酒を造り、名瀬の間切では豊作を禱る祭文も有つた。それから九月十月の境に入ると、ハツプロと稱して種下しの祭があつた。竹の皮で作つた鬼の面を被つて、家々を巡つて餅を貰ひ集め、持つて還つて一つ處で煮て食べた。斯んな幸福な儀式も、もう無くなつたやうである。しかも沖縄の方では十二月八日のウニムチー(鬼餅)は今もまだ子供が楽しんで居る。

大人が信ぜぬやうになれば、祭の式は追々に遊戲に爲つて行く。其痕跡は他國にも多く遺つ

て居る。大島ではアツラネ若くはアスナネと名づけて、蝮の害を拂ふと謂つた四月壬の日の祭などは、昔から旅人の迷惑する儀式であつた。他所から來る者に釜土の泥を投付け、或は石を打つて疵を付けたことさへもあつた。御用の役人とても、理由を話して入らぬと打たれた。其他の人々には或は火の燃切れを踏越えさせ、或は委細構はずに追拂つた。東京其他の兒童が今も唱へる、「御用の無いもの通しません」と云ふ歌なども、やはり是と似た風習の名残であるが今の大島の時計遊びの如きも、ことによると是非とも何かをして樂まねばならぬ童兒たちの、外にすることが無い爲に、自然に引寄せられた新種の悪戯であらうと思ふ。但し誰がこんな島まで之を運んで來たかに至つては、やはり大なる一つの不思議である。

## 一一 阿室の女夫松

屋喜内灣内でも、阿室などは殊に古い村である。阿室には男松女松と名づけて珍らしい二本の大木が有つた。遠方から聞傳へて見に來る程の松であつたが、惜い哉五年前の正月の大火事に、焼けてしまつて根株ばかり残つて居る。御嶽の岡の昇り口に近く、トネヤ(殿屋)の西隣の神アシアゲの廣場の端に、小高い塚形の地が其遺跡で、火事後に生れた位の子供たちが、朝から晩まで來て遊んで居る。

神の御嶽の樹を伐つた祟りと、今でも村の人には考へられて居る。百二十戸の民家は何れも茅葺きであつた爲に、日暮方から焼け出して夜中には悉く灰に爲つたが、此二本の松樹だけは三日三晩の間燃えて居た。中がもう洞空になつて居て風がよく通るので、折々は焰を天に揚げて、非常な勢で燃えた。老人たちは之を見て、皆慟哭したさうである。村は既に建て直つて繁昌して居るが、今でも松の話をする時涙を流す者がある。

火元は濱近くに豚を飼ふ小屋であつた。山手へ吹き付ける風は強かつたが、岡一族の屋敷の奥に祀つた、辨天様の脇の樹に、火の粉が盛んにかゝる頃から急に風向きが一轉した。他の一方では學校の大きな建物も焼け落ちたが、御眞影を御移し申した碇氏の新築が、たつた一軒だ

け助かつたのも奇瑞であつた。斯う云ふ數々の不思議に感動した村の人は、先づ急いで御嶽の拜殿を立派に營んだ。今まではシマタテカミサマ(島立神様)と拜んで居たこの拜所を、今後は秋葉神社と稱へて崇敬することにきめた。遠い遠州の奥の山の火防の靈神が、果して何人の説に基づいて、阿室の昔の御嶽の神の名に爲つたかは、敢て聞いて見ようとしなかつたが、少くとも是は我々の謂ふ勸請では無かつた。土地の人たちは決して新たに御迎へ申した神とは思つて居らぬから、即ち單純なる改名に過ぎぬのである。社殿には御簾の中に黒く尊げな木像を安置し、又内地にしか見られぬ紙の御幣も立てゝあつたが、構造は却つて宮古の漲水御嶽などの新しい拜殿に近く、殊に其建物を廻つて奥の方の靈地は、干瀬即ち珊瑚礁の石を取繞らし淨い白砂を敷きつめ、全然先島方面の御嶽のオブと同じであつた。何でも大島の神道には、昔から此程度の歩み合ひがあつたらしい。不意の感激と云ふ特別の原因は有つたけれども、阿室の信仰には此以上に變化させる必要も無ければ、又其人も無かつた。

それ故に御嶽は依然として能呂(祝女)が之を祭つて居る。さうして再建以來一段と其信心は

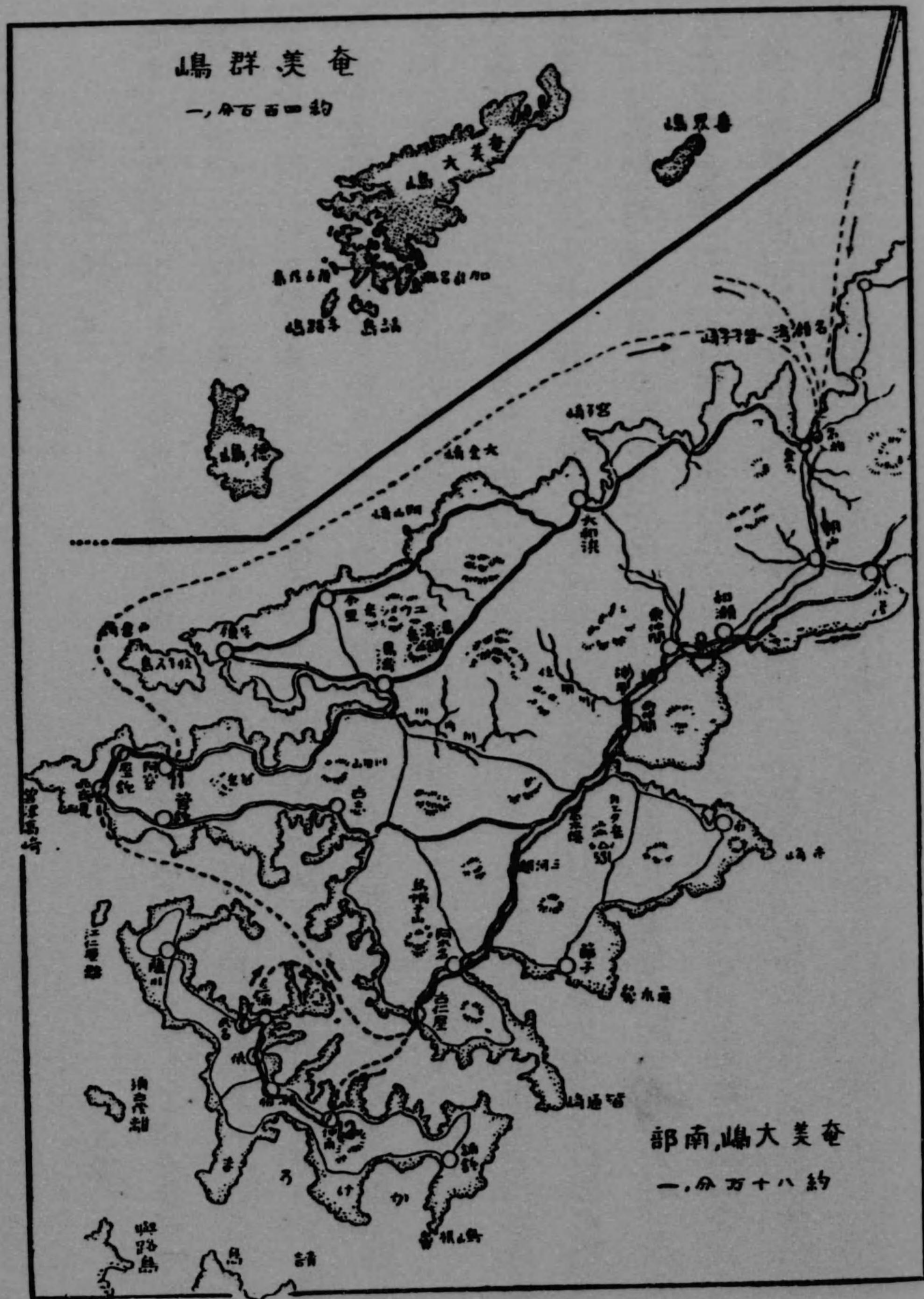
引締つた。能呂の數は此村は五人である。ワキガミと謂ふ者を加へて七人、白い祭衣を着て山の山に登り、祭を畢へて下りて来るまで、何人も之を窺ふことを許されぬ故に、式の様子は只彼等のみが知つて居る。最近の神祕は火災以後の五年間、年に何回かの祭の日の夕毎に、能呂たちが下りて来ると直に其後に、御嶽の山で鉦の音がする。或は又鐵棒を曳く音とも謂ふ。つまり幾つかの金屬の器を鳴らして、岡の頂上に行く聲がするのである。村民は一人として之を人がするのだと思ふ者は無い。又互に相欺くほどに疏遠の中でも無い。稀に一度と謂ふことなら、耳の誤りとも思へるが、年に何回となく小學校の先生も聞いた。佐賀から來て居る商人の江口君親子も聞いて居る。さうして御嶽の東に住む平田の人たちには聞えぬのである。以前信仰の今よりも盛んであつた頃は、白い馬に騎つて神様の御出でなさるのが、御嶽の昇り口の處までは見えたと謂ふ。トネヤ(殿屋)を葺換へる時の祭などには、殊に明かに拜まれたさうだ。其御姿を拜したと云ふ老人も、まだ何人か達者で居る。

能呂は必ず血筋の者が相續するが、嫁に行くから家としては次々に移るのである。他の部落



に縁付いた者でも、祭の日だけは還つて来る。數ある一族の婦人の中でも、相續すべき者は神様には最初からきまつて居る。先づセイヲヒクと謂つて、生れた年月日に由つて合性がある。火性と金性とはまるで能呂に爲る資格が無い。木水土の中でも亦條件があつて、山の上の土などは高過ぎてよくない。自分と對坐して居た親能呂の老女は、水性であつてイヂェン(泉)の水であつたと謂ふ。

泉の水ならば林の奥の泉では無かつたらうか。至つて物靜かな生れで、湧いて流れるやうな話は出来なかつた。幸ひに沖繩とはちがつて大島には、グジと名くる男の輔佐役があつて、オモロを語り傳へ、又少しは哲學が説ける。其グジの數も五人である。やはり性に由つて神から指名せられる。神のオモラヌ(在さぬ)日には、なんぼ信心しても無用である。天に七日、此娑婆に七日、龍宮に七日と昇りに七日とを御過しなされる。一月の中に七日しか無い祭の日を、私等だけは數へることができると、その親グジの寶本翁は自分に語つた。



## 一二 國頭の土

加計呂麻は東西に細長い島だ。北に瀬戸を隔てた大島の多くの岬が、日を帯びて灣内の靜かな水に映る景色は、南の海では見られない趣であつたが、今斯うして冬の緑の山に分入り、切開かれた赭土の坂路を、昨日の雨の濕りを踏みながら登ると、再び國頭の遠い山村を巡つて居るやうな感じがする。其上に折々出逢ふ島の人の物腰や心持にも、まだ色々の似通ひがあるやうに思はれた。海上は二百渚、時代で言へば三百年、もう是以上の隔絶は想像も出来ぬ程であるが、やはり眼に見えぬ力が有つて、曾て繋がつて居たものが今も皆續いて居る。

獨り昔の生活の痕が、残り傳はると云ふのみでは無い。沖繩では近年階級の制限が殆ど無くなつて、婦人の簪などは上下一様に銀色のものを用ゐて居る。首里の王城の片脇にも、既に此ばかりを作つて居る小店が有る。處が久しい間沖繩の簪の制と、何の交渉も無かつた筈の道の島々の女たちまでが、悉く在來の簪を罷めて、今は銀色のを挿し始めた。しかも其形が稍長く

細く、又端が劍のやうには尖つて居らぬから、南の沖縄本島の流行を追ふのでも無い。言はゞ彼等の黒い髪の毛に、白くして光あるものを取合せたいと云ふ趣味が、双方一度に表はれたまゞであらうが、それにしても何人にも知られず、双方が久しく此傾きを保持して來たのは、少くとも歴史の説明を超越した、寧ろ天然の原因があつたからである。

普通の歴史には、大島群島が琉球の屬島と爲つたのを、文明三年以後のやうに書いたものもあるが、此は誠に誤解の虞有る説である。中山の世の主に些しの貢物を納めるか納めぬかは、單に或時代の浦々の按司の家の都合であつて、島人たちは夙に同じ衣を着て同じ語を話し、同じ季節と方法とを以て村々の神を祀つて居たとすれば、即ち國は始めから一つであつたのである。それ故に所謂君々の機關が王家の制御を受け、俗界の君主が宗教の力を利用して、之に由つて三十六島の統一策を行つたときには、北の方の島々も甘じて其節度を受けて永く渝らなかつた。即ち征服せられたのでは無くして、草木の風に靡くが如く歸服したのである。

大島では能呂久米の首領を御印加奈之と呼んで居た。御印とは首里から出した辭令書のこと

で、之を持傳へた能呂なる故に、御印加奈之とは謂つたものである。島津家の支配に爲つた慶長十四年以後も、なほ暫くは祝女だけは沖繩から任命して居たのを、寛永の初に至つて禁止してしまつた。さうして以前貰つて置いた御印が、愈尊いものに爲つた。それから後も百年ばかりの間は、一生涯に一度だけは大島の能呂久米、首里に出て往つて聞得大君に見えることを許されて居たのが、享保十何年かにはそれも亦禁ぜられた。併し小舟で荒海を凌いで、潛かに國頭の土をふむ者は絶えなかつたやうに思はれる。近世の記録に依れば、大島の能呂は何時の頃よりか二頭に分れて居た。甲を眞須知組と名づけ大和濱から南は之に屬し、乙は須多組と謂つて北部名瀬の周圍の數間切を支配した。シッタは分家又は次男の筋を意味するやうだ。マヌヂは素より嫡流と云ふことである。須多が多く傳來の法式を省略し、又大和人の刀自と爲ることを禁じなかつたに反して、他の一方は今に古法を執し、内地人に嫁することを許さなかつたとある。これが本島の南から佳計呂麻の村々にかけての、今日までの宗教である。

屋喜内方には有名な湯灣五郎の話が有る。蛇一匹から金持に爲つた今昔物語の話にも似て居

るが、史實で無いまでも昔の趣だけは傳へて居る。五郎は湯灣の村の生れで、家貧なるが故に人之を糠五郎とも呼んで居た。後に本琉球に渡つて、出世して按司の號を賜はり、佐渡山與名原の親方等は、彼が子孫であると傳へられる。其頃琉球の風習として、國王世子の始めての宮参りには、誰にてもあれ途中で最初に行逢うた人を頼んで父と爲し、それだけ結構に取立て、按司などにも召出すことであつた。五郎は其身の微賤を耻ぢて、遙に御神詣での行列を望んで道を變へて遁げ隠れようとしたが、王子の御供の面々に於ても、あまり風體の良くない男が來るので、避けて間道を通つたが爲に、思はずも双方行逢ふことゝなつた。其名を問へば秋山の野夫湯灣の五郎なりと名乗つた。古の法なれば貴賤を論ずべきで無いと、終に王子の義父として、一躍して按司に爲されたと傳へて居る。

瀬戸の靜かな海へは木や絲芭蕉を積みに、多くの山原船が入つて來た。那覇の港のうかれ女なども來て稼いで居る。久高の島人も古くから、こゝに來て永良部鰻などを捕つて居た。暇あるときは故郷を思ひ出して、色々の歌を歌つたでもあらうが、彼等ばかりの平凡な空想からは

湯灣の糠五郎は生れさうにも思はれぬ。

### 一三 遠く來る神

沖の永良部の後蘭村では、沖繩世の主の墓と云ふのが御嶽になつて居て、今も年毎に遺骨を洗ふ祭りがあるさうだ。近世の琉球語では、世の主は即ち國王であるが、骨を留める程の新しい世代に、海の北に流寓して果てられた王は無かつた上に、之と略似た昔語は亦處々の小島にもある。もし單純な能呂久米の夢で無かつたとするならば、即ち分水嶺を以て限られた多くの小さい社會に、會ては個々の世の主が支配したこともあつたことを想像せしめる。而も所謂百浦の按司たちの事蹟は、島の端々に行くに隨つて、痛ましい迄に埋もれて居る。中山の歴史家が始めて古傳を集成したのは、第五王朝も既に百數十年を過ぎて後であつた。祖先を慕うて止まぬ山北の遺民に取つて、今歸仁王都三代の榮華は、偏に一抹の山の霞の如きものであつた。

北山古城の本丸の迹には、勇猛なる最後の王攀安知、劔を抜いて斫つたと傳ふる、嘉那比武の神石が今尙在る。逆臣本部大原の謀計に由つて、鬪ひに勝て還つて見ると、城は空虚と爲り妃嬪は悉く縊れて死んで居た。護國の神今は何かあらんと、大に憤つて其神石を劈き、分つて四塊と爲したと謂ふ、石の長さ五尺許、青色堅實なり、十文字に割れて居ると、遺老説傳などにはあるが、今見るところは二尺以内の灰色の石で、堅に只二つに割れて居る。遺老傳は二百年前の書物、其前がまだ三百年ほど有る。此だけ永い歲月の間には、幾ら石でもちつとは變化しさうなものだ。それにも拘らず毎年夏秋の境には、遠近の村々から依然として萬を超ゆる士民が、此古跡に登つて來て、家々の拜所に香を焼いて巡るのである。

思ふに是も亦、至つて自然なる人の心であつた。昔は固より過ぎて形を留めざるものゝ名であるが、猶之を思ひ慕ふとすれば、眼に見え手に觸れる何物かに據つて、辿つて行かねばならぬ。しかも都城は覆り史書は絶えて無く、祖先の日は益々遠ざかつたのである。身内に別れて寂しい不幸の日を送つた者は言ふに及ばず、富榮えて眷屬の多い人々でも、田舎では徒然なる

夜の物語などに、此世の始と我家の始を、もつと精彩に知らねばならぬと、考へる折が多かつたことと思ふ、しかうして此要求に對しては、村々には物知りと稱する女性が居た。

物知りは沖繩の方では、ユタと呼ぶのが普通である。大島佳計呂麻などでは正神、又ホゾンカナシとも謂つて居た、本尊と頼む神佛の力に由つて、只の人の目には見えぬ者を見る。故に其謂ふことが信ぜられた。今まで不明であつた高祖の名でも事業でも、之に聽けば忽ち闇の燈火であつた。乃ち導かれて處々の故迹を巡り、絶えて久しい祖先の佛に對面した。唯不由なのは北に寄つた山邊海邊には、花やかに延び榮えた思ひ出が如何にも少ない。優れた武士は戦つて多くは斃れて居る。又は南の平野から、遁げて來て世を狹めて居る。ユタとても信ずべからざることを語ることは出來ぬ。それ故に國頭の古い歴史は、終に晴れたる海の色のようになるを得なかつたのである。

尙圓王の興隆は此點から見ても世の濟ひであつた。此王は沖の小島の伊平屋から身を起して以前の鮫川大主などの如く、直に小舟を遠い佐敷の濱に寄せず、海を横ぎつて宜名眞に移り、

奥間に遁げて鍛冶屋に助けられ、漸く南して久志の間切に入つたが、美しい汀間のミヤラビ(少女)を娶つて、爰に又二男一女を儲けるほど永く留つた。此傳記の何れかの部分は傳説かも知れぬ。しかも人は信じたいと思ふものを信じ易い。八郎爲朝は菊池幽芳君を須たずして、既に立派な沖繩の英雄であつた。況や國頭の物知りたちは、寂莫として久しく此の如きニライ神の遠くの島より寄り來らんことを待つて居たのである。

自分は雨のふる或日の午後、福木の高く茂つた汀間の里を訪れた。山には躑躅が咲き鳥が鳴いて居る。若い英雄の戀語りを傳へた金丸川の泉は今も流れ、もし此日が夢ならば尙更に美しいがとさへ思はれた。金丸御殿に仕へるのは由緒ある昔のノロであつた。久志村の青年等は、ユタをば最早正しい職務とは認めて居ない。もし彼女が新しい豫言と啓示をすれば、乃ち之を信ずまいとする故に、古くからの夢語りのみが、愈々歴史として固定しく行くらしいのである。斯うして人間の空想を制限して行ことが、幸福なものかどうかにはやゝ疑ひがある。此から後の百世に對する我々の好意と期待、又自分ですらも忘れて行く數々の愁ひと惱みは、實は民族

の感情に最も鋭敏な、やさしい女たちの力に依らざれば、とても文字などでは傳へて置かれなうのである。

汀間の入江の岸には、歌で名高い汀間の神アシアゲがある。壁も簀子も無い森閑たる建物で二列に繞つた澤山の柱の間から、遠い大洋の水が眺められる。初夏の曉の靜かな海を渡つて、茲に迎へらるゝ神をニライ神加奈志と島人は名づけて居た。大島でナルコ神テルコ神と謂つたのも同じである。しかも北東に面した久志の沖は、餘りにも茫洋として居る。伊平屋久高が神の島として遙拜せられ、人界の英俊も亦之に據つて出たのは、やはり我々の空想にも、何か具體的な飛石のやうなものを必要としたのではあるまいか。

## 一四 山原船

恩納の仲泊から美里の石川まで、島の幅が此邊では僅に三十町しか無い。大昔、神が未だ草

木を以て此國を恵まざりし頃、東海の波が西海へ打越し、西の波は又東へ越えたと傳へるのは或は此近所の事かも知れぬ。今でもサバニと稱する小さな刳舟だけは、人が擔いで陸の上から往來し、遠く邊土名喜屋武の岬を廻る勞を避けて居る。内地の府縣で船越と云ふ多くの地名は何れも曾て此方法に由つて、小舟を別の海へ運んだ故跡である。島尻郡の方にも玉城村富名腰が有る。又同じ郡の佐敷村、八重山石垣島の伊原間などに、フナクヤと云ふ地名があるのは、皆この船越のことだらうと思ふ。

近い頃までのサバニは、皆國頭の山の松樹を刳つて造つて居た。絲滿の漁師たちは遠く屋久島の杉を買求めて、追々に其船を改造し、猶鱧の脂を船と船具とに塗つて水を防ぎ、飽くまでも輕快に海上を馳驅しようとして居る。しかも山の良い樹は次第に乏しく、眞の丸木舟はもう殆ど見られなくなつた。刳舟の縁にも他の材を綴附けて形を作り、其隙間を白い漆喰で留めて居る。仍て又綴舟の名もあるのである。

道の島では小舟をスプネと呼んで居る。クルプニの名は今も有るが、もう其姿を見ることが稀で、之に代つて板附と謂ふのが多く用ゐられる。板附も形は絲滿人の刳舟に近いが、大小の板を釘で打付け、鱧の方にも三角の板が角を下にして張つてある。此板には墨と一二の繪具で古風な模様を描くのが習ひである。其中でも瀬戸の入江で幾つか見た三本杉のやうな繪様などは、本來南の島々には無い樹であるだけに、何か熊野の信仰とでも因が有るかと思はれてなつかしかつた。

遠い國地の珍しい文明を、先づ見て來るものは船であつた。それ故に最初は蒲葵の帆を掛けて支那の物見の役人を驚かした島人も、久しからずして福州あたりの造船所に依頼して、新しい立派な進貢船を造らせ、次では那覇の船大工が其型に由つて、大きい船を工夫するに至つた。淋しい山原の磯山蔭で作出す船が、西南數百里の外を走つて居る支那のジャンクと、此様によく似て來たのも偶然では無かつた。しかも其改造の更に以前を溯つて見ると、島人は出で、新しい物を覓めんが爲に、兎に角に自ら渡海の船を持つて居たのである。

島では人よりも船の方が早かつたわけである。然るに八重の汐路の先島に於ては、アマミコ

が碧空より降つたと云ふ神話はもう無くて、却つて船の始の物語が傳はつて居る。竹富島では島仲粟禮志の幼き兄妹、或日濱に遊んで形半輪の月の如くなる物が、海上に漂ひ來るを見て、木を伐つて其制に倣ひ、始めて船と云ふものを作り、之を五包七包と名づけて濱に泛べて樂みとした。其玩具の小船、後に又流れて隣の黒島に行き、黒島の人は之を大きく拵へて、漕ぎ乗つて竹富に遣つて來て、始めて子供たちの神から學んだ術であつたことを知つたとある。

同じ話の變化かと思ふ話を、又宮古島の仲間御嶽にも傳へて居る。狩俣村で小舟を造ることの好きな子供、父が中山に往つた留守に父の船を眞似て小舟を作り、父を思ひつゝ毎日海に浮べて遊んで居ると、或時風波荒れて小兒は溺れ死し、小舟ばかり百里の海を漂ひ、那覇の港に流れ着いて、父之を拾ひ上げた。形が我船と同じのみか、仲間嶽の靈石が之に載せてあつたので、我兒の運命を知つて大いに歎き、その小舟と靈石とを携へ還つて、今に之を尊信すると謂ふので、稚い兒と神とが此の如く、共に最初の造船には干與して居たのである。

昔の船の安全は半ば之を神の力に托して居た。八重山の船は蜈蚣の形を眞似て、イノー（龍

卷）を制御する手段とした。今の山原の船にはちゃんと眼球が描いてある。瞳を稍片脇へ寄せて、支那の船よりも一層眼球らしいが、如何なる理由でか之を艦の方に附けて居る。しかも害敵を防ぐの術としては、此だけでも十分であつた。現に十八年前にバルチックの艦隊が來た時にも、或山原船は港の燈火と見誤つて、洋上に假泊して居た怖ろしい敵艦の眞中に船を漕入れた。ところが其頃まで警を附けて居た國頭の船方たちは、其語音を聞いても到底日本の愛國者とは見えなかつた爲に、何の仔細も無く放された。それから大いに走つて八重山に來て電信を打つたが、其時にはもう對馬海峡の大戦は終つて居たさうである。時間が其様に大切な場合には、彼等も今は機關のある船に乗つて居る。絲滿の漁民なども刳舟を定期船に積んで、自分も船客と爲つて内地に往來する。さうして船に酔うたりなどして居る。昔の航海は年に一度の風をでも待つた。永い年月の間に、子が親となり祖父と爲る期間に、人は徐々として偉大なる變化をしつゝ進むのである。



## 一五 猪垣の此方

昔からの村には泉に據つて、山の中腹に住むものが多かつた。島が平和に爲つてから、次第に廣場へは下りて來たやうである。近世は又山林愛護などの爲に、法令を以て村を遷した場合も有つた。村の周圍には燃料其他の用に、若干のアタイバル（垣内山）を付與し、残りの山野は公共の地であつた。原屋取と名づけて首里那覇の困窮士族が、入込んでは新しい部落を立てたのも此原である。明治以後の屋取人は、今でも質素以下の暮しを續けて居る。彼等の大部分は元の侍であつたが、剛健なる山原の氣風を毀すほど、町風の生活には前からも染みて居なかつた。さうして争うて好い兒を育て、家運を興さうとする努力が、附近に居る舊住民の爲にも一つの刺戟になつて來た。

霜雪も知らぬ山ではあるが、やはり天然の力と闘はねばならなかつた。峰續きの隙間も無い林から、緩傾斜の一角をかこひ取つて畠に拓かうとするには、長い石垣を築き繞らして、山か

ら來り侵す者を防止せねばならぬ。紀州の南熊野、又は豊後日向の境の村などで見たものと構造が同じで、國頭に於ては之をイヌガキと呼んで居る。狗は内に在つて守る者、猪垣を狗垣と謂ふ筈が無い。是はなほ昔の語の名残であつて、曾ては野猪を單にキと謂つた時代に、キの垣と呼んで居たのが、意味無しに傳はつたものだらう。

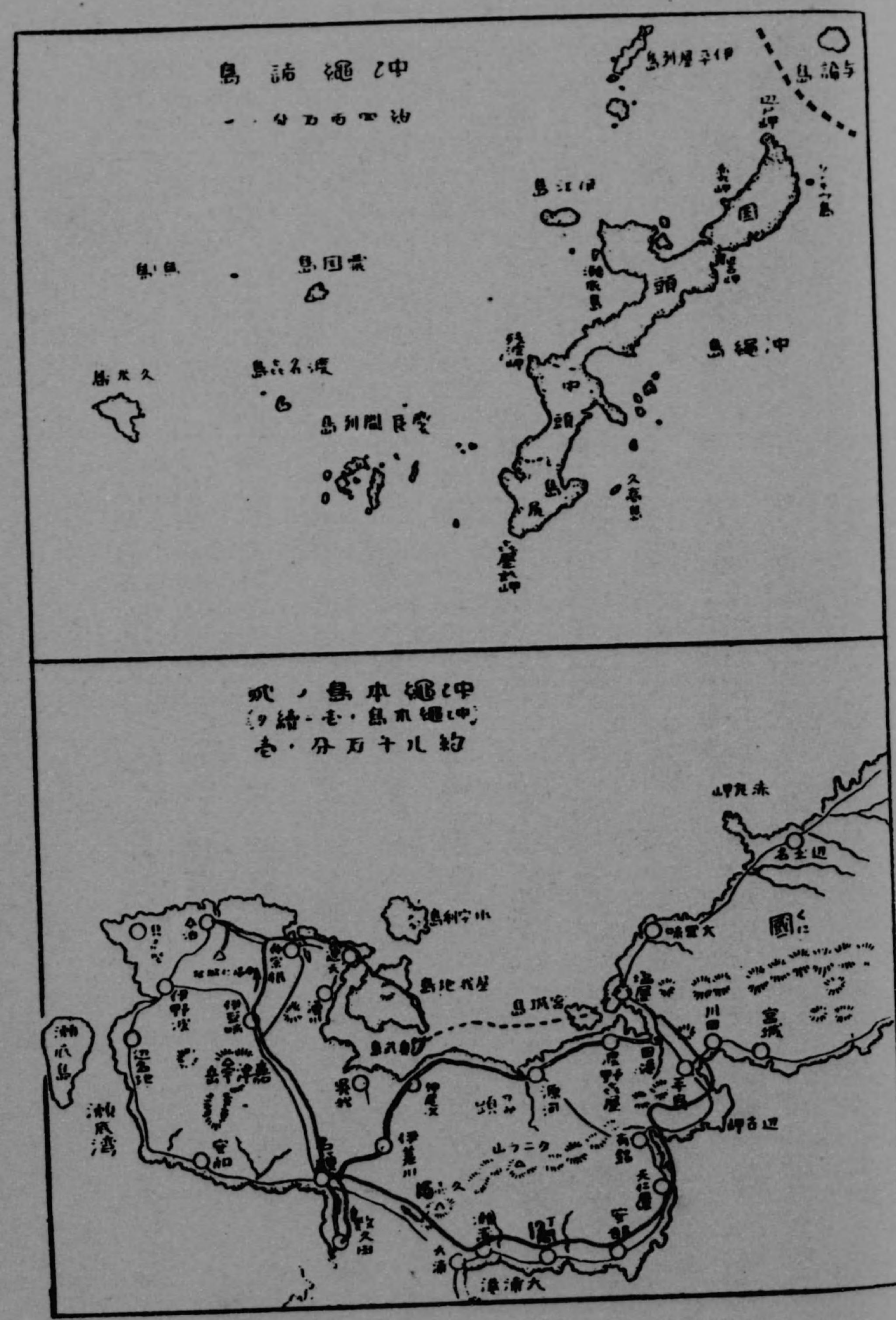
今日では野猪はヤマシシと謂ふのであるが、之に由つてシシガキと云ふ語を作るにはまだ故障が有つた。何となればシシは沖繩では、宍即ち食用の獸の肉の總稱であつて、今の我々のやうに只一種の山の獸だけを、意味しては居ないからである。

内地の方でも田舎に往つて見ると、シシが宍人部などの宍と、もと一つの語であつたことが直に分る。例へば鹿をカノシシと謂ひ、羚羊をアラシシ、カモシシ又はクラシシなど、謂ひ、九州の鳥などには、牛を田ジシと呼ぶ所さへもある。唯宍を食ふ慣習が夙に衰へた爲に、何故に肉を以て獸の名とするかを、久しく忘れて居たと云ふだけである。沖繩の方では引續いて宍を用ゐて居た。故に山のシシ即ち野猪に對して、牛を田のシシと謂つたのが最も自然である。

鹿を産するは慶良間群島の、座間味の島だけに爲つてしまつたが、カノシシの代りに之をカウノシシと呼んで居る。鹿の穴に一種の臭氣がある爲か、さうで爲ければ其鳴聲に由つて付いた名であらう。

豚は一般にワと呼んで居る。チエンバレン氏の語典には、羅馬字で *Wan* と書き、鳴聲から來た名であることは、誰も之を疑ふものが無い。先島の人たちは *Wan* と謂つて居る。さうし見るとキノシシのキも、其理由は同じやうに簡單で、我々も一度は其ウィー／＼の聲に耳馴れるまで、親しく接して居たことが知れるのである。それを忘れてしまつて山に住むのをキノシシ、家に飼ふのをキノコなど、區分したのはをかしかつた。尤も沖繩でも、區別の爲に一方をワ、又他の一方に居るのを、キと謂つた時代があつたかも知れぬ、前に申したキノガキの外にも、婚禮の式の改まつた料理に、必ず出さねばならぬ野猪の吸物を、キヌムルチなどと呼ぶ例が遺つて居る。

正月の食べ物には、餅よりも更に缺くべからざるは即ちこのワノシシである。暮には大抵の



家でワを屠つて、我々の彼岸の牡丹餅のやうに、遣つたり取つたりを盛んにする。此にも久しい由來の有つたことと思ふのは、豕の記憶は最早失つた内地の國々の武家に、春の初の野猪の料理を重んじたことである。支那と交通して居たから支那から來た風習だらうなど、よい加減に珍しがつて置いて今までは濟んで居た。さうして古い日本は埋もれて行つたのである。

北太平洋の島々には野猪は到る所に住んで居た。島に猪が居り又土人が居れば、必ず之を捕へて來て家に飼うて居る。野猪が家猪に爲るのはそれ程手軽であつた。馬や猿ならば藝を仕込まねばならぬが、猪は檻の中で繁殖さへしてくれれば即ち家畜である。獨り馬來の島々の回教徒は之を惡み、山に居るのを忌んで却つて跳梁させた。我々の島では少しづつ食つたが、活かして貯へる程の必要は無かつたから、そこで昔の猪養の徒は轉業した。田神の祭に供へ來つた白い猪の種も切れて、近江の山で生捕つたキノシシに、胡粉を塗つて間に合はせたと云ふ話も残つて居る。さうして山にも澤山の山シシが住むのに、同じやうな黒い小さいのを、遙々船に積んで沖繩だけへ、持込んだ人が有ると云ふことに、歴史家にきめられようとして居るので

ある。

奄美大島にも山にはキノシシが居り、里にはワが孳殖して居る。少なくとも三百餘年の分立前から、ワは既に島人の生活に伴うて居たのである。更に今千年ほど以前に溯れば、大和の京でも其通りであつた。我々は只猪垣の此方の側で寧ろ不自然なる生活を忍びて、穴を食はずに居たのであつた。

### 一六 舊城の花

歌に名高い浦添城外の廣場は、後に久しくこの間切の番所であつたが、世が又改まつて爰に大きな小學校が建つた。さうして櫻が咲いて居る。桃よりも彼岸櫻よりもつと紅い花で、去年の葉の蔭に咲いて居るのは殊に珍らしい。眞青な明るい大空が、花と故城とを蔽うてちつとして居る。作日が立春と謂ふ一月の四日だが、まるで我々の内地の五月のやうな日の光であ

る。

城の石垣の上に立つと、干瀬の美しい東西の海が一度に見える。島の歴史の八百年が見える。嘉津宇嶽の向の麓が運天の港で、彼處には百按司の骨が朽ちて残つて居る。身長が六尺何寸、弓は三十人力と云ふ青年將軍が、大和から漕寄せてそこに上陸し、渚傳ひにのつし〜と遣つて来て、やがて此下の牧港を出て還つてしまつた。残波岬の波は其時分から、今に至るまで此島の女たちが、眺めては泣くべき波であつた。恩納岳は東へ靡いて山の姿がしほらしい。あの麓では女詩人の恩納なべが、戀を歌ひ又大王の徳を頌した。

残波を見下して座喜味の城山が聳えて居る。昔山北の鎮めに此城を築いた時は、鬼界大島からも人夫が来て石を運んだ。讀谷山に居た間は護佐丸も安泰であつたが、如何に堅固の要害でも、中城はあまりに勝連の城に迫つて居た。それ故に終に奸雄阿麻和利と、兩立することが出来なかつたのである。しかも今はそれがもう物語と爲つた。斯うして見て居ると唯香久山と耳梨山の、昔の争ひを思出すばかりである。

南は佐敷大里の山々にも、曾て幾度か矢叫び関の聲が山彦を喚んだ。英雄の郷里は必ず多事であつた。其間には又巫女の最も靈なるものが、夢から覺めて神異を語り、或は遠い國から小船に乗つて還つて來た。世治まつて人の信仰が稍平凡に流れようとする、忽ち神女は與那原の沖に天降り、薄紅の狭霧に包まれて入江の水に浴みした。歴史は此ほどまでに單調を憎んだけれども、しかも今見る物は只の林と、海と砂濱との他に何が有るか。

此城なども榮えた時世よりも、淋しい間の方がすつと永かつた。あかい櫻が山に咲いて居た無爲の日に遣つて來て、恐らくは或日の大和の船頭殿加奈之なども、茫然として此昔を眺めたことであらう。如何なる種類の船頭殿であつたか、それも悉く今は不明に爲つたが、安波茶の友盛御嶽は即ち此人の塚で、永く旅客の神として祭られたと謂へば、來て居たことだけは確かである。日秀上人の來た頃にも、もう沖繩は平和であつた。但し邑人が餘りに妖怪に惱まされるのを氣の毒に思ひ、一字一石の經を寫して經塚を築くと、それが後には又御嶽と爲つて拜まれる。爲朝公の北の方と若君が、船出の別を惜みに來たと云ふ牧港の岩屋なども、固より立派

な拜所で、南に峙つ英祖の森城、此浦添の城の神、さては北の蔭に世を隔てたヨウドレの古陵と共に、史蹟は總て皆香の煙を以て保存せられて居る。さうして史蹟でも無い空つぽの昔が、其煙のやうに薄れて行くのである。

首里の岡には松がまだ茂つて居る。浦添から見ると少し低くて、百浦の山を見渡す雄大な趣は此に及ばぬのに、夙に文明の中心が彼方へ移つたのは、單に風水の教への爲ばかりでは無かつたらう。王都の氣勢を支持すべき海の津が、那覇と泊に於ては猶深く、安謝と牧港は先づあせた。山を拓けば土を流す、泉を汲めば流れが細る。つまりは早く榮えたが爲に先づ衰へたのである。併し處は衰へても、人は移つて猶榮えた。浦添の按司が立つて中山に王と爲れば、鐵を積んで牧港に來た大和の船も、やがて泊の橋の下に、紙や絹を運んだのであらう。況や陸より行けば手が届くほど近い。松を並木にした石道の珊瑚岩を、朝出ては暮に戻る幾千萬の男女の足が、斯うして石の角の圓くなるまで、登り降りをしつゝ、終に又新都を古くした。

首里は清水の永久に美しい町である。しかも聞得大君は辭し王は去つて、百浦添の南の芝生



には、盛んに大葉酸漿の花のみが咲いて居る。

## 一七 豆腐の話

沖繩の新聞に依れば、那覇の遊女病院には、何時でも七八十人からの若い女が入つて居る。之を見舞ひに親切が三分、風流が四分と云ふ位な友人たちが、毎日何人か遣つて来る。見舞の品物は、以前は主として刻煙草であつたが、此頃では豆腐が多いと云ふことである。若い女には法律も怖い、それよりも公然と煙草をのんで居ると、未成年者で無いと思はれるのが、猶一層こはいのであらう。それに比べると、豆腐は誠に罪の無い流行である。

暖かい南の國で有りながら、沖繩にはどうも白い色が豊かで無い。野山は一様に冬も深い緑で、處々に花の紅を以て點綴する。鳥を取繞らす干瀬の浪だけを例外にして、大小の船の帆にも褐色のものが多い。鷗の羽の色も必ずしも白では無い。濱の眞砂の一文字も、遠く見れば所

謂クリーム色であつて、之を運んで敷きつめた作り路も、リボンのやうで美しいが、やはり黄を帯びて緑と映じて居る。人間に在つても白を重んじ過ぎたと云ふものか、日常の生活には他の色のみが多く行はれ、島人は殊に年久しく山藍の香を愛して、其色に親しんで居たのである。普通の家の臺所などは、どこの國でも白いのは鹽ばかりで、勿論沖繩だけの特色とも謂はれぬが、實際これまでの民家の色は、此島では頗るくすんで居た。今や因習の縛めが時代の手にほどかれ、ちやうど朝鮮で平民の衣服が、晒しから染へ復つて来るやうに、琉球の家庭で白の自由を求めるとするならば、趣味の變化が豆腐から始まるのも不思議では無い。第一には物が手輕である。それにあの白さと云ひ、柔かな光と云ひ古色に倦んだ永年の眼を休める爲に、假に豆腐が食ふ物で無かつたならば、見る物としても亦必要であつたのである。

豆腐の色は常に新しいが、其流行は殆ど極度に達して居る。西宿の名護街道などを通つて見ると、買ふ家の數よりも多くは無いかと思ふ程、どこの家でも豆腐を造つて賣つて居る。表を圍うた石垣の片端、例のガジマルの樹蔭などに、麥酒箱を少し毀してそれへ板硝子を嵌め、僅

かの豆腐を竝べて其箱を枝に吊り、又は杭の上に載せて居る。所謂人無しあきなひである。傍に寄つて覗くと、多い時も二挺か三挺、或は庖丁で切つて半分だけ賣るものもある。買人が無ければ晩には引込めて、多分我家で食つてしまふのであらう。

以前は斯うでは無かつたさうである。察する所他府縣とは違つて、豆腐は家々で手作りにするのだが、器の都合などで一日の用ゐには餘るのを、かこうて置くよりは望み手が有れば譲つてしまつて、明日は又新しく作らうと云ふ、家刀自の才覺からで、しかも考へて見ると海道の軒の草鞋や馬の杓、元は斯う云ふ類のあきなひが他にも多かつたのである。それが豆腐を食ふ家の多くなるに比例して、軒竝に小さな豆腐屋を見るやうに近頃爲つた。有名な「豆腐屋へ二里」の狂歌などは、まだ此の心安い境涯を知らぬのであつた。

肥後では球磨の下駄ふみ豆腐など、謂つて、人吉領では低い木の臺に載せて賣つて居た。沖繩でも同じやうな臺を用ゐて居るので、よく見るとそれは豆腐を作る箱の蓋を逆さにして其儘用ゐて居るのであつた。此邊の豆腐は搾つてから後に煮ると謂ふ。箱も蓋も共に釜の中へ入れ

ると見えて、その押鮓の蓋のやうな下駄が、黒く水じんで居る。或は又我々の雪花菜の如く、大きな桃の形をした豆腐もよく見かけた。夫を四つにも八つにも切て賣る。野武士の如き剛健なる豆腐である。華麗繊細なる都の絹漉どもをして、面を伏せ氣萎えしむべき豆腐である。それをば不幸なるアングワたちは食べて居る。

辻の一廓には按摩の笛は無い。又ちりん／＼と鈴を鳴らして通るのは、只三世相の先生だけである。併しトーフイの聲は今や衢の夕を壓せんとして居る。田舎の邑里にも二里一里の間に眞の豆腐屋が今に出来るだらう。そんな未來には構はず村々の貞淑な女たちは、黙つて豆腐を作つて半分を賣つて居る。首里から岡を越えて那覇へ出る道を、晴れた日には幾人と無く桶を頭に戴き、泊の製鹽場に鹵汁を汲みに往來するのは、何れも白い豆腐の樂みを隣人と分かつたが爲に、勞苦する所の女性である。以前は濱に下つて海の水を汲んで還つたさうだ。松風村雨の昔とても、潮汲むわざはさう風流では無かつた筈である。

## 一八 七度の解放

平敷屋朝敏、才華は在五中將の如く、生涯は猶遙かに數奇であつた。どこの國でも策略を以て、老いたる政治家と闘へば敗れる。彼が十四人の同志と共に安謝の濱邊で斬られたのは、其三十六の歳であつた。妻は官に没せられて婢と爲り、孤兒は與那國の島に流され、今はもう家の衰運を歎くべき子孫も残つて居らぬ。

天久の人里をすこし過ぎて、安謝の悲しい故跡へ下りて行かうとする阪の口に、道に面してナ、ユーフィの墓が有る。近世式の見事な墓穴の前に、石を建て、詳しく故事を録して居る。ナ、ユーフィは七度身を賣つて奴と爲り、七度身を贖つて後終に長者と爲つた人である。父に事へて斯程までに苦しんだ故に、至孝には天の御褒美が有つて、其末永く昌えて所謂血食の幸を享けて居る。

路を隔てた岡の田を、又七ユーファとも呼んで居る。孝子が月の光で耕作をした遺蹟だと謂ふさうである。即ち連綿とした同じ家に、傳はる物語であらうのに、しかも遺老説傳の七與平利富を此地であつたとすれば、二百年前には全く別の由來記が有つたのである。漢文で書いた爲に精確で無いが、往昔の世天久に七人の男あり、共に身を某家に賣つて僕と爲る。家主は安謝の境に在る百二十歩の田圃を彼等に與へて、其利用の費に備へしめた。七人は善く主家の爲に勤め、暇ある時には兼て私用の田を耕し、數年の中に若干の米を貯へ、之を納めて七人一度に身を受けた。之を聞く人皆奇且異なりとし、遂に其地を名づけて七僕贖身之圃と謂つた。俗に七與平利富と稱すとある。ユーフィと謂ふのは、赦免を意味する古語かと思はれる。しかうして七つを一人の事と解すれば、其奇は愈傳ふるに足るのである。

昔の奴婢の主は此ほどに寛大であつたが、しかも身賣には年季と云ふ制が此島には無く、いつ迄經つても身の代を償はねばならぬこと、恰も我々の本物返しの如きものであつた。氣根の弱い者には一度でも身は抜けぬのに、七度とは誠に恐ろしい忍耐である。子孫に非ざる者も景慕せずには居られぬ。但し我々が若しユタなどの告げに逢ふならば、更に一步を進めて聞いて



見たいのは、其七ユーフィの高祖の又前の親は、果して如何なる事業を心掛けて、最愛の倅を七度も賣らねばならぬ程、金穀の必要を感じて居たかと云ふことである。或は寒中に鯉や筍を注文するやうな、支那上代の舜の父のやうな、分らぬ惨忍な人では無かつたか。

自分は曾て揚子江を溯り武昌に遊んで、李白の詩に名高い黃鶴樓に登つたことが有る。樓には題詞が多く、坂路には乞食が多かつた。其石段を半ば降ると、前に行くのは出羽海見たやうな親爺さんで、其衣裳に全く隠れて、青い青年が一人附添うて居る。別に痛風でも無ささうな老人だが、ステッキはかう突くものと云ふやうな手をして、息子の肩を力一杯に搦んで居た。多く見た中でも此孝行が最も惨酷であつた。支那の孝道は宗教であるから、之を論ずると冒瀆になるが、我々日本人には幸ひにして、天下の人の父と共に、孝行を受けるの道を講究するの自由がある。七ユーフィの父の如きは、正しくユタの夢にも現れる資格の無い、悪い魂であつたらしいのである。

所謂男逸女勞の問題なども、之と同じく二通りの見方がある。刀自が夫を思ひ子女の行末を

考へて、働かすには居られぬのならやさしい心掛けだが、所謂妻子珍寶及王位思想では、もう我々はちつと見ては居られぬ。多分そんな動機からではあるまいが、沖繩には時としては、良い兒の出世と共にひどく安心して、働けなくなつてしまふ親が少しづつ有るらしい。此は其家に取つては不幸な出来事であるのに、之を又羨んで中途から、金を出して親に爲つて見たい人が居て、取子の習ひがいつまでも濫用されるとも聞いて居る。

妻を求める爲に貯蓄せねばならぬ國の人を、氣の毒なものだと我々は常に謂つて居るが、村と村との間に遣るのを損と考へ、家と家との間に貰ふのを得とするやうでは、是亦一種の孝行貞節の評価ではあるまいか。中學の生徒には嫁の入用な筈は無いのに、處に由つては入學の條件として、不婚誓約をさせる必要があると云ふ話もある。幾ら誓約しても道德を改良せぬ限りは、古風な勞働組織の束縛は止まぬであらう。どうか今一度健氣な多くの好青年を解放して、自由に心から其親を愛せしめたいものである。

## 一九 小さな誤解

上

虚誕は書いて無くとも江戸時代の來聘記の類には、琉球を異國と見て珍らしがつた形が有る。之に比べると馬琴の弓張月の方は、利勇と毛國鼎とが争つたり、爲朝の助けたのが尙寧王の姫君であつたり、わざとかと思ふ椿説は多いが、氣樂に時代の距離を短縮した一點を除けば、其態度は所謂寫實であつた。國性爺などはちようど正反對に、我々二つの島の者が、大昔手を分つた同胞では無いかと云ふことを、此書に由つて感じ始めた者も多かつたやうに思ふ。さうすれば又尊敬すべき一の先覺者であつたのである。

忠臣毛國鼎の如きは此椿説に由つて、太田道灌同然の従容たる態度で、辭世の三十一文字を遺したことにせられて居る。其歌が大出鱈目で、今評判の笑ひ話であるが、猶辯護をすれば中

世の沖繩武士に、假に此種の文雅と高尚な名譽心が有つたと見ても、それだけは必ずしも無理な空想でなかつた。支那の學問に向つては、沖繩には五山僧以上の獨占者が有つた。久米村三十六姓の末は即ち是で、彼等は之に由つて此方面の交通を立塞いで居たのである。其階級を除いた一般の上流に取つて、文藝の標準はやはり山城の京であつた。關東奥羽の果よりも、更に因縁が薄く見えるのは單に路の遠近に比例したまゝである。

二百餘年前の混効驗集を見るに、伊勢や源氏の物語類から、徒然草太平記など迄が豊富に引用せられて居る。是が慶長の琉球入以後に、悉く薩摩を経て持込まれたものと考へる人は誰も有るまい。舊文明の誇りとしては、大和にも例の無い平假名文の石碑が十幾つかも残つて居る。何れも唐風景慕の最も盛んな十六世紀に屬して居て、しかも借物とは思はれぬ程度に、島の言語を書現して居る。公式令から頼れた我々の唐風に反して、此時代の下文も假名書きであつた。書體は世尊寺様だと謂つて居る。月の十八日の和歌會の式に、細道の文臺を説くなどは、大内菊池等の風流大名たちと、異なる所が無かつたのである。

聖禪二道の僧も多く入つて居る。權現の信仰は専ら熊野の系統であつた。彼等に假令傳道の志は有つても、互の湊に訪ひ寄る船が無かつたら、又其船人の胸の中に、似通ふ何物かゞ無かつたら、萬里の波濤を越えて來る因縁は結ばなかつたらう。後に航海が自由で無くなつて、寺も増さず名僧も出ず、古來の神道のみが引續いて全盛であつた爲に、沖繩の文明史を研究する人々に、此影響は至つて軽く見られて居るが、少なくとも名目なり外形なりに、今存する大和文化の痕跡も決して幽かでは無い。況や宗教こそは平民一般の風潮に、根を持たねばならぬから衰へもしようが、彼等歸化の大和人は、必ずしも此ばかりを携へては來なかつたのである。

例へば袋中大徳の琉球神道記の如き、内地へ持て還つて久しい後に上木をしたが、沖繩の見聞録に費したのは其一小部分だけで、主としてはあの時代の普通學とも謂ふべき天竺震旦の略史、佛教の傳來や十三佛の由緒などを、島の人たちに語らうとした説教の種本のやうなもので神々の縁起は専ら安居院の神道集に依り、暗記のまゝを書置くとあるを見れば、其目的は推測が出来る。所謂知識階級に接近して善根を栽ゑしめる爲には、恐らくは先づ彼等のゆかしがつ

た大和の事を多く語らねばならなかつた。此點に掛けては九州の偏土も事情は大差が無いのである。番にも訴訟にも京へ上らなくなると、遠國の莊園へ文化を普及する方法は、内地に於ても旅の法師以外には、もう無かつたのである。

斯る個人的交通でも、久しく續いて居れば生活の上に影響した。鑛山に乏しい島の社會にも、悲しい哉、武器と金銀とは夙く入つて居た。絹と珠玉とはやはり重ぜられた。歌や言語の上にも鎌倉趣味が傳はつて遣つて居る。浦々の按司を都に住ましめて、中央集權の實は大いに擧がつたが、なほ言語の統一が十分には行はれず、首里の官話が常に特別に上品と認められたのは即ち外來語の採用に由つて、爰ばかり着々と物言ひが變つて居たからである。チェンバレン氏の琉球語研究は誠に辛苦の著であるが、其内に「う入りみしえびり」や「いめんしえびらん」などの二三の敬語の例を示して、日琉の言語の間に大分の隔絶が有るやうに、考へさせただけは無理であつた。此は都で近代に發達した「いらつしやいませ」の類であつて、只首里那覇の上流のみが之を用ゐ、宮古八重山は勿論、すこし田舎へ行けばもう常人は、今なほ之を用ゐて

居ないのである。

## 下

沖繩人が沖繩語に愛着するのは當然の話である。所謂普通語の如何に達者な人たちでも、互の間では之を使はぬようにする。今の程度で二通りの語が、併用せられて行くことを望んで居る。伊波君などの沖繩口の講演は、非常に好い感じを以て聽かれて居る。やがては此で書いた本なども出ることと思ふ。自分は是が一種の國語運動であつても、猶賛成をする積りであるが、しかも遺憾ながら終には徒勞に歸するだらうと思ふ。其理由は極めて簡單である。沖繩語にはまだ統一の事業が完成して居なかつた。統一の基準と爲るべき首里那覇の語には活力は有るが、それが有り過ぎて却つて盛に變化して居る。是では保存の方で追付くことが出来ぬと思ふ。

今後は益々さうであらうが、以前とても久しく此變化を續けて來たのである。島の外には新

しいものが常に在る。一つの事物乃至は心持が入つて來る度に、必づ二つ宛の語を用意することとは不可能である。新語の採用には我々も豊かな經驗を持つて居るが、支那で製した耳馴れぬ名稱などを、何とかして歌に詠めるやうな、風雅な語に引直さうとして見たけれども、自轉車をヲノコログルマと謂ふ類は、とう／＼通用しなかつた。所謂和歌和文の特殊文學が有つて之を注文してさへも、漢語の跋扈を制御することが難かつた。ましてや沖繩の方では眼の言語はずつと昔から大和と共通であつたのである。中でも官府の記録文書などは、如何して斯う迄に練熟し得たかと思ふほど、完全なる罷在や奉存を綴つて居た。偶々一二の變つた用語が有るかと思へば、それも西國一帯の特色を傳へた迄であつた。此文章は勿論勉強して學んだものだが猶鹿兒島の腕力だけで、之を押付けたとは思はれぬ。最初から語脈の一致が有つて、表現の順序が同じかつた上に、社會關係の複雑緻密に爲るにつれて、之を意味する語の不足分を、追々に内地から取寄せて、補充して行く久しい仕來りがあつたから、別に此以外に沖繩一流の文章を、發達させる機會が無かつたのである。

或種の公文には聲を揚げて、文字の無い者にも讀聞かせることが屢々あつた。之を繰返して居るうちに、我々の所謂切口上の如く、文章の語を會話にも採用する。チェンバレン氏の僅かな語彙を見ても、此経路を通つて入つて來た、時代々々の癖のある語が中々多い。それを双方で別々に支那から輸入でもしたやうに、又は互に獨立して案出したかの如く、同氏は説き人々は信じて居る。

音韻の變化などは、離れて住めば何處にも起る。一所に住めば又次第に一致して行くだらう。それも今日のやうに新規に使はねばならぬ語が多いと、歩みの遅い學者たちがもう十分に研究したと謂ふまで、元の形を遺して居ることは困難であらう。我々から見れば沖繩は言葉の庫である。書物も無かつた上古以來、大略出來た時代の特徴を附けて、入れて置いた品が大抵残つて居る。内地の方で損じたものが島では形を完うして居る。それを棚卸しをして引合せて見る爲には、先づ小さな誤解から片付けて行かねばならぬ。

今の正しい首里語なるものに耳を傾けると、律義な九州邊の武士に對するやうな感じがする。

彼等の應酬に多く用ゐられた、「尤も」「随分」「全く」などの副詞が、意外に最初の意味に近く使はれて居る爲でもあらう。又何々の「やうな」をグートルと謂ひ、何々する「ならば」をドンセーと謂ふ類は、今も存する九州の方言であるが、或は本來の沖繩語かと思ふ程、盛んに用ゐられて居る。聴きたいをチ、ブシヤン、無いだらうをネランハジと謂ふブシヤンやハジも、「欲しい」と「筈」との中世の用ゐる方の儘であるが、我々の俗語が却つて變つてしまつて、今では向ふの方の一つの特色と見られて居る。

「筈」は儘かに弓矢から出た武家の語で、きつと間違はぬと云ふ場合に用ゐたかと思ふのに現在此方では、「だらうと思ふが」位の處に使つて居る。それを忘れてしまつて沖繩人の辭令は婉曲過ぎる、明白な時にもハジと謂つて、斷定の責任を避けようとするなど、飛んだ批評をする者のあるのは、是も亦一個の小さい誤解である。

我々の悲しまねばならぬ大きな誤解は、元を忘れるのが幸福に生きる手段、通説を批判せぬのが永遠の賢明と思つて居ることである。この私の解説などは誤つて居ても、學問さへ進めば

すぐ訂正せられる。あんまり有難くは無いが日本なども、今やこの小誤解期に入つて居る。それを訂正するのも骨が折れるが、丸きり盲蛇のまゝで捨て、置かれるよりは少しはいゝ。

## 二〇 久高の尻

東西古今の尻の文獻の中で、哀絶又艶絶なるものが久高の島に残つて居る。久高では外間の根人眞仁牛に、女の同胞が二人あつた。姉の於戸兼は外間の祝女で、島の御嶽の御祭に仕へて居た。妹の思樽は巫女であつた。首里に召されて王城の巫女と爲り、日夜禁中に住んで神の御役を勤めて居る中に、國王の御心にかなひ乃ち入つて内宮の人と爲つた。性貞靜にして姿は花よりも更に美しかつた故に、一人の寵愛と幾多の恨み嫉みと、悉く此君の身に集まり、宮中眼を帯て、物言交す友としては無かつた處に、どうした悪い拍子であつたか、多勢の居る中で、飛んでも無い不調法な音がしたさうである。

宮女たちは之を聽いて大に悦び、寄ると障るといつまでも此噂のみをした爲に、何分にも辛抱して御前には仕へ兼ね、終に御暇を賜はつて故郷の島に還つて來た。さうして久しからずして王子を産んだ。尊貴の御胤なれば、尋常を以て遇するは恐れありと、新たに一棟の産屋を建て、之を育くみ、御名を思金松兼と付け申すとある。

思金松兼八歳の童子と爲つて、日夜に我父は誰ぞと母に尋ねたまふ。人は皆父ありて生るゝに、我ばかり母一人の子と云ふ道理は無い。必ず之を匿さるゝならば、生きても味氣なしと食事絶つて、憤り且哭いて御責めある故に、是非も無く昔の官仕へのつらかつた日の話をした。さりながら田舎の果に人となりたまふも御運である。とても都に出て父の王と御名乗りかはしは叶ふまい。詮も無い素性語りをしなかつたのも其爲と、強ちに諫め申されたが、王子は之に耳をも掛けず、直に伊敷泊の濱に出て、七日の間東を向いて神々に禱られた。

其七日目の夜明け方に、沖の方から光り輝いて、寄つて來る物がある。衣の袖を展べ掬ひ取つて見ると、不思議や黄金の瓜であつた、大に喜んで之を懐にし、母に別を告げて遙々と首里

の都の、王城の門の前に立つて、世の主加奈之に對面がしたいと申さるゝ。髪は赤く衣は粗く姿はしかも氣高い童子が、斯く斯くの次第と聞き召して、何事の願ぞと御前近く呼上げたまふに、懷中よりかの黄金の瓜を取出し、此は是國家の寶、天甘雨を降し沃土已に潤ふの時、曾て屁をしたことの無い女をして、此種を播かしたまふものならば、繁茂して盛んに實を結ぶべしと申上げた。國王大に笑ひたまひ、そんな女が此世に有らうかと仰せられる。然らば屁で御咎めを受ける者も無い筈と、先づ御心を動かし奉る。やがて内院に左右の人を遠ざけ、御尋ねに由つて詳しく久高の母が歎きを言上した。此王他の御子としては無かつた故に、後に思金松兼を世子と定めたまひ、終に王の位に登つて百の果報を受けたまふと語り傳へて居る。

第四王朝の尙金徳王は、即ち此思金松兼の御事かと云ふ説がある。それでは僅四百四十年程の前であるが、或はもつと古い話であつたかも知れぬ。中山國王が年毎に一度、海を渡つて久高の島の神を御拜みなされたのも此時からで、其例が絶えて後も久しい間、外間の根人と外間祝女は、毎年上つて來て魚を獻じ御目見えをした。其時根人には玉貫一双、祝女には葉茶と煙

草とを賜はるが例であつた。

又尙徳王と云ふ若い武勇の世の主が有つた。或年の行幸に、此島の祝女の艶なる色香になづんで、永く逗留ある間に、都は亂れて王妃王子も亂軍の中に失はれ玉ひ、衆に推されて英傑金丸は立つて王と爲る。之を聞いて尙徳王は、或は憤つて自ら世を早められたとも謂ひ、或は還御に船覆つて海に隠れたまふとも傳へられる。尙巴志王の花やかな統一事業は、斯うして跡が絶えてしまつた。しかも今に至るまで久高の島人が、前朝を慕ふの情はまさしく一篇の詩であつた。八十年程前には此島の濱で、網を引いて黄金の菊の花の簪を得た。それを尙徳王の遺物とするに、一人も反對する者が無かつたが、實は簪の制度には變遷が有つたので、是は實際は此王以後のものであつた。外間の根人の家には、思金松兼の産屋を今でも保存して居る。母の思樽の衣袴も大切に傳へて居る。はかまと謂ふのは即ちカ、ンであるらしい。白い羽二重のやうな絹であつて、昔に象どつて後に製したので無い證據は、紐に結んだ皺があり、又ほんの少しばかり汚れて居る。即ち曾ては此美女の温かい肌を包んだものだといふのである。

## 二一 干瀬の人生

上

干瀬はさながら一條の練綿の如く、白波の帯を以て島を取巻き、海の瑠璃色の濃淡を劃して居る。月夜などにも遠くから光つて見える。雨が降ると潮曇りが爰でぼかされて、無限の雨の色と續いてしまふ。首里の王城の岡を降る路などは、西に慶良間の島々に面して、遙々と干瀬の景を見下して居る。虹が此海に橋を渡す朝などがもし有つたら、今でも我々は綿津見の宮の昔語を信じたであらう。

俊寛僧都や成経康頼の輩は、憂ひ憤りに心が亂れてゐた爲か、この大潮の波を見て泣いたと謂ふ。少なくとも平家物語にはさう書いてある。京の小さな陰謀に没頭してしまつて、島を最も美しく又最も安全にせんとした天の大神の政治には、意を注ぐ餘裕が無かつたのである。何

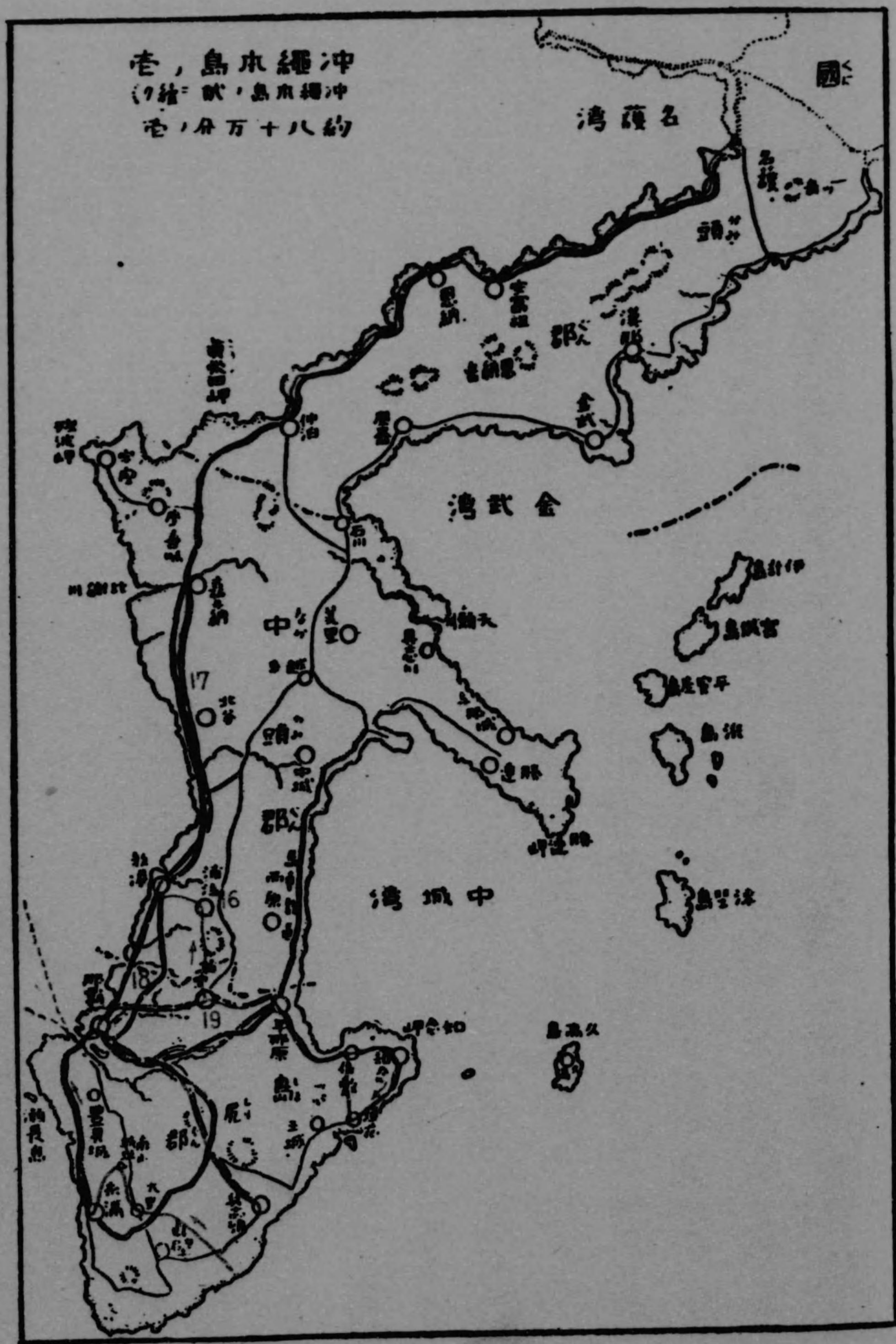
人が見て名づけたものか、鬼界と云ふ語も天涯の孤客を劫すに足りた。それに沖繩より北の潮はまだ冷かで、珊瑚の生活が活潑で無かつたものか、大瀬の隠れ岩は海底に潜む魔物のやうに其脊を只處々に露すばかりであつた。暗夜に海の鳥などが其上に居て鳴くと、馴れたる船人すらも怖れおのゝいたと謂ふから、めづしい都人にはこの美しさがわからなかつたことであらう。斯うして久しく疎まれた南方の海にも、尙靜かなる文明の成長は有つた。薩摩の坊津秋目の浦々では、暮春初夏の風の日に、花瀬見物と名づけて小舟を漕ぎ出し、遠く岬の外の澄み透つた潮の底に、青赤黄紫色々の岩の、立ち並ぶ風情を賞美しに行くやうになつた。七島大島でも磯が有れば種々の砂を沖から吹き寄せて、いつと無く處々の兼久(砂原)を作り、今見る多くの村里は其兼久の上に立つた。港の奥が豊饒なる田と爲つたのも、ひる木の林の次第に入江を蔽うて茂つたのも、悉く大潮が荒海の怒を鎮めた力であつた。殊に沖繩では干瀬と呼ぶまでに此岩が高く、不斷の白波が島の姿を淨く尊くすることは、恰も佛菩薩の御像に光焰を取附けた如くであつた。しかも斯うして外難からは保護せられて居ても、干瀬から内の生活が、やはり亦



或時は至つて楽しく、或時は悲しく辛かつたことだけは致し方が無い。

世界の海の荒れ狂ふ日には、餘波は寄せ來つて此干瀬を打越した。島ばかりが獨り平穩なるアトールのやうな世中を、維持して行くことは不可能であつた。空と海との縫目の絲も、時あつて綻びざるを得なかつた。日を経て南の風の吹く頃は、遙かなる常夏の國から、椰子の實が流れて來る。之に細工をして瓢に代へ泡盛の芳烈なるものを掬んで樂む中に、次第に島人の心は廣くなつた。沖に出て見ると渡り鳥はどこまでも飛んで行く。雲より外には又幽かなる次の島の影があつた。小舟にクバの葉などの帆を掛けて、知らぬ島々を見に往く者は、やがて又大きな船を誘うて戻つて來る。岡に登つて送る者待つ者、我と海上に漂ひあるく者も、いつと無く此干瀬の白い波を、眺めては憂苦するやうになつたのである。

寶貝は此あたりの海に、珠や錦よりも尙美麗な、様々の種類を産する。それを貨幣の用に立てることは、沖繩では知らなかつた。又何處からも求めには來なかつたらしい。絲滿の漁民等は、只其中の大きな一種を採集め、之を刺網の錘に用ゐて干瀬の魚を捕り、さうして大に富ん



で居た。貝の種は盡きないが、人が多くなつては魚が不足する。乃ち友船を誘つて年毎に大海を横ぎり、南は石垣基隆の浦にも移り住み、或は遙々と唐桑金華山の、寒い磯までをあさるやうになつた。しかも故郷が有り家がある爲に折々は還つて来る。さうして又新たなる願を大小の船に積み、港の出入の追々と繁くなるにつれて、風や潮の響も昔の響では無くなつた。干瀬にも色々の悲しい記念が附添はつた。多良間は夢ほどの小さな沖の小島であるが、既に十幾つかの錆びた錨が、其干瀬の岩の間に沈み、空しく白波に洗はれて居る。

併し島人が島を出なかつた以前の世の中でも、干瀬と生活との交渉は極めて繁かつた。生れてから死ぬまで、死んでから祀られる迄、家々の柱の礎、石垣の石、更に大島などではモヤと名づけて、古風な墓の作りには、悉く干瀬の石を引揚げて用ゐて居た。御嶽の靈地もナバ石を以て圍うて居る。ウブの入口には宮古でも八重山でも、特に菊明石の類を弓形に研つて、小さな石の門を覆うて居る。濱から運んだ美しい眞砂も、もとは皆干瀬のものである。新しい道路にも之を敷詰めて、次第に野山を開いて行く。さうして其野山も島もやはり亦、洪荒の世の干

瀬であつた。

## 下

石垣島の大濱では、西瓦東瓦の兄弟が祀られて居る。カハラは久米島の笠末若茶良などのチヤラと同じく、又運天の百ぢやなのヂヤナと同じく、部落の長を意味した語であらう。此兄弟二人の瓦の時代までは、八重山には鬪争と搶奪の他何物も無かつた。獨り彼等が相愛して、平和の草の庵を結んで居た爲に、招かざる四鄰の男女、來つてこの頭目の傍に居を構へ、遂に集まつて宮良白保の二村と爲つた。然らば垣を築き禽獸を防ぐべしと、東は川尻より西は高山まで、仲嵩の靈地を中にして二里の間、始めて五尺の高さに大瀬を積繞らしたと傳へられる。干瀬は此の如くにして此島の神代から、文化生活の爲には必要であつたのである。

併し其以前、人の大いに鬪ひ争つたのも、やはり亦干瀬の上であつた。宮古は珊瑚の島だけ

に、干瀬が我々の姨捨山に爲つて居る、西銘の主嘉播の親の三人の男子、老いて盲目と爲つた父を疎んじ、魚捕りて慰め申さんと偽り欺いて、沖の干瀬に伴ひ行き、引汐の碇に棚を拵へて其上で酒宴をした。やがてよい頃を見て各小舟に取乗り、父を残して還つて來ると、潮は満ち棚は毀れて、嘉播の親は浪の上に漂うた。島には饑を神とする多くの昔語が有るが、此時も忽然として大きな饑現はれ、背に老翁を乗せて安々と濱に送り來る。兄とはちがつて孝行な二人の娘、先づ牛を宰して大魚の勞に謝し、家には人々を集めて歡びの宴を開いた。三人の兄弟は之を聞いて其恥に堪へず。怨は饑に在りと干瀬をさして漕いで行くのを、盲目の父屋上に出て之を咀へば、一陣の風吹起つて其舟を海に捲入れたと謂ひ傳へて居る。

或時には又干瀬の遊びにかこつけて、仇家の孤兒の心を試さうとした武士があつた。陸で闘ふならばとても敵すべくも無かつたのを、却つて水中に機會を得た爲に、十歳の童子は偶然に親の怨を報いたと謂ふ。但し此話にも類型がなほ有つて、必ずしも史實とは認められぬが、此以外にまだ二つ、どうしても此邊の島で無ければ、起り得ぬやうな話が語られて居る。干瀬を見

て過ぎる後の世の旅人が、いつかは思ひ出すやうに此序に書いて置かう。

其一つは伊良部の島の漁夫、登佐と云ふ者の話である。登佐にはあでやかなる妻が有つた。或時干瀬に出て此男、岩の穴に手を差入れて蛸を捕らうとすると、其手がどうしても抜けぬ中に、潮が大いに満ち來つた。爰で死なねばならぬかと、獨で悲しんで居る處へ、神谷の仁屋徳と云ふ者、通りかゝつて之を見付け、私の望を只一つ、許してくれるならば助けよう。命を救ふ禮として、御前の女房を譲つてくれと謂ふのであつた。死ぬよりはましと思つて之を承諾し二人連立つて戻つて其話をすると、妻は一笑して約束なれば是非も無し、吉日を擇んで婚禮の用意をしたまへと謂ふ。さうして數月を延ばした後に、或日神酒と肴とを調へ、登佐の妻は神谷の徳を招いて、斯う云ふ風な話をした。人の妻を取るの善いことと無。さうして唯一時の樂みである。併し約束を破るのも悪いことだ。何と二人で夫婦に爲つたと云ふ歌を作つて、之を島々にはやらせ、約束も破らず男も棄てさせず、さうして登佐と私とは、元の夫婦で居てはどうかと謂ふと、徳も感心して其意見に従ひ、神谷の仁屋が人を助けて、美しい妻を得たと

云ふユンタばかり永く残り、登佐の幸福は元の儘であつたと謂ふ。

第二の話も亦干瀬の蛸に關して居る。石垣の四箇から未申の沖に、午の方干瀬と謂ふ怖ろしい岩がある。近い頃の大風の日、一艘の傳馬船が此近くへ流れたのを、取りに往かうした舟が先づ覆つた。三人の船頭の二人は行方知れず、今一人も死んだことと思つて居ると、風が鎮まつて後に、向ひの竹富の島から還つて來た。干瀬の上をあるいて自分で上陸したのださうだ。二島の端と端とは一里に近い。引潮には波が見える程の深さであつて、只二箇所ほど泳がねばならぬ切れ目があつた。この長い岩橋の上を、夜の十一時から次の日の午後二時まで、一足づゝ拾つて歩いて來た。島でインミと稱する海眼鏡をかけて居た。腹がへると蛸を見付けて捕つて食べたと謂ふ。此絲滿にも好い女房があつた。竹富の島から夫の乗つて來る舟が見えると、待遠しさと悦びの餘りに、海に飛込んで中途まで泳いで迎へに出たと云ふ話である。干瀬の附近には今でもまだ、此様な生活がいくらでも有るらしい。

## 二三 島布と粟

沖繩の芭蕉布だけは、自ら織つて着る者がまだ多いが、北では奄美諸島の紺の紬、南は先島の紺白の上布などは、殆ど皆他所の晴着となつてしまふのが、昔からの習はしであつた。島の女に布を織らしめる制度は、勿論近世の發明では無いが、其發達の跡を尋ねて見ると、今も遺瀨無い記念が遺つて居る。

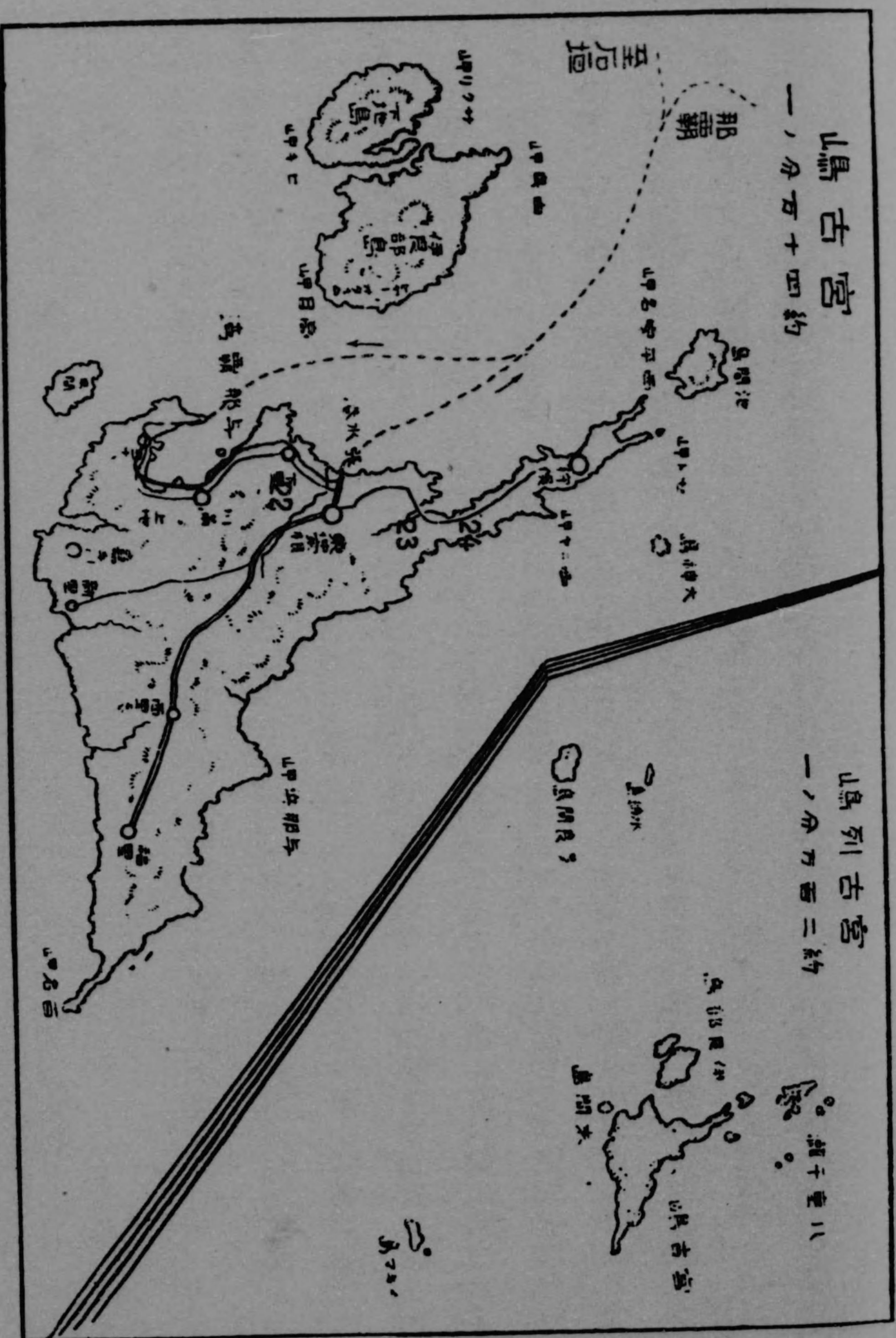
以前田舎でよく聞いた子守唄に、七つ木綿の絲の數と云ふものがあつた。單純な村の娘に取つては、經絲の數を算むだけでも、辛氣臭い仕事であつた。それで物の綿々として盡きざるところを、之に譬へて歌つたのである。處が南の果の島々へ來て見ると、妹背山のお三輪が持つやうな緒環を片手にして、小屋の石垣に差込んだ二本の竹の串の間を往來しつゝ、一筋ならべに機の絲を綜て居る。つまりは布一匹の絲の長さだけ、素足で同じ路上を歩かねばならぬのである。僅かばかりの機道具ぐらゐは、工夫し出されぬやうな社會では無いのだが、昔から人の力

は依藤太の卷絹の如く、取れども盡きぬものと考えたのが癖で、斯うして銘も落款も無く島を出て行く物に、優しい女性の生涯を潰させて居るのである。

但し島で上布を織る程の女は、敬はれもすれば又羨まれもした。二十<sup>よ</sup>樹の紺縞になると、一反が並の白布の七反分にも評價された。其家は言ふに及ばず、村でも之が爲に貢納が樂になる。それ故に名人の機の傍には、若い娘たちが多く見習ひに遣つて來て、次の代の苦勞の下拵へをした。宮古は今でも藍染の布を誇りとする。布織る女の手は遠くから見ても黧い。是も何とかすれば指を汚さぬ工夫は附くだらうが、凡そ此島で手の眞白な女などは、人中に出て物を言ふことは出来なかつた。どこの家でも嫁に取らうとしなかつた。針突なども同じことで、是が亦女同志の、伊達名聞にも爲つて居たのである。實際に宮古の人の黧には、紺の柄と似た模様が多い。さうして若い女にも黧をする風が、まだ中々止まぬさうである。亭主に附いて島から外へ出ようとする、これが何時でも妨げになると謂つて居る。併し他の島でも内地でも、黧をせずとも女はやはり多くは機などを織つて、家にばかり居るのだから、まだ現實の問題とは認

められぬ。

甘藷の種の輸入せられる迄、此島では専ら粟を食べて居た。四百年間の人頭税も、すべて此粟であつて、只布を納め得た者だけが、布に換算することを許された。中山ちゅうざんの方でも以前は先島の穀類を以て食料の一部に充て、居たのであらうが、シムの世界と爲るに及んでは、澤山の粟は皆酒屋に拂下げられたさうだ。此が本來の泡盛であつて、米で造つた今の焼酎よりは、ずっと辛く又強かつたと謂つて居る。兎も角も無くて濟みさうな物ばかりの爲に、並の百姓の餘分の骨折は、一通りでは無かつたらしいのに、古くから有る宮古の記録では、島の土地が餘りに豊沃で、穀類の有餘る處から、人民が放埒で喧嘩争闘の止む時が無い。是は何でも大國に御願ひ申し、少し重い年貢でも取立て、載いたら、自然に勤勞の必要を感じて來て、悪い考を起す餘裕が無くならうかと、よく思案の後に沖繩に従屬を申出でた、といふことに傳へて居る。即ち最初から現在の民意などは、特に少しも代表せぬ積りの仕事であつたが、記録は要するに有識階級のものである。沖繩に對する忠臣は同時に、島でも永く恩人として之を仰いで居



るやうに、書残されてあるのである。

さうして役人には課税の減免があつた。上布の評価にも此人々のみは之に參與した。之に反して布織る女たちの境涯は、元は一つしか改良の途が無かつた。即ち若く且つ面影の清らかな間に、沖繩から来る高い官吏に愛せられ、子を生んでそれが男であつたら、後に士族と爲ることが出来たのである。尤も士族に爲つても立身をせぬ限り、布はやはり織らねばならなかつた。さうして又今でも織つて居る。勿論今日の労働は自由であるが、小泉八雲さんの所謂先代のゴストが尙憑いて居る。島の人が只黙つて忍んで居る辛勞は幾つか有る。島の布の價は織つてしまつてもまだきまらぬ。商人の知らせて来る相場がどんなでも、そんなに廉くては賣らぬと言ふことは今日でも出来ぬ。布を賣つて買はねばならぬ物が多いからである。粟の耕作は減じ、米は始から少ない故に、飲むとすれば泡盛なども買はねばならぬ。官古諸島は人口が五萬人で毎年一萬個の酒甕が輸入せられる。此だけの泡盛を父や夫に飲ませねばならぬ。

## 二三 蘆刈と竈神

老いて目盲ひて子に棄てられ、饑に救はれ孝女に迎へられた宮古島のキングリヤ、西銘の主嘉播の親の前半生には、尙二つの傳説が纏綿して居る。それが三つともに大和の中昔を、故郷とするらしいのは如何なる因縁であらうか。

此長者、若い時の名は炭焼太良、荒野の草の一つ屋に、獨り炭を焼いて住んで居たのを、守護神の導きあつて幸運の妻を貰ひ當て、終に鳥隨一の有徳人と爲つた話は、以前炭焼長者の研究に於て之を述べた。北は津輕の戸建澤とたてさば、南部最上の田舎から、中國九州にも行渡つた物語で分けても豊後の臼杵領の、石佛を以て評判せらるゝ深田の満月寺、同じく三重の内山觀世音などが、夙くから有名である。

宮古では長者の女房は出戻りであつた。良く無い本の夫とは稚い頃からの約婚であつたが、縁盡きて別れたことに爲つて居る。野崎の長井に住む二戸の民、一人は漁を業とす。曾て前離まへはなれ

の干瀬に小舟を漕寄せ、磯に寄木の有つたのを枕として、潮合を待つて居るうちに、半夜に神の話の聲がする。寄木大氏よりきおほうぢ、今宵は長井の村に、隣同士で子が生れる。いざ參つて運を定めてやりましょう。いや此方には來客が有つて、今宵の御伴は致し兼ねる。どうぞ宜しきやうにと斷つて返すと、暫らくあつて以前の神又立寄り、男の方は乞食の運、女の方は産屋の作法にかなつたれば、一日毎に糧七升と述べて還る。漁師は思ひ當ることあつて急ぎ戻つて見ると、我家には男子出産し、隣の家の女の赤兒には、生れると直に額に鍋の墨を附けて居た。心の驚きを包み隠して、斯く時を同じくして生れたのも天縁と、やがて隣同士の縁組を約束した。

此話は他の府縣でも屢々聞くが、多くはもう此だけで終つて居る。さうして山の神と道祖神の御談合と云ふことに爲つて居る。宮古の島で之を寄木の神と謂ふのは、如何にも自然な變化である上に、其話にはまだ續きがある。此女の兒の名は眞氏、是が後には炭焼太良の妻である。振分髪の夫は放埒で身の運を知らず、或年新麥の初穂祭に、世の習ひの麥粉の供物を庭に投付け、女房に悪口した咎で、愈々ユリ(穀靈)と云ふ福神に見放され、妻は離別せられて西銘の村



に往つてしまひ、自分は次第に零落して、終に家々の門に立つて、餘りの食物で命を繼いだと謂つて居る。

宮古島では二百年も前から、之を大昔の族長が家の物語として語り傳へ、且色々の異傳をさへ生じて居る。斯ういふ全國に遍滿する昔話が、如何にして此島だけの歴史とは爲つたか。勿論何人も推斷することは出来ぬが、袋中和尙の琉球神道記には、竈神の由來として、殆ど是と同様の話を載せて居る。近江國は甲賀郡、由良の里に住む二人の民と謂つて居る。夜の假宿りに神の話を洩聞いたこと、前夫が無慈悲で好い女房を失つたのも、宮古の古傳と一樣で、しかも尙其先の話がある。前夫の名を箕作の翁と謂つた。後に乞食と爲つて長者の家の臺所に来り立ち、施しの食を受けて喰はうとして、ゆくり無く前の妻の姿を見た。悔と恥との情に堪へかねて、終に竈の傍に倒れて死んだのを、夫の長者に見せまい爲に、下人に言付けて竈の後の土を掘つて埋めさせたのが、後には此家の火の神と爲つて、愈々長者の福分を豊かにしたと云ふのである。

長者の傳説は殊に斯う云ふ風に、次から次へ續いて行くのが例である。しかも神道記の方が遺老説傳よりも百年早く、宮古の方にも鍋の墨を、生れ兒の額に付けると云ふ點に於て、幽かながらも竈の信仰に縁を引くのを見ると、さう古くから双方別々に、發達した口碑では無いのかも知れぬ。離別の妻の出世談は、今沖繩の組踊に、未めでたしの「花賣の縁」がある。更にヤマトの方では大和物語の時代から、蘆刈の話と云ふものが知られて居た。あしかりけりと云ふ秀句が使ひたさに、之を難波の浦に持つて往つたのかとも思ふが、近江の方でも箕作の翁と謂ふのが、蘆を刈る業體と稍近い上に、豊後の炭焼長者には前の夫の話は少しも無くて、やはり又蘆刈某と云ふ子孫の苗子が傳はつて居る。

竈神に醜い神像を作るのは、今尙東北一般の風である。之を火男と謂つたのがヒョットコと爲り、火吹きと謂つたのが潮吹の面に爲つたかと思はれる。善い妻と悪い夫の單純な物語は、此から發生して同じ民族の行く限り、野の果・鳥の果までも、火を焚く度に繰返されたものは無いか。さすれば南海の沖の島に漂着した昔のものは、獨り平家の落人の口碑のみでは無か

つたのである。

#### 二四 はかり石

南の島では到る所、多くの石敢當せきかんとうを見てあるいた。鹿児島まで還つて來て石敢當の話をする  
と、其がどう誤つて傳はつたものか。土地の學者の折田翁が、何とも合點の行かぬ點で非難を  
せられた。自分は口碑も只の石碑と同じく、後には苔蒸し漫漶するものだと感じて居たが、  
斯くまで早速には變化しようとは思はなかつた。そこで此序に石敢當の事を報告する。

石敢當の石を建てる風は現に東京にも在る。東京から北にも捜せばあるらしい。長崎には勿  
論ある。鹿児島では名物に算へる位もある。つまり日本一圓の近世の流行であつた。従つて沖  
繩縣下の島々に在るものも、何處の眞似とも言ひにくいと共に、唐芋同様に爰が輸入の水口と  
も謂はれぬ。只此石の文字は支那から學んだもの、さうして餘り古くからの風で無いことは、

推定して置いても大抵よささうに思ふ。

此推定を更に有力にするのは、八重山に於ける自分の實驗であつた。石垣島の四箇村でも、  
石敢當の立て、あるのは鹿児島邊と同じく、丁字路の突當り、人家の表口又は石垣の角などで  
石の形にも著しい變化は無いが、たつた一つの珍らしいことは、文字を刻して無い石敢當の有  
ること、是をも土地の人は八重山風に、インガントウと呼んで居る。年寄や女は又ピジュル  
とも謂つて居るが、是が石敢當の古い名稱と思はれた。或は二つ別々の物を、混同したのでは  
無いかとも思つて見たが、其石の在り處、其高さが二尺と三尺との間で、上の方が少しく細り  
頃合の自然石か、もしくは僅かの人口を加へたものなることも双方全く同じで、之に對する信  
仰も亦同じである。相異は單に文字の有無で、文字あるものは概して新しい。且つピジュルと  
云ふ名前も、必ずしも無文の石だけに限るのでは無い。

沖縄本島にも字を刻せざる石敢當は有つたのかも知れぬが、自分には心附かなかつた。只國  
頭郡誌を見ると、國頭地方には別にピジュルと名づくる信仰上の石があつた。是は内地の村々

に在るハカリ石、岐阜縣などで重輕様と云ふのと同様に、祈願有る者が両手で持上げ、重さ輕さの感じに由つて、心中の祈念が叶ふか否かを卜する爲に用ゐられる。即ち上古以來の石占である。石占の信仰が絶えて形式のみ残る地方では、一方には力石と謂つて、一種青年の運動具と爲り、又他の一方には辨慶の礫石だの、牛若の背競べ石だの、傳説と爲つて居る。石を靈物として神意を之に問ふのは、日本には普通の習俗だから、其類例を沖繩のビジュアルに見出すのは不思議とは思はなかつた。しかも國頭郡誌の著者島袋君などは、ビジュアルと石敢當とは別物だと、今でも信じて居られるさうだ。

處が八重山のビジュアルは石敢當である上に、此にはまだハカリ石の信仰が稍遺つて居る。即ち此石が倒れると雨が降ると信じて居る。之を轉用して雨乞には此石を倒す。内地の方でも村の石占には、晴雨は主要なる一問題であつた上に、石占に用ゐる石は今の石敢當と同じく、魔除の效を具ふる地境の立石が、やはり亦多かつたのである。

そこで自分は進んで斯う推論しようとした。丁字路の衝などに石を立て、目に見えぬ邪神の侵入を防ぐ風習は古く、其石に石敢當の三字を刻する行事は新しい。支那から輸入したのは此文字を彫入れる風だけである。支那でも南部の市邑には弘く石敢當の石が有るが、恐らくはこの刻字の選定は古いことであるまい。以前は多分魔除けの石神を武神と考へ、朝鮮などの如く石將軍と彫つて居たのが、歴史上の人物にちようど此場合に似つかはしい、石敢當と云ふ將軍あることを知つて、始めて此文字が流行したのだらう。實在の人であると否とは、迷信者流の問ふ所では無かつた筈である。まづ此だけのことは確かに鹿兒島の史談會で述べた。

又石敢當何人ぞやと云ふことは、如何にして日本に此種の石を建て始めたかの説明に、ちつとも役立たぬと今以て信じて居る。さうして我々の問はんとするは後者である。宮古の東仲宗<sup>あがりなかそ</sup>根の海際の芝生に、ぼつんと一つ文字の無い石が立てゝある。むかし少年を此傍に連れて來て背丈を検し、石より高く爲つて居たら、人頭税を課し始めたものだと傳へて居る。即ち是も亦はかり石の一口碑である。石占の方法は重さだけでは無く、或は高い處へ投上げて乗るか落ちるかを試みたり、或は繩などを持つて行つて長さを比べたりもした。其信仰が廢すると、次い

で又斯んな説明的の傳説も起る。江戸期の隨筆の石敢當説も、多くは之に近い附會の説明を信じたものであつたから、顧る價値が無いのである。

## 二五 赤蜂 鬼虎

靜かに考へて見ると、赤蜂本瓦も八重山の愛國者であつた。或は少なくとも獨立黨の領袖であつた。處が石垣村の士族には、之を征伐した宮古の勇士の血筋が多かつた。然らざれば反對派の長田大主が子孫である。島の記録は此人々と、中山政廳との間だけに交渉の有つたもので之と兩立せざる口碑は採用せられなかつた。其上に四百有餘回の春秋は此事蹟を蔽うて居る。しかも昔の島の酋長にして所謂酒色に耽り下を虐げた者は、赤蜂一人には限らなかつた筈である。他の島々に對しては別に無法を働いたのでも無い。年貢は以前とても沖繩へは納めて居なかつた。尙眞大王の征服欲以外に、自分は彼の所業が叛逆と爲るべき理由を知らぬのである。

赤蜂滅亡して四十年の後、與那國島には又鬼虎の亂なるものが起つた。鬼虎はもと宮古の狩俣村の者で、飢饉の歲に粟一斗で與那國へ賣られたと云ふ説が有る。然らば彼も亦一個外來の篡奪者であつた。附近の諸島が既に王化に潤うてしまふと、斯んな懸離れた島の謀叛人までが征伐を受ける。多くの勇士は功有つて賞せられたと謂ふよりも、寧ろ賞を得んが爲に其功を立てたやうに見える。西表の島の古英雄祖納堂の如きは、身の長六尺猛勇膂力ありとあつて、彼自身が既に赤蜂鬼虎の類であつた。天色清明の日に高山の峯に登り、遙かの西天に小島有つて雲の如く又霧の如く、波濤の間に隱見するのを望んで大に喜び、急に數十人の精兵を船に乗せて、攻めて討取つたのが與那國であつた。其酋長二三人を擒とし、中山に捷を奏して其支配の下に附けたとあつて、結局後援者ある第二第三の鬼虎は子孫までも繁昌し、孤島は一人の赤蜂が居なくてもやはり亦征伐せられたのである。

赤蜂は八重山の語では、アカブザーと呼んで居る。ブザーは蜂を意味し同時に又平民を意味して居る。平民と士族との差別の八釜しく爲つたのは、弘治十三年の平定から後の事らしい故

に、恐らく先住民の最も永く反抗したものを、ブザーとは呼んで居たことであらう。赤ブザーと本カワラとを、二人のやうに書いた歴史もあるが、其行動の跡を見れば一人である。さうしてカワラは前にも謂つた如く、島では酋長を意味する古語であつた。

誠に赤蜂は怖るべきカワラであつた。威風赫々たる宮古の仲宗根豊見親すら、一時は謀計を以て歎を之に通じて居た。川平かわひらの仲間みちけも終に彼が爲に殺された。後に御嶽の神に爲る程の美宇底みうて獅嘉殿しかだのさへ、遠く波照間の島に鋭鋒を避けて猶殺された。獨り長田の大主のみは古見の山に身を潜め、辛うじて時節の到来を待ち得たけれども、殆と源頼朝以上の艱苦を嘗めて居る。彼の二人の弟は先づ殺され、美しい妹の二人の中、眞乙姥まいつばは助かつたが、古乙姥こいつばは赤蜂の妻と爲つて、後に夫と共に誅せられた。政治の不幸が家庭に及んだ點は、我々の戦國時代も同じであつた。

此裏面には又宗教の争闘があつた。八重山も沖繩と同じく巫女の神道であつたが、部落の隔絶する如く信仰の系統も別であつた。赤蜂征討の船軍には、特に君南風きみなかぜと稱する久米島の巫女の長を乗組ませ、船先に立つて朝敵退治の禱を捧げ、將士の勇を勵まさしめたのには仔細があつたらしい。久米島は單に土地の八重山と最も近いのみで無く、互に姉妹の御神を祭ると云ふ傳へもあつて、本島の君々よりは幾分か縁も近かつた。それでも愈四十六隻の中山の兵が、石垣の濱に上陸しようとする時、婦女數十手に樹枝を持ち、天に號び地に呼ばはり、呪罵萬般にして法術を行ふかと思はれ、味方の士氣も爲に頗る沮んだと記してある。それ故にこそ眞乙姥が忠誠の情から、無事の凱旋を沖繩軍の爲に禱らうと申出た時にも、一艘たりとも後れて那覇に着くならば、曲事たるべしと云ふやうな難題を掛けられた。即ち彼女をなほ赤ブザー方の巫女と、疑つて見たのである。幸ひにして美崎御嶽の神徳と、多田屋おなりの助力とに因つて船は悉く恙無く還つたので、二女は相次で大阿母即ち巫女の頭に命ぜられ、爰に始めて聞得大君の神道に統一せらるゝことになつた。

しかも大濱の百姓たちは、今以て村の殿内に赤蜂を祭つて居る。赤蜂實は死せずの傳説さへさゝやかれて居る。阿蘇の金八坊主が屠られて猶祭らるゝ如く、大隅の大人彌五郎が、祭禮の

行列に刀を差して擔ぎ廻られるやうに、鬼ながらも彼はなほ慕はれて居る。

## 二六 宮 良 橋

八重山の神代は第十五世紀の終、宮古の豊見親が沖繩の兵船を嚮導して、石垣に攻め寄せた時分まで垂れ下つて居る。即ちこの赤蜂の騒亂なるものも、つまりは所謂神々の東雲であつた。島々には二十何所の御嶽があるが、一半は唯祭神の御名に由つて、其由來の至つて古いことを知るのみである。或は又之に事へた美女と英傑との物語も有るが、彼等は既に其信仰を異姓の民に譲つて、遠く雲煙の彼方に去つたものが多い。オーン(嶽)とファオーン(御子嶽)との關係の如きも、今では全く不明に歸して居る。祀る人が屢々改まつたからである。

此間に於て活々とした新しい歌が又起つた。節には大昔の人のすさびも遺つて居るらしいが之を承繼いで花やかな粧ひをさせたのは、亦次の代のピラマ(若殿原)であつた。琴は石垣一島

に今十四面ほど有る。其中の唯一面が、ヤマトの三越呉服店から取寄せた五尺八寸のもので、他は悉く島の樂人が、島の桐を以て永い間に作り上げた傳來の名器である。沖繩の制と略同じく、我々の用ゐるものより四五寸も長い。三線の方でも、目下輸入する材料は殆ど蟒蛇の皮ばかりで、何れも黒木其他の堅い材を利用し、島の内で立派な樂器を造つて居る。島人が音律に精しいのは、全く天性であらうと言はれて居る。閑だと云ふだけでは斯んな細工は出来ない上に、此等の樂器の制は共に近昔に、沖繩の方から移したものである。神の發明では無いのである。

實際此島の生活には、せめては新しい歌や樂器を以て、慰問でもしてやりたいやうな不幸が有つた。獨り戰亂の悲しい思ひ出のみでは無い。嵐や海嘯や怖ろしい疫病などが、其後幾度か歎きの島を訪れた。朝夕の水汲む業さへ辛かつた。或年には鍋で煮るべき物が全く盡きて、薯蓣盗人が島の眞中に、寧ろ殺されたいと横はつたこともあつた。憂を忘れるには歌と音樂に優るものは無かつたが、只其惠澤が亦全島に及ばなかつたのである。島には我々の白拍子盲法師の

如く、之を職業として流派を分つ者が居なかつた代りに、士族に非ざる者が古曲を保存し、又は之を發達させることは許されなかつた。同じ所謂ユカルビト（上流）の中でも、婦人は又琴三線にも手も觸れなかつた。鳥々の歌には早い又は緩やかな、舞の手が必ず附いて居た。一揃ひの舞衣裳は何れの村でも、村として之を備へ付けてあつた。しかも其面白い舞を舞ふ者は、悉く皆無系無姓の百姓の、髪黒く色白き好い娘のみであつた。喜舎場永珣君の調査に依れば、石垣の藏元から任命せられて、遠く近くの村々に在勤した役人の士族たちが、此等無数の鳥ぶりの歌の作者であつた。中にも青色の鉢巻に紗綾の大帯をした、目差と稱する若い輔佐役が、艶麗なる多くの戀の曲を残して居る。歌に表れた涙と溜息との主は、何れも舞に巧なる平民の娘であつた。即ち奈良朝の淺香山の采女のやうに、出でゝ貴族に給仕した前代のミヤラビであつた。

宮良の里は既に片田舎と爲つて、南に漫々たる蒼波に面して居る。曾ては蝦夷の日高の沙留と同じく、爰に風流のカワラが居を占めて、幾多の宮童の歌を養つたものらしいが、明和の大

津浪に故の民の種は盡きて、今は幽かなる口碑も遺つて居らぬ。村の西の荒野を、宮良川は靜かにひる木林の蔭を流れて居る。歌に詠まれたヤクヂャマと云ふ蟹が、ひる木の實と同じ色の紅い爪を、三線弾くやうに上下して居るのも此岸である。干瀬の大きな石を研つて來て、茲に架けた宮良橋は、鳥の一つの名所である。四十年前に巡視に來た大和御主前が、

珊瑚疊み作す五橋材

鶴葉千株短くして苔に似たり

是れ神仙の下り遊ぶ處なる莫らんや

萬年の青髻流に映じ來る

と詠んだ萬年青岳は、此五枚橋の川上に遠く、萬古の愁の色は今もなほ神祕に包まれて居るがある一つの事件があつて以來、次第に島も今の世と爲つたと謂つて居る。それは最後の宮良のミヤラビが三人連で、夜深く石垣の村から戻つて來ると、之を戒告せんとして村の青年の群が此橋の袂に待つて居た。それが怖ろしさに下流を徒涉しようとして、浪にさらはれて三人なが

ら溺れた。手を繋いだまゝ濱に死んで居たさうである。この悲惨な出来事が昔語となる頃には島の藝術も淋しくなるだらう。花染手拭の色の褪せるやうに、詩人は老い歌は古くなつて行くだらう。併し此が爲に新しい力の日に豊かなるを恨むには及ばぬ。元來八重山の音楽には、世の始から悲調があつたのである。

## 二七二 色 人

ナピントウは路の右手の海際に、僅かの木柱を負うた崖の岩屋である。毎年六月穗利祭の二日目の暮方に、赤又黒又の二神は此洞から出て、宮良の今の村の家を巡つてあるく。必ず月の無い夜頃を擇ぶことに爲つて居る。夜どほし村の中をあるいて、天明には又洞の奥に還つて行くと、次の日は村の男女が此に參詣する。佐事と稱する六人の警固役が、杖を突いて其途に立つて居り、常々行ひの正しい者で無いと、何と言つても通ることを許さぬ。

宮良の人々は神の名を呼ぶことを憚つて、單にこれをニイルピトと謂つて居る。それを赤と黒と二色の人と云ふことであると謂ふが、ニイルは即ち常世の國のことだから、是も遠くより來る神の意であらう。此村の舊家の前盛某が、平日は此神の装束を嚴重に預かつて居る。木を削つて作つた怖ろしい面で、赤は黒よりも猶一段と怖ろしいさうだ。茅や草の葉を身に覆うて人が此面を被ると云ふことだが、自分は信徒に對する敬意から、強ひて拜見を求めなかつた。實際新宮良の住民は、祭の日には人が神と爲ることをよく知りつゝ、しかも人が神に扮すると云ふことは知らぬやうである。

此夕は家を清め香を焼いて、早くから神の來臨を待つて居る。二色人が前盛の家へ來て、謂ふ詞は一定して居るが、其他の家々では形式が色々ある。不幸の有つた者は慰める。無事の者は激勵する。さうして何れも次に來る年の、更にめでたく又豊かであることを、親切に且つ面白く、謂つて聞かせるのださうである。初春に我々の門に來る春駒鳥追、其他種々の物吉ほぎ人と違ふ點は、單に家主が豫言者の前に跪いて、一句毎に丁寧に其受答へをするばかりでは無



い。彼等は之を直接に神の御詞と信するが故に、如何な事が有つても村外の者に、其文句を知らしめぬ。是非とも之を聴かうとすると、うそを教へるさうである。

しかも彼等の間に於ては、最も精確なる傳承が有る。村の青年の強健にして品行正しい幾人か、毎年新たに選ばれて祭の役を勤める爲に、其練習を準備をして居る。殊に赤又黒又は式の間一切酒食を口にせず、終夜踊り且つ歌ふ骨折の役であれば、兼ての精進も一通りで無いがそれが又男として此上も無い面目と考へられて居る。老人などの此祭を大切に思ふことも、殆ど想像を越えて居る。ゆかしいなつかしいと云ふ人間の感情の全部を、氏神に集注すると謂つても可い。夜も早東雲に近くなり、愈々もとの洞に還らうとするのを見ては、又來年もおはしませと、落涙する者すらも尠くは無いさうである。

宮良の二神は新城の島から、此村の前濱に上陸なされたと云ふ昔語りもある。併し此村は明和八年の大海嘯の後に、悉く小濱の島から移された民である。草分と呼ばれる、前盛氏でも、第一世の仁屋が八十三歳で歿したのは、ほんの百年前の文政元年である。疑ひも無く故郷の島か

ら持つて來た祭であつて、現に又其小濱にも新城にも、西表島の古見にも、此と同じ祭が今に行はれて居る。石垣島の方では川平と桴海の二村に、舊の八月又は九月の己亥の日、よく似た儀式があつて之を「まやの神」と名け、マヤとトモマヤとの二神が出現する。マヤは方言に猫を意味する所から、普通は牡猫牝猫の面を被つて來ると謂ふが、舞にも詞にも猫らしい信仰は現れて居らぬ。阿檀の葉の蓑を着て、蒲葵で編んだ笠を深く被り、戸毎を巡つてやはり明年の祝言を述べる。其章句には農作の道を説くことが多く、沖縄本島のミセセリなど、共に、澤山の古い言語が、此中に保存せられて居るらしい。

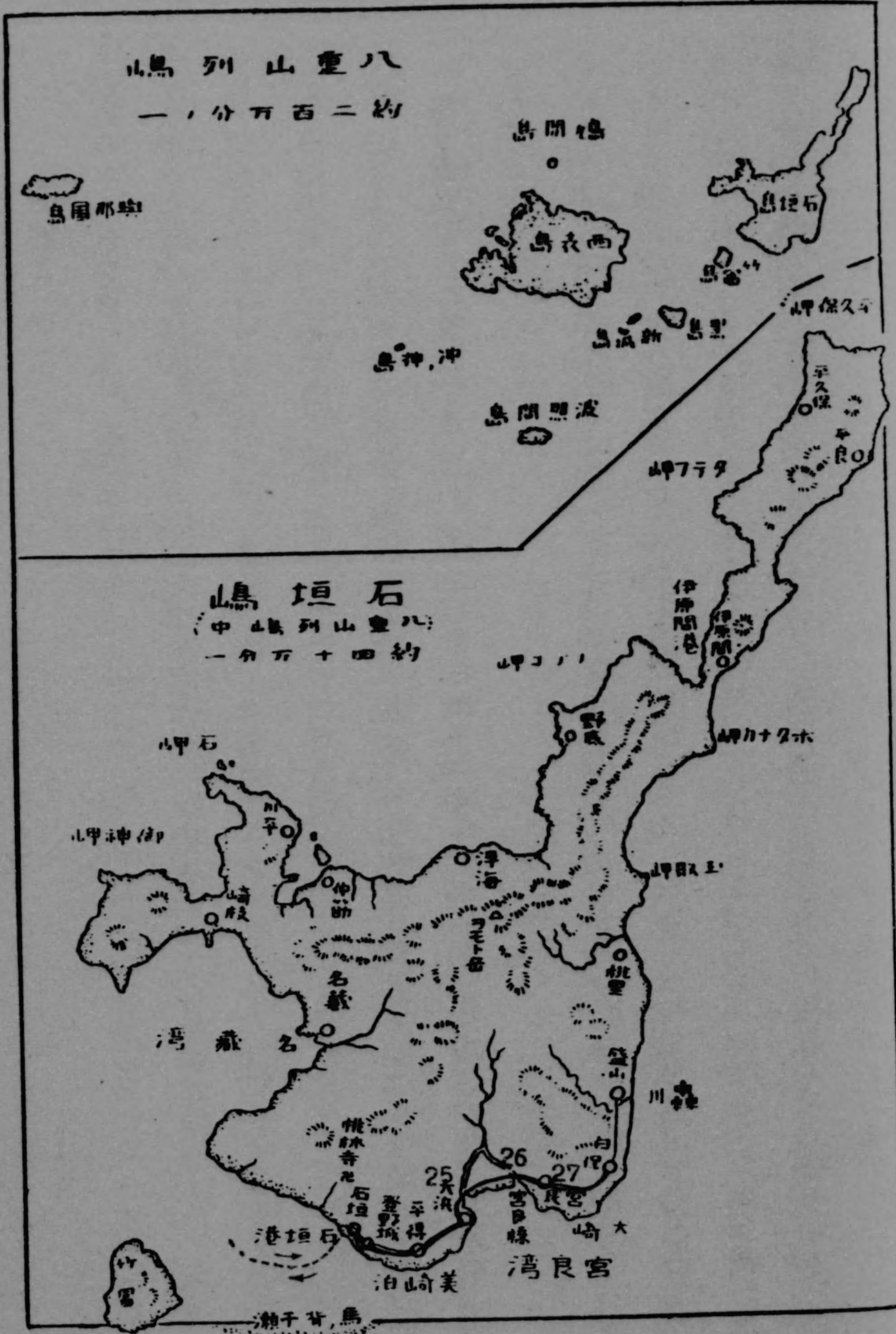
我々は無邪氣な童子等の口を假りて、せめては春の初には耳に快い祝福の言を聴かうとしたが、根本に於て既に絶つべきものを忘れた爲に、是も亦古臭い戯れごとく爲つてしまつて、正月は更に不安を新たにす。之に比べると絶海の小島は幸であつた。都鄙の區別を教へる講師も國司も居なかつた故に、永く神の御幸の昔の悦ばしさを味はふことが出來た。さうして其神は又果知らぬ海原から、天に續いた地平線の向ふから、安々と其小舟を島の渚には漕寄せるこ

とを得たのである。

二八 龜恩を知る

南々と謂つて居る中に、もう引返すべき汽船が入つて來た。石垣の端舟は帆ばかりが力で、只浅い灣内を右左にまぎつて行く。其間に見送りに出てくれた岸の人は、一人づゝ還つてしまひ、海を曇らしむる雲の影ばかり、次第に多くなつて來る。晴れて水底に日の光のさし込む朝ならば、蒼白い砂地の處々に、深緑の珊瑚岩が二尋ぐらゐ迄は覗かれるのだが、けふは一圓に只淋しい灰色である。昔の大津浪の日の早天には、稍強い地震があつて潮は遠く退き去り、五彩の光眩き此海底の祕富が、悉く白日の下に露れたと云ふことだが、今はそれも喚び覺し難い夢のやうに感じられる。

本船に乗る迄に、もう天氣はすっかり悪く爲つて居た。此浪では今夜はとて出せませぬ。



明日の又今頃迄斯うして繋つて居ますから、も一度此傳馬で上陸なされては如何と言つて來たが、大抵の客は舌打ちなどをするばかりで、或は傳言を頼んだり、刻煙草を取寄せたり、碁盤を借りたりして、還つて見ようとは言はなかつた。眼の前に毎日見て居ながら、終に渡つて見ることが得なかつた竹富の島は、砂濱以外に何物も無いかのやうに、寂莫として船の右手に横はつて居る。もう今夜は月も遅い。それに濕つた風が甲板を吹いて、永く立つて別を惜むことも出来なかつた。

萬年青は千古の靈山であつて、今も尋常の旅人には、只遙かに山の姿を仰ぐことを許して居る。しかもその裾野の一角が、殆ど全部の八重山文明の舞臺で、其尖端の最も低い臺地に據つて、石垣四箇の邑落は在るのである。ケビンの窓の圓硝子越しに、折々首を擧げて覗いて見ると、船は揺くとも思はれないで、干瀬に續いた陸地の一文字が、譬へばアイヌの髭箸の如く上へ下へと動いて居る。此があゝの莫大な戀歌の國、利害と人情との無暗に錯綜した、泣いたり怒つたりの浮世なのか。何だあかりがたつた七つしか見えないぢやないか。僅かな者だけが餘

分に利巧なばかりに、此島も常に苦勞をして居る。さうして不必要に早く老いて居る。

只些しばかり世間を知つた不幸ほど、始末の悪いものは無い。もう此社會には新しい不思議が現れて、人の心の向き方を變へるやうな、機會はまあ無いものと私などは思つて居た。處が人間界にはまだ見盡されぬ隈があつたのである。自分等より二船ほどおくれて、前の富士屋旅館の女主が、八重山から引き揚げて来てこんな話をした。虚誕だと思ひなはるなら、思ひなはつても仕方がありませんが、私が船に乗りますと、大きな龜が三つで、送つて来てくれましたよ。

みんなが一所に見たのですから、今度誰にでも聞いて御覽なさい。役所の人達や女たちも、同じ傳馬で賑やかに送つて来てくれました。おいおかみ、僕等こそ斯うやつて見送りをするがあれ程助けて置いた龜はどうだい。どうぞ御無事でとも何とも言つて來ないぢや無いか。だから龜を助けるなんか詰らぬ事なんだと、言つたか言はぬかに舳先の方に乗つて居た誰かど、あつ龜が出たと大きな聲で申しました。私が見たときにはもう二番目のが、斯うやつて手を動か

して船のすぐ脇を通りました。それから又一つ今度は少し小さいのが、背中を出す位にして蒸汽に乗る時まで附いて來ましたといふ話である。

是には蒼くなつて驚かぬ者は無かつたさうである。ちようど自分が淋しく別れて來たあの海だ。常は海龜などの入つて遊ぶ場所でも無い。卵を産む季節だけは、この近くの濱にも上つて捕られるのを、土地の漁師は料理して肉を賣つて居た。其を助けて放すやうに爲つてから、何時でも先づ富士屋へ擔いで來た。門から中へ擔ぎ込んだからは、値が高からうが、安からうが買はずに返したことは無かつたさうだ。其爲に三年あまり、一枚だつても新しい衣類はこしらへたことがありますんと謂つて居る。

何でうそだと思ふものかおかみさん。おかみさんは寒國の生れだから知るまいが、日本の大海にもそんな龜が昔は居たのだ。浦島でも山蔭の中納言でも、氣を長くして居た爲に、ずつと立派な答禮を受けて居る。おかみさんが女の癖に鐵砲をかついで、島で鳥打などをしてあるきながら、龜だけは性の有るものと思つて助けたくなつたのも、又内地の町の年寄たちが、小さ

な石龜でも放さうかと思ふのも、誰も知らない不思議の遺傳が有るからで、其が又暖かな南の海で無ければ、最初から經驗することの出来なかつたことなのだ。我々がとうの昔に忘れてしまつたことを、八重山の人たちは今ちようど忘れようとして居るのだ。

## 二九 南波照間

西常央翁にしつねなかろうから聞いたと、南島探險記には書いてある。波照間の島は即ちハテウルマで、うるまの島々の南の果の、意味であらうと云ふことだ。なるほど氣を付けて見ると、八重山郡の東の海には多良間があり、宮古群島には來間島あり、沖繩の西南に近く慶良間があり、更に大島に續いて佳計呂麻の島がある。南北三つのエラブ島も其轉訛かもしれぬ。語尾のよく似た島の名が、此ほど迄多いのは偶然ではあるまい。或は曾て島をウルマと呼ぶ人民が、爰にもやまとの海邊にも多く榮えて居て、自然に都の歌や物語にも、「ウルマの島の人なれや」など、口ず

さまれるやうに爲つたのでは無いか。さうで無くても昔なつかしい言葉である。

波照間島は石垣から西南、猶十一里餘の海上に孤立して居る。此から先は只茫々たる太平洋で、強ひて隣と謂へば臺灣が有るばかりだが、しかも茲へ來れば更に又、バエパトロの島を談ずるさうである。バエは南のことで、我々が南風をハエと呼ぶに同じく、パトロは即ち波照間の今の土音である。この波照間の南の沖に今一つ、税吏の未だ知つて居らぬ極樂の島が、浪に隠れてあるものと、かの島の人は信じて居た。

昔百姓の年貢が堪へ難く重かつた時、此島の屋久のヤクアカマリと云ふ者、之を濟はんと思ひ立つて、遍く洋中を漕ぎ求めて終に其島を見出し、我島に因んで之を南波照間と名づけたと傳へて居る。徐福が大帝の命を承けたのとは事かはり、此は深夜に數十人の老幼男女を船に乗せて、竊かにその漂渺の邦へ移住してしまつた。其折に只一人の女が、家に鍋を忘れて取りに戻つて居る間に、夜が明けかゝつたので其船は出去つた。鍋搔と云ふ地は其故跡と云ふことに爲つて居る。取殘されて歎き悶え足摺し、濱の眞砂を鍋で搔き散らした處と謂ふのである。

新たな島を求めんとする心は、人の世中が住みうくなる更に以前から、久しく島人の間には傳はつて居たものだらう。さうで無ければ太古の時から、既に此世は住みうい處であつたのか。兎に角にどの海のどの小島にも、人が渡つてもう住んで居る。島は盡きても求める心は絶えなかつた。ひとりこの波照間のみでは無い。沖繩でも南に大海を望む具志頭村の銀河原に、俊寛僧都同系の悲惨な話が有つて、磨小塘ウサギトモの遺跡は亦南の果の島の鍋搔と對して居る。昔此里に住む夫婦の者、家計の不如意を愁ひて居る折柄、一人ある僕、釣に出で、颯風に遭ひ、珍らしい島に上つて數月を過した後、或日南の風に乗じて還つて來た。こんな結構な島があります、御伴をして参りましょうと、五穀の種や色々の道具と共に、既に女房をも乗せ了つてから、僞つて主人に向つて、石臼を持って來てくれよと頼んだ。主人は急ぎ戻つて臼を持つて出て見ると、もう其小舟は沖中に漕ぎ出して居て、追付くことも出来なかつた。女房は涙の聲を張揚げ、悪い僕に騙されて、私ばかり斯うして連れて行かれます。聞けばあの島には大きな蘆が茂つてゐるさうな。其蘆の莖を採つて本を切り末を切り、海に流したのが此濱に流れ着くならば、私は

まだ生きて居ると思つて下さい。其が來ぬやうに爲つたら、死んだと思つて下さいと、泣いて約束をして汐路遠く往つてしまつた。亭主は只ぼんやりとして臼を此水中に投込み、還つて來たと云ふのはしようも無い話だ。

併し此話は又一方に、今昔物語の土佐の妹脊島の話にも似た所がある。船で田植に行く幡多郡の海岸の農夫、苗と兄妹の子供とを船に乗せ、一寸家に戻つて居るうちに風が吹いて、船は沖に出てしまつた。二人ばかり其島に漂着して、せん方も無く其苗を植ゑて、後に同胞で夫婦に爲つたと謂ふのである。臺灣の生蕃には殆ど各蕃社毎に、之に似た兄妹漂流の事件を以て、部落の始とする口碑がある。神の怒りの大水で、臼に乗つて居た二人の外は皆死んだ。其臼の隅に挟まつて居た穀物の種を播いて、新たに次の世の親と爲つたと傳へて居るのである。

波照間島の人類の始も、やはり亦災後の兄妹で、神の恵に依つて子孫を儲けたと傳へられる。但し爰では大水の代りに火の雨が降り、臼の代りに白金の鍋を以て、身を覆うて免れたと語つて居る。臼も鍋も要するに皆、ノアの箱舟に他ならぬ。時の大海原を如何なる風に乗つて、そ

の箱舟の物語が、廣く遠く西東には吹分れたのであらうか。今ではもう具志頭の濱に、蘆の莖も流れて來ず、有名な與那國の大草鞋も、誰が何の爲に流したかゞ不明に爲つた。併し此等の物語は、決して其全部が夢では無い。石垣島では波照間島のヤクアマカリに該當する英傑を、本宮良と謂つて今も深く慕つて居る。即ち慶長の南蠻船漂着の頃に、切支丹の故を以て刑せられたと云ふ名士である。本官良が自在に海上を去來して、さきくで妻を持つて居たと云ふ、其島々の名は何人も知らぬが、彼が携へ還つた葉の紫な南蠻萬年青だけは、今もなほ此島人の庭や石垣に、日に照つて美しく榮えて居る。

## 與那國の女たち

—

石垣島では與那國のことを、ユノーンと呼んで居る。かの島の人々は自らヅナーンと謂ふさうである。同じ八重山郡の内ながら、石垣からは何れの岡に登つても、與那國の島の姿を見ることが出來ぬ。西表の高い島山が、中を隔てゝ居るからである。さうして海上が五十幾里、冬は殊に浪が荒いと云ふが、それでも折々はあちらの船が、前觸れも無しに島などのやうにやつて來る。それに又便船すべく行く人や還る人が、もう來さうなものだと謂つて待つて居る。

自分が石垣島に上陸した日の午後にも、ちようど一艘の朝來た船が還るので、旅館の主人の

石本氏は、急に支度をして乗つて往つた。此人は數年前に上方から來て、島々の間で商賣をして居る。留守を預かる帳場の男は鹿兒島の者、其外に那覇から來た少年と、臺灣の打狗で生れてまだ内地を知らぬやまとの娘とが働いて居る。それだけでも既に珍しい取合せであるのに、若い美しいおかみさん、即ち土地で刀自と稱する婦人は、與那國の生れであつた。刀自の名はクヤマ、髪かたちは島風であるが、「いらつしやる」を精確に使ひ得るほどに、内地の語には通じて居る。

## 二

この若いクヤマを訪ねて、一人二人の與那國の女性が、夜分などに來ては物靜かに話をして居る。今朝の船で着いたと云ふ者も居たが、自分たちとは違つて少しも旅人らしい様子は無くまるで隣家の人のやうに落付いて居る。

二十七八の小柄の、子供のやうな口元をした女は、この石垣村の小實業家の某と云ふ人の、與那國の刀自であつた。某君が病氣になつて、とんとあの島へも往かれぬやうになつてから、一年に二度か三度、斯うして向ふから渡つて來ては、ゆつくりと遊んで還る。年は若いが手に入墨をちやんとして居る。北の方の島々の黥とは又形式が變つて居るらしいので、よく見て置かうと思つて眼を著けると、之をすぐに覺つて頻りと左右の手を揉み合せ、私などは昔者だから、ヤマトウシユメーにはをかしいだらうと、傍の人を向いて言つて居る。それでも根氣よく頼んで居るうちに、かなり高い聲を揚げてシヨンガネ節を歌つてくれた。さうして其歌の文句に表れた島の情合ひを、説明して聞かせようと力めてくれた。

今一人、どうしても歌つてきかせようとせぬ婦人が居た。年は又七八つも上であらうに、此方は手に入墨をしては居なかつた。行政廳が針突の風習を制止したのが、明治三十一二年の事と謂ふから、此年齢の女ならば、して居らぬ方が當りまへである。それに家柄なども稍良い方であるらしかつた。與那國では苗字よりも屋號の方が、普通に行はれて居ることは沖繩の農村



と同様で、家毎に尙一種の記號のやうな繪をもつて居る。それを集めた帳面を、自分が取出して見せると、皆で寄つて来て其中から、是が此人の家の符牒だ、これは其本家で、他所から來る人のよく泊めてもらう家だなど、一つ残らずに知つて居た。此婦人は只一人ある男の子を那覇の中學校に入れる爲に、試験を受けさせに石垣へ來たのであつた。首尾よく試験が通れば沖繩まで自分が附いて行く。與那國の島ではこれで三人目とかであると謂ふ。又親類には醫者の免狀を取つて、島に還つて開業をして居る者もある。其人の刀自は香川縣の生れであるとも謂つた。さすれば所謂女護の島にも、既にやまとの女性が來て住んで居るのである。他の島々と特に變つたことは無いのである。

## 三

首里や那覇でも内地と一樣に、與那國に就ては徒らに奇抜な評判ばかり高いが、自分の聽い

て見た所では、實は爰も新しい日本國の一島で、弱い者が餘分の苦みをするると云ふ以外に、何れも特殊の社會組織が有るわけでは無いやうだ。唯やまとなどに比べると今一段と、歴史が新しく昔が近い爲に、まだゴンボウを大切にする風が、少し残つて居ると云ふばかりである。ゴンボウとは何であるか。はつきりとした意味は、自分にも説明し難いが、少なくとも與那國の島では、島人を父とせず生れた子を、さう呼んで居るのである。那覇の色町などでは、只の浮氣と云ふ意味に此語を用ゐて居るらしいが、多分はもと假の妻と云ふやうな心持であつたのが、轉じてはさうして生れた兒の名にもなつたのであらう。

與那國には限らず、近い昔までは琉球の島々では、在番役人の子を産めば、平民が士族に爲つた。さうして士族には經濟上の特權があつた。それ故に最初から、或時限りの刀自なることを承知の上で、滞在の人にかしづくことを厭はなかつたのである。今はもう其様な誘因が、勿論何も無いのであるが、生活は至つて簡易なり、女は如何なる境遇に在つても働きさへすれば生きられる故に、やはり安心して色々の子を育てるのである。わざわざゴンボウを産ませる爲

に、此島に渡つて来る人は有る筈が無いのだが、海が荒れたり用事が片付かなかつたり、今も昔の如く圖らざる永逗留をするうちに、自然は此の如き大きな仕事をしてしまふのである。島の現在の有力者は、何だか大部分はゴンボウの子孫であるやうに、自分に話した人もあつた。そんな理由は無からうと思ふが、兎に角外部から、何の攪亂をも受けなかつた家の血が、平和なれども又平凡に流れ易い傾きはあつたかも知れぬ。それだけでは殆ど何れの離れ島でも、免れ難い通勢であつて、たゞ島が小さいほど其結果が早く見えるのかも知れぬ。

現在此島で指折りの物持の中に、一人の婦人が有る。噂によればずつと以前の、駐在巡查の刀自であつた。別離に臨んで幾人かの子供と共に、若干の金子を其母の手に遺して來た。其高は何れ莫大では無かつたに相違無いが、島には現金の入用が無暗に多く、しかも人は皆義理が固い爲に、少しの危険も無しに其元金が次第に成長した。目前に斯う生活の例があるに由つて旅の人をゆかしがる氣風が今に止まぬのであると云ふ。ところがをかしいことには、此噂を自分にして聽かせた男も、第二の噂に依れば此島に七歳ばかりの落胤があつて、やはり若干の金を其母に残して、間も無く遠方へ去つてしまつたと云ふことである。

## 四

沖繩の文人の先島情調を説く者は、必ず其例としてウヤンマーの一曲を擧げるが、八重山は歌の國だと云ふ世評を悦ぶ島の人にも、之を以て彼等の音楽を代表せしめることだけは絶対に承認しない。ウヤンマーのアンマーは阿母加奈之などの阿母と同じく、地位ある婦人のこと、ウヤは親方親雲上などの親と同じく、つまりは令夫人とも譯すべき沖繩の語であつて、チェンバレンが琉球語研究の附録には其全譯を載せて、此語をマイルレイと譯して居る。任期三年の八重山在番が、船出に臨んで假の妹脊の永い別を悲み、頑是無い釋兒に取継られて涙の袖をしぼると云ふ、至つて單純な趣向であるが、歌の章句には南國のペソスが有る。しかも八重山人の言に従へば、第一ウヤンマーは此島の語では無い。石垣でならばカリヤヌアンマと謂はねば

ならぬ。假屋は即ち在番の官舎のことである。第二にはこのチョーギン(狂言)の中の歌がまがひ物で、中にたゞ二つの本の歌も、元來石垣首邑の藏元の歌で無く、何れも與那國のシヨンガネ節であり、その與那國には沖繩の官吏は在勤しなかつたから、乃ち別人の爲に發した愛慕の聲であつたのを、史實に反して此文學は横取りしたのである。

いとま乞ひともて(思ひて)

持ちゆる盃や

目なだ(涙)泡もらち

飲みのならぬ

是がその問題の歌の一つである。更に今一つの歌は、

片帆持たしは

片目のなだ(涙)落し

もろ帆持たしは

もろ目のなだ落し

と云ふのであるが、自分も現に與那國の女が、これを歌ふのを聞いたのだから、證人に立たざるを得ない。しかも此の如き剽窃は寧ろ孤島の面目であつて、淋しい島の女の無始の昔からの哀愁が、弘く世上の歌を好む人々をして、胸躍り袂沾はしめたのは嬉しいことだと思ふ。殊にはこの日本の果の果の島まで、曾て大いに都市ではやり、北は奥州の「さんさ時雨」の曲となつて傳はつた「しよんがえ」の歌の節が、一度は爰まで運ばれて更に又、沖繩の湊町に戻つて來たことをなつかしく感ずる。薩摩の海門に於ても、久しく土地の名物として同じ鄙ぶりがもてはやされ、「雲の帯してなよく」と云ふ歌は、多くの人が聽いて知つて居る。沖繩近海の船歌にも今もチョンガエと云ふ囃子がある。海の荒し子どもはいつの世にか、遙々と之を携へて與那國を訪ひ、今歌ふ少女の曾祖母あたりを、慰め又悲しましめて居たのである。

## 五

所謂假屋のアンマの生活は、昔は殆ど島毎にあつたものらしい。島の平民の娘にして、眉目清らに生れた者は、必ず何人かゝ勸めて化粧させ、新しい衣を着せて、目に立つ場處で布を織りつゝ、新任の官吏に見えしめた。狂言のウヤンマーの如く男の兒を儲けて、幸福な士族の家の先祖と爲つた者もあれば、不幸にして老人にかしづき、後に淋しく別れてしまふ者もあつたさうだ。與那國などの遠い島では、與人と目差と二人の役人が、藏元即ち首邑の石垣島からやつて来て、やはり沖繩と同じ方法で、其在任期間の刀自を選定した。従つて島の女の別離の歌曲には、彼等の眞情から出たものもあれば、又音楽を愛する青年官吏から、強ひて此の如く歌はしめられたものもあるだらう。其人々は男も女も皆死去つて、今では歌だけが前の歴史を語つて居る。強い者が曾て勝つたと云ふ、さびしい歴史を語つて居る。

與那國では平家の一族の末と云ふ部落があつて、今尙在來の島人の子孫たちと對立し、平和の競争を續けて居ると言つた人があるが、果してさうであらうか。平家は北に四百里を隔てた南九州の山村から、島では川邊郡の十島を始として、どこへも上陸して遺蹟を留めて居る。モリは社地又は靈山を意味する普通名詞であるが、之を祭る島では悉く、行の盛友の盛などの神歌を存し、更に系圖が出来、又後裔が榮えて居て、系圖を否認すれば恐らくは決闘を申込まれる。海は一続きであるから壇の浦の船の數だけは、落人の漂著した例も有り得るのであるが、實は其後の六七百年も、彼等をして優美なる由緒を保存せしめる程に、島の生活は無事單調では無かつた。

たとへば石垣島に在つては、赤蜂本瓦が井底の痴蛙であつた爲に、宮古の仲宗根豊見親は、沖繩の船軍を嚮導して此島に攻入り、各村の舊住民を制御して之を只の百姓にしてしまつた。即ち石垣のユカルピト(優越階級)は、少なくとも其血の三分の二まで、宮古系になつたのである。之に反して與那國の島では、宮古出身と傳ふる酋長の鬼虎が、あまりに暴虐を振舞つた爲に、終に石垣からの遠征を受けて、忽ち全村の屈服となつてしまつた。其以前にも西表島の祖納堂と云ふ一勇士が、單に此島を發見したと云ふ理由のみで、攻めて来て占領した事實がある。

慶田城けいたじょうの村に今もある祖納堂の家の火神は、それから以後與那國の船人等が、來ては拜んで行くことになつて居るのは、恐らくは此家の支系が、永く與那國の島に土著したこと、恰も宮古の勇士の末が八重山の士族になつたのと、同じであることを意味するであらう。

石垣の村にも亦與那國のオーン(御嶽)と稱して、かの島の島人だけが詣で、は香を焼く靈地が、濱近くの人家の間に在つて、村では却つて之を顧みる者も無いのは、向ふへ移つて後に本家が絶えて、子孫があちらにばかり有る爲であらう。近くは明和の大海嘯、それに引續いての疫病流行で、石垣本島の人口は一時四分の一に減少した。其時は命令を以て附近の島々から無理に若干の民を此方へ移住せしめ、南に面した海岸の村々は、殆ど皆昔を知らぬ者ばかりが廢墟の土を耕して居るのである。此以外にも次第に死に絶えたり、強ひて連れて行かれたり、人が乏しい爲に不自然なる婚姻もあれば、家の盛衰も亦異常であつた。斯うした永い年月の交通往來を重ねて居るうちに、人の血は愈々混淆して、恨んだ者も恨まれた者も、たゞ忘却の一體となつてしまつたことは、恰もこの漫々たる大海の波濤の如く、永古に残るものとは、獨り

底知れぬ潮の力のみであつた。

與那國の女たちは、ほんの無邪氣な心持で、島の話をしたのであつたが、靜かに聽いて居ると幾らでも悲しくなる。生きるると云ふことは全く大事業だ。あらゆる物が此爲には犠牲に供せられる。しかも人には美しく生きようとする願が常に在る。苦惱せざるを得ないでは無いか。

## 六

なか／＼樂では無い島の生活ださうである。水は幸ひにして清い谷川が流れ、宮古のやうに降川おりがはを登り降る煩ひは無いが、如何にも風の強い島であつて、稻の實にならぬ年が何年も續くことがある。阿檀の芽だけは石垣でも食べると謂ふが、與那國では蒲葵の木の芽も食べておいしいと謂ふ。蒲葵の實も此島では食べる。海からも少しづつ食物を恵まれるが、たゞ困ることは金に代へるやうな生産品が少ないのに、外から買はねばならぬ貨物が、時世と共に増して來

ることである。豚でも鶏でも世間の相場を知らぬ爲に、折角繁殖させてから、まるで目算の違つた取引をするやうなことが折々ある。斯う云ふ境涯に於て、女などが外へ出て住みたがるのは無理で無い。殊に此島の婦人には強い所がある。甲乙の組合を分けて競争させると、道造りなどには篝を焼いて徹夜に働くこともある。運動會の催される日には、旗を立て、男たちを迎へに來る。役場にもめ事でもあつて、村の男の押掛けて來るときには、垣根の外は此に聲援する婦人で、一杯になるくらゐであると謂ふ。もつと南の大洋の島々の、女の地位風習など、考へ合せると、どうして又此様な、きつい氣性が根ざしたものか。はた又此が將來にどう云ふ運命を開いて行くものか。自分などにはとても判断をすることがむづかしい。

此島の風俗の中には、他の沖繩の諸島を中に置いて、始めて葦原の中つ國と、根原が一つであることを知るものゝ多いやうに思ふ。例へば門の口に文字の無い石敢當を建てる風、式日や葬祭の日に猪を屠る風などは、何れも大琉球の文化を透して見ないと、見馴れぬ我々にはあまりに異様に感ぜられる。言語に於ても亦其通りで、不意に行逢うては本の由縁を心付かぬ程に、

我々の常の話とはかはつてゐる。是皆久しい間、島と島とが母の交通を、杜絶して居た結果である。我々は曾て大昔に小船に乗つて、この亞細亞の東端の海島に入込んだ者なることを知るのみで、北から次第に南の方へ下つたか、はた又反對に南から北へ歸る燕の路を逐うて來たものか、今尙民族の持ち傳へた生活様式から、も一つ以前の居住地を推測する學問が進まぬ爲に如何なる臆斷でも成立し得るやうであるが、少なくとも此等の沖の小島の生活を觀ると、それは寧ろ物の始の形に近く、世の終の姿とはどうしても思はれぬ。即ち大小數百の日本島の住民が、最初は一家一部落であつたとする場合に、與那國人の今日の風習が、小島に窄すぼんだから斯うなつたと見るよりも、やまとの我々が大きな島に渡つた結果、今日の狀態にまで發展したと見る方が、遙かに理由を説明しやすいやうに思はれる。北で溢れて押出されたとするには、平家の落人でも無い限は、こんな海の果まで來さうにも無いが、南の島に先づ上陸したとすれば、永くは居られぬからどうかして出て來たであらう。さうして取殘された前の島の人を、必ずしも屢々想ひ出すことは無かつたかも知れぬ。假に此推測が當つて居たとすれば、我々は誠

に偶然の機會に由つて、遠い昔の世の人の苦悶を、僅かながらも此あたりの島から、見出し得たことになるのである。

先島各地ではつい近い頃まで、何か仔細が有つてか沖繩本島のことを、悪鬼納の三字を以て書現して居た。士族に取つてはその悪鬼納への渡海が、戦陣にも相當する苦しい役であつた。王命とあれば唐へも大和へも行き向うたが、三つに一つは其船が還らなかつた。たま／＼漂流して生きて戻つた者に、怖ろしい異國の島の話があつた。與那國の人たちはもう忘れたかと思ふが、毎年一度一丈二丈の大草鞋を作つて、海に流して外敵を畏嚇したと謂ひ、或は之と反對にそんな物が、何處からとも無く流れて來たとも傳へられる。斯うして五里三里の小さな孤島に閉ぢ籠り、限りある平和を楽しんだ時も永かつた。荒海は誠に堅固なる障壁であつて、之を守つて居れば外界の幸福と比較して、徒らに憂へ憤るべき場合も起らぬ筈であつたが、悲しい哉不老不死の藥は、島の内では求め得られなかつた。徐福の船は又新たに出で、蓬萊の島を求めねばならぬやうになつた。空しく待つ者と終に還らぬ者とに、島の民は再び二分せられんと

して居る。

## 七

民族去來の悠久の足跡は、とてももう分らぬ問題として置いて、自分は尙石垣の港の町を、五十里を隔てた與那國を知らうとしてあるいて見た。庭に佛桑花ぶつさうげの紅く咲く家に、まだ一人の與那國の女が居た。其名をナサーと謂つて不幸なるゴンボウの孤兒であつた。五つの年から母の島へは還つたことが無い。成長の後にある男に連れられて、與那國に住むつもりで渡つて往つたが、刑事事件が起つて又其船で男は引戻され、自分も終に獨り止まつて居ることが出來ぬので、石垣まで歸つて元のしどけ無い生存を繰返して居る。よく歌ひよく飲む妙な女だと云ふことを、幾度か土地の人から聞いただけで、自分は其以上の事を知る機會を得なかつた。

又一人の亞米利加へ往つて來た女がある。マクダ部落の貧しい家の外に、高く細い木の臼で漆喰にする土をこつ／＼と搗いて居た。あれがヴァンクラーバーと謂ふ女です。與那國の者です。

一つ此方に向かって見ましようかと言つて、親切な案内者がホーイと甲高い聲で喚んでくれたが、早くから知つて居たか、振向きもせねば頬の肉も動かさなかつた。物ごしはすらりと上品な女であつたが、如何にも氣の毒な悪いきものを著て居る。歸つて來た當座には靴もあり帽子もあり、仕事着と云ふ洋服も持つて居たが、二三年の内に追々破れてしまつたさうである。是は亭主に棄てられて戻つて來たと云ふばかりで、最初からよく無い經歷の女では無かつた。それに年も若くて美しかつた。親類の者がたびたび與那國へ還るやうにと來ては勧めるが、何としても之に従はぬのは意地であらう。今ではこの石垣島の生活にも倦んで居る。こんな位ならば何をしてなりとも、カナダに残つて居たものをと、折々は歎息するさうである。さうして是が後にはどうなつてしまふものか。やはり今までの多くの島の婦人の如く、早くしようもなく老いてしまふのでは無からうか。子を持たぬと云ふ不幸は、島に於ては殊に堪へ難いものゝやうに思はれた。

## 南の島の清水

むかし手にくだる、なさきから出でて、なまに流れゆる、ちゆ田の手水 (金武節)

昔手に汲だす、いつの代がやたら、水やなままでむ、澄みてをすが (同上)

沖繩では組踊の「手水の縁」が、めつたに興行を許されぬやうになつても、晴れて日の照る日に許田きよたの入江の村を通る者は、一人として昔其泉の側に於て、清水を手に掬して若き旅人に飲ましめたと云ふ美しい少女を、想ひ出さぬものは無いであらう。際限も無く古い親々の代から、一つ物語がしばしば其影を變じて常に清新に、幽艶の調は流れて永く絶えざること、恰も



此里の泉の水のやうであつたのは、是にも亦二つの源頭が有るからである。其一つは即ち清水を戀慕ふ島人の心もち、其二はどこまでも泉に纏綿した、村の女性の生活に他ならぬ。自分も前にも諸國の姥が井の由來について、少しく此間の消息を説かうと試みたことがあつたが、今度は又南の島を旅行して、もう一ぺん誰かと此話がして見たくなつた。併し問題は込入つて居り、私は中々忙しい。うまく簡単に説くことが出来ればよいと思ふ。

## 二

平和の緑の色に一樣に取包まれた沖繩の村々も、水の一點だけには著しい幸不幸がある。概して言へば新しい村ほど、飲水の不自由を辛抱せねばならんだやうである。那覇なども随分古い湊であるが、當初今日ほどの繁榮を豫期しなかつた爲に、近く良い井戸の在る家は誠に少なく、他の多くは入江の對岸のウチンダ(落ち平)の泉から、遙々と汲んで來て用ゐて居る。町を

貫く堀川に潮が満ちて、翡翠の往來が次第に稀になる頃、ぎいと梶の音をさせて入つて來るのは、すべて水賣の船である。酒屋の庫にあるやうな大桶に幾つも汲入れて、家々に水を配つてまはるのである。又漆喰をよくした町屋の赤瓦は、その第二の目的として是で雨水を受留める。其末をタンクに貯へて、お茶の水にまで使つて居る家がある。

郊外に出て見ると庭の木に斜めに繩を張つて、壺に僅かの雨の雫を集めようとした家もある。瓦葺きの多く無かつた時代には、是が最も普通の方法であつたらしい。八重山の石垣島などでも私の見たのは、福木の幹に一枚の棕櫚の葉を結びつけ、一尺ほど切残した葉柄の端から、樹下の小瓶へ雨水の滴るやうにしてあつた。先島は一帯に水が十分で無くて、島布なども多くは海の水を以て酒して居るのである。

## 三

井戸をカハと謂ふのは、必ずしも沖繩の諸島だけでは無い。九州でも弘く之をキカハと呼んで居て、飲水の供給が最初は皆天然の流からであつたこと、其流を堰き留めて水を一處に止住せしめたのが、即ちキと云ふ語の起原なることを示して居る。やまとの島で普通に見る掘り井戸を、宮古でも八重山でもツリカーと稱へて居る。釣瓶を以て水を釣る井戸の意味で、その釣瓶は蒲葵の葉を以て、巧みに鸚鵡貝のやうな形に縫うてある。大事に使へば一つが十日餘りも持つと謂ふ。此頃は葉鐵で作つた同じ形の釣瓶も出来たが、元の蒲葵で製したものは輕過ぎ、使ひ馴れぬ者にはとても水が揚らぬ。其ばかりか深い釣井でも、水は幾らも無くて折々は新たに湧くのを待たねばならぬことがある。斯う云ふ井戸へ村中から、汲みに通ふ者は他の多くの民族と同じく、悉く村の女たちであつた。ツリカーに比べるとウリカーの方が更に苦しい。ウリカーは即ち降りて汲む井戸のことで、宮古の平良などには此ばかりしか無いやうである。それも舊記には十何箇處と記したものが、中にはもう丸で出なくなつたのもあれば、洗濯にか用ゐられぬ濁り水もある。ほんの人家の片脇などに、追々に掘り窪めて九丈十丈と斜に降り

て行く険しい石坂を、石の稜が滑かになるまで、毎日上下して僅かの水を頭に載せて来る。それが昔から皆女であつた。中世島と島との怖ろしい戦の時八重山の島から捕はれて来て、深く危ふいスサカガー(白明井)の水を汲みに日毎に追ひ遣られた美しい娘が、身の薄運を歎き親の家を慕うた古歌が、今も尙宮古の島には傳はつて居て、其清水は既に涸れたと「古琉球」の中にも書いてある。

## 四

或は斯うした水までも足りなくて、遙々船に乗つて貰ひに来る島もある。沖繩本島では國頭の古宇利の島、先島では多良間の北沖に在る水納の島などが、最も水に乏しい土地として知られて居るが、大きい島でも村によつては、早の苦みを悩みぬく者が稀で無い。その色々の例を見た後に、島尻地方などの岡の根方に、珊瑚岩層の割れ目から、澄み徹つた清水が滾々として

湧き且つ流れて居るのを見ると、實際誰でも神の恩恵を考へずには居られない。中世の南山王國の廢墟は、今は神社と公園と小學校とに爲つて居る。其石崖の東北隅に立つて見下すと、屋古の古村の共同井がよく見える。大木の蔭に石を疊み、泉の口では水を汲み、其側では器を洗ひ、其下では衣を滌ぎ、其末では馬を冷し、數十人の娘たちが面白さうに一所に働いて居る。カンチャーと名づけて旅の鑄物師が來ては仕事をする小屋なども、瓦で葺いて流の傍に建つて居り、なほ下流に行くと川に橋があり、水車も此水に由つて廻轉し、數町歩の稻田も此から灌漑せられて居る。凡そ一村の生活は皆此泉を中心とするかの如く、結局水汲み場の唯一箇所であるのも、寧ろ部内の親睦を増すの途であるやうに思はれた。

琉球國舊記其他の古い書物に、由來を傳へられた嘉手志川は、即ち此清水のことである。屋古は名を改めて今は大里と呼んで居る。古くは南山城の西の麓、即ち絲滿の港から登つて來る大手の口に在つたのが、此泉を慕うて次第に丘の北側に移つて來た。嘉手志は沖繩語で、人の集まつて來ることを意味すると謂ふが、果してさうであらうか。土地の一説では、古くは又カ

タリガーとも稱へた。即ち傳説の存する泉と謂ふことである。昔大旱の歲に人々船を仕立て、水を他處の岸に覓めんとして居る處へ、一匹の狗が全身濡れそぼたれてやつて來た。不思議に思つて暫く船出を見合せ、其狗を先に立て、林の奥深く入つて見ると、果せるかな此の如き立派な清水が湧いて居た。さうして狗は水中に入つて忽ちに石と化し、其石は今なほ泉の上に安置せられて、郷人の尊敬を受けて居る。古來の口碑は此の如くであるが、別に他村の靈泉にも同じ類の話がある上に、東方諸民族の間に於ては、是は寧ろ有りふれたる物語であつた。現に臺灣山地に住む幼稚なる部落の間にも、狗に導かれて清水を見出したと云ふ舊傳が、幾らとも無く存在するから、恐らくは此島に在つても亦、話の方が泉よりもなほ一層古かつたのである。屋古の語り井の歴史は、更に又南山王國の盛衰とも深い關係があつた。最後の城の主島尻大里按司は智慮の短い人であつた。佐敷小按司尙巴志が秘藏する名劍を所望の餘りに、此泉を興へて之に交易したと謂ふことである。尙巴志は泉の水を自由にし得るに及んで、自分に懐く者の田にばかり、之を引くことを許した故に、終には南山城下の民は未だ戰はざる前から、既に

敵の佐敷小按司に、歸服してしまつて居たと傳へられる。勿論是も亦物語ではあらうが、兎に角に泉の徳は神の徳であつて、兼て又王の徳であつたことが、島に來て見ると大方は想像し得られるのである。

## 五

所謂白鳥處女の傳説は、曾て高木敏雄君に由つて、其起原と分布とを説かれたことがある。神が人間界に配偶を求めたまふこと、鳥の形をして此世と往來したまふことは、至つて弘く且つ久しい傳承であるが、其が進んで三穗の松原や、近江の余吾湖の様式を取るに至つたのには又其地方に相應した何ぞの事情が有つた筈である。さうして沖繩の島では泉の神の信仰が、明白に物語の一要素を爲して居たことを認めざるを得ない。それについても王城朝薫たまぎすくの銘苴子めがしの一曲が、あまりに謡曲の羽衣に近いのは不本意である。沖繩の天女譚には、たしかに此島の地

方色が有つたのを、かの才子は輕々に看過してしまつた。

銘苴子は那覇より程近い西海岸、安謝の村の農夫であつた。遺老傳の一説に今の天久あめぐの聖現寺の神なる熊野權現と辨才天とを、顯し祀つたと傳ふる茗苴翁子と、恐らくは同じ人の事である。安謝の村では茗苴子の祠堂と謂ふものが、今も尙拜所の一つになつて居り、其由來談には謡曲の羽衣などには見られない、長い髪の毛の話が組入れられてある。茗苴子は或日田より歸りがけに、泉に臨んで手足を洗はうとすると、七八尺もある女の髪の毛が一すぢ、水の上に浮かんで居る。不思議に思つて折々其泉近くに身を潜めて窺ふうちに、終に嬋娟たる神女が衣服を樹の枝に脱ぎ掛けて、水に下つて頭髮を洗ふところを見付けた。仍て其衣を取匿し、搜してやると偽つて家に伴ひ還り且之を娶つた。後に一女二男を産ましむとある。其女の兒が稍成長して、弟の子守をするときに、泣くな、泣かぬなら、遣らうよ母の飛衣をと歌つた。六股の倉に、稻束の下に、置き古してあるからと歌つた。母の神女は之を聴き、夫の留守を待つて其衣を搜し出し、恩愛の絆を絶ち切つて、忽ち天界に飛び還つたと傳へて居る。